

# 2010 年度 「庄内セミナー」報告書



慶應義塾大学教養研究センター  
Keio Research Center for the Liberal Arts



# 2010 年度 「庄内セミナー」報告書

## CONTENTS

はじめに 2

「庄内セミナー」の概要 ..... 3

庄内セミナーについて 4

1. はじめに
2. 「知の共同体」としての大学—庄内セミナーを支える理念
3. 「未知」と出会う・「未知」を知る—庄内セミナーの趣旨・目的
4. セミナーのテーマ
5. セミナーの概要
6. セミナー・プログラム

庄内セミナー現地発表会 12

グループ・プレゼンテーション ..... 15

第1グループ「酒田未来航路図～観光と地域活性化～」 16

第2グループ「本間光丘の再評価」 31

第3グループ「最上川について」 42

第4グループ「つや姫の挑戦～山形県のブランド米戦略～」 54

OB「芭蕉は出羽の天狗を見たか—『おくのほそ道』から探る酒田の気風」 63

庄内セミナー活動報告会 73

資料編 ..... 75

# はじめに——新たな社会との連携を求めて

教養研究センター所長  
不破有理（経済学部教授）

2010年は10年にわたる研究が結実し新しい山形のお米「つや姫」が誕生、満を持して出荷された年でした。「つや姫」は温暖化の昨今にあっても、たくましく成長するように研究が重ねられたそうです。そして2010年は生物多様性条約締結10回目の国際学会が日本において開催された年でもあります。生物多様性を推進するための項目のひとつに水田の保護があげられています。水を湛える田は稲を育てるだけでなく、水田に生息する様々な動植物をも育みます。お米を育てた水田は、人間も共に育ててくれるのではないのでしょうか。

日吉キャンパスに位置する教養研究センターは、とりわけ地域に開かれたキャンパスとして長年、多岐多様な活動にかかわってまいりました。大学教育とはキャンパス内に限られるものではなく、社会・地域との相互関係を築きながら、学生を育て、教職員も共に学ぶことであると考えます。学生にとって、大学の4年間は社会に出る前に与えられた貴重な猶予期間です。この時期に自分の人生を考え、いろいろな人に出会い語り合うことで、社会で目にする多様な価値観に柔軟に対応できる人物として成長する必要があるでしょう。昨今の日本は課題が満載で、形容しがたい閉塞感があります。国際的に勢いを失いつつある日本の社会を担う学生たちに求められるものはなにか。学生を送り出す大学の責務として、慶應義塾がよりよい日本の将来のために学生を育てる務めを負っていることは言うまでもありません。

慶應義塾大学は残念ながら、現在は地方出身者が漸減傾向にあり、ほとんどが首都圏の学生で占められています。大学在学中に多様な価値観に触れ、試行錯誤し、自分なりの解決策を見出す体験を経る機会を提供することはきわめて有意義だといえます。3年目を迎えた庄内セミナーでは庄内の自然の圧倒的な美しさとともに、庄内セミナーで学ぶ楽しさを身体全体で味わいます。庄内から参加した学生が慶應の学生と共同でプロジェクトを組む体験を通し、初めて学ぶ楽しさを知ったと語ってくれました。これはセミナーを開催してきた私どもにとって大きな喜びです。わずか数日間の出会いと学びでありながら、学生は予想以上に大きな収穫を手にして帰ります。庄内における中間発表と慶應義塾における最終発表を終え見違えるほど成長した学生の姿を目にするのは、一教員として法外の喜びといえます。本報告書はその成長の証としてまとめられています。地理的にも離れ、学ぶ環境も異なる学生同士がグループメンバーと一つのテーマに絞りこみ、論文としてまとめることは、一人で発表するよりもさらに難しいことです。相互に連絡を取り合い、意見を調整することを学ぶことでようやく仕上げることができるのです。

このような学びの機会を可能にくださった庄内の関係の皆皆さまに心より御礼を申し上げます。また東北公益大学のスタッフの方々をはじめ、企画・運営にあたった慶應義塾の教職員スタッフ、調整費資金を提供していただいた慶應義塾に謝意を表します。今後、新たな大学・社会・地域連携の形を模索しつつ、この貴重な学びの場が発展的に継承されることを願っています。学生が「つや姫」のように、厳しい人生の天候の中をしっかりと成長するきっかけをつかむ豊かな場として。

2010 年度「庄内セミナー」報告書

## 「庄内セミナー」の概要

### 庄内セミナーについて

1. はじめに
2. 「知の共同体」としての大学—庄内セミナーを支える理念
3. 「未知」と出会う・「未知」を知る—庄内セミナーの趣旨・目的
4. セミナーのテーマ
5. セミナーの概要
6. セミナー・プログラム

### 庄内セミナー現地発表会



# 庄内セミナーについて

羽田 功（庄内セミナー・プロジェクトリーダー／経済学部教授）

## 1. はじめに

應義塾大学教養研究センターは、2008年度の鶴岡セミナー、2009年度の第一回庄内セミナーに続き、今回も東北公益文科大学を共催校として、2010年度に第二回庄内セミナーを主催いたしました。

庄内セミナーは、2010年7月31日の事前説明会を皮切りに、8月31日から9月3日に山形県酒田市にある東北公益文科大学酒田タウンキャンパスを中心として実施された合宿セミナーをメイン企画として、11月13日に慶應義塾大学日吉キャンパスで行われた成果報告会にいたるまで、関連企画も含めるとほぼ半年にわたって行われました。

ここでは、このセミナーを支える理念、セミナーの趣旨・目的、テーマ、概要、プログラム（プレ企画・合宿セミナー・成果報告会）、関連企画についてご紹介したいと思います。

## 2. 「知の共同体」としての大学 ——庄内セミナーを支える理念

慶應義塾大学教養研究センターでは、2005年度から2007年度にかけて、文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究センター」プロジェクト・「バリアフリー・キャンパス構築をめざして」を展開してまいりました。これは21世紀型の教養教育の慶應モデルの作成を目指したプロジェクトです。

プロジェクトでは、教養教育のあり方を抜本的に見直し、学ぶべきコンテンツと学びの場とを併せて、受け継ぐべきは受け継ぎ、正すべきは正し、生み出すべきは生み出すことに留意しつつ、新たな教養教育を総合的に捉えた全人教育プログラムを構築してきました。プログラムのキーワードは5つ：

### ①「知の共同体」

大学とはさまざまな構成員によって「知」をめぐ

るダイナミックな活動が行われる「共同体」です。そこでは相互に教えあい、学びあう関係、つまり半学半教の関係が構築されなければなりません。

### ②「バリアフリー」

こうした共同体の活動と構成員の関係をより有意なものとするためには、しかし、まず大学自体が、またその構成員があらゆるものに対してバリアを設けることなく、これに接することのできる姿勢を持たなければなりません。バリアからの解放が求められる所以です。

### ③「自律性」

知の共同体では半学半教、相互啓発といった学びが重視されますが、これが実現するためには、何よりも共同体の構成員一人ひとりが「学ぶ自分」「教える自分」を相対化して眺める視点を持たなければなりません。自己を、他者を、共同体そのものを俯瞰する目が必要です。このような自律性の涵養は共同体の大きな課題です。

### ④「社交力」

共同体における活動は協働作業が基本となります。つまり、他者とどのようにつながるか、そのつながり方が活動の成否を決めるわけです。そのためには、当然のことながら他者とつながり、共に活動を展開するための力が必要とされます。そうした社交力を育むことも不可欠です。

### ⑤「ポートフォリオ」

共同体において学んだこと、教えたことをただそのままに置いておくのではなく、これをポートフォリオとしてしっかりと記録し、ファイル化することで、過去を振り返り、現在を見つめ、未来を構想するための宝箱にしなければなりません。これは生涯にわたって個人が「よりよく生きる」ための貴重なアーカイブの役割を担うものです。

### 3. 「未知」と出会う・「未知」を知る

#### ——庄内セミナーの趣旨・目的

私たちが作成したプログラムにおいて特に重点を置いたのが「身体知」でした。すなわち、とかく座学に傾きがちな学びを、実際に身を以って体験することで身に染みこませること、また座学だけでは学ぶことの難しい分野・領域を実体験することの重要性を強く意識しています。

慶應義塾の抱える三田、日吉、矢上、信濃町、湘南藤沢、芝共立キャンパスあるいは丸の内シティキャンパスなどの主要なキャンパスは首都圏に集中しており、学生たちは学びに関わる多くの時間をこれらのキャンパスで過ごしています。もちろん、慣れ親しんだキャンパスにおいて充実・集中した生活を送ることの意義には大きなものがあります。しかし、慣れ親しむがゆえに、ふと見落としてしまう大切なものがあるかもしれません。首都圏のキャンパスは、そうした見落としを再発見することや見慣れたものの中に新たなものを発見するための学びの場だと言えるでしょう。

と同時に、日常とは異なる環境の中に身を置き、未知のものに出会うことで学びのフィールドを広げることにも教養教育には欠かせない要素であると考えます。その環境を与えてくれるのが鶴岡タウンキャンパスを有する庄内にほかなりません。残念ながら慶應義塾大学の学生たちの間での鶴岡キャンパスの認知度は高いとは言えません。だからこそ私たちは鶴岡キャンパスを基軸とする庄内地方に注目いたしました。日吉や三田のキャンパスを離れて、鳥海山・出羽三山を背後に控え、豊かな自然と文化、歴史に恵まれた庄内をフィールドに、存分に心と体と頭を使いつくすプログラムを学生たちに体験させることが庄内セミナー最大の目的です。

また、セミナー参加者として、共催校の東北公益文科大学の学生が加わってより多様な経歴や視点、価値観を持ったグループを構成することで、普段経験することのできない活発な「知」の交流の場を作り出すことを目指してもいます。さらに、セミナーの一部を地元の方々に一般公開することでさまざまな世代にまたがる交流の機会を提供することも目的の一つです。

かつて庄内藩の藩校「致道館」では、学習者一人ひとりの天性に応じた長所を伸ばすために、詰め込み型の知識学習を排して自学自習を重要視した徂徠学を基盤に置いた教育が行われていました。社交力と共に自律的学習者の育成を目指す本プロジェクトは、そうした「致道館」の歴史を持つ庄内においてセミナーを開催することに大きな意義を見出しています。ここからは、必ずや新しいダイナミックな「知」の活動が誕生してくるはずですし、それが新しい学びの可能性や具体的な学習・研究の成果を生み出すことにもつながるはずです。これこそが「庄内セミナー」の趣旨にほかなりません。

### 4. セミナーのテーマ

庄内セミナーでは、総合テーマと基調テーマ、そして年度ごとのテーマを設定しています。総合テーマはセミナー全体を包み込む大枠です。庄内において、とりわけ「生命」に焦点をあてたセミナーであることを物語るものとして設定しています。これに対して基調テーマは、「心と体と頭と」を存分に使い尽くして「学び」の場を広げることを意識して、「行動する教養」あるいは「教養する」ことを強調しています。セミナーの土台を示すテーマです。そして、年度ごとに庄内からさまざまなテーマを選び出したものが年度テーマです。これが参加者たちにとってはグループワーク、プレゼンテーションの実質的な課題となります。すなわち——

◇総合テーマ：『庄内に学ぶ「<sup>いのち</sup>生命」—心と体と頭と—』

日本海・庄内平野・出羽三山が織り成す庄内という小宇宙とその歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学びつつ、慶應義塾において進められている「生命」に関わる多様な研究・教育の成果をも取り入れることで、「生命」を総合的に考えることを趣旨としたテーマです。

◇基調テーマ：「知る・見る・表現する—行動の教養学入門」

◇2010年度テーマ：「芭蕉が見た庄内の<sup>いのち</sup>生命」

具体的には、松尾芭蕉と『おくの細道』を取り上げて、芭蕉が庄内で身をもって体験した庄内のさまざまな「<sup>いのち</sup>生命」を私たち自身の体で追体験すること、その現代的な意味を再発見することを目的に、

講義とフィールドアクティビティによる学びを経験しました。

## 5. セミナーの概要

セミナーのメイン企画である合宿セミナーの概要は以下の通りです。

◇期間：2010年8月31日～9月3日（3泊4日）

◇場所：東北公益文科大学（酒田市）、にかほ市象潟郷土資料館、象潟、蚬満寺、酒田市内、羽黒山、慶應義塾鶴岡タウンキャンパス（鶴岡市）ほか

◇参加者構成：講師・学生・慶應義塾卒業生・教職員スタッフ・コメンテーター

◇参加者数：

・学生（男子17名、女子8名）

[内訳]・慶應義塾大学：17名（文・2、経・4、法・7、商・4）

・東北公益文科大学：7名（公益学部）

・慶應義塾大学（経済学部）卒業生：1名

・講師3名

・コメンテーター3名

◇宿泊場所：眺海の森さんさん

## 6. セミナー・プログラム

すでに記した通り、庄内セミナー全体は、事前説明会・合宿セミナー・成果報告会の三部構成となっていますが、今年度はこれにいくつかの関連企画が加わりました。関連企画も含めて、次にそれぞれのプログラムの詳細をご紹介します。

◇庄内セミナー事前説明会 7月31日（土）

・17:00～18:00：事前説明会（慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1F103・104号室）

合宿セミナー参加者に対するセミナー詳細についての説明を行いました。東北公益文科大学からの参加者に対しては、テレビ会議システムを利用して日吉キャンパスと酒田キャンパスを結んでの説明会となりました。

◇合宿セミナー 8月31日（火）～9月3日（金）

《セッションⅠ：全体学習①（基調講演・一般公開）》  
[8月31日（火）]

〈東北公益文科大学301番教室〉

14:00 開会

14:05 来賓ご挨拶 阿部寿一氏（酒田市長）

同 酒井忠久氏（致道博物館館長）

14:15 基調講演①「荻生徂徠と福澤諭吉」

小室正紀氏（慶應義塾大学経済学部長）

15:20 基調講演②「芭蕉のみちのくーセカイの中心で」

柳生正名氏（俳人・「海程」同人）

16:30 基調講演③「芭蕉は鼠ヶ関を越えたのだろうか？」

金森敦子氏（作家）

17:30 セッションⅠ終了

（宿泊：酒田市 眺海の森さんさん）

《セッションⅡ：芭蕉が見た庄内の生命<sup>いのち</sup>・1》

[9月1日（水）]

〈講義①：東北公益文科大学104教室〉

10:00 「俳諧、命の容（かたち）としての」

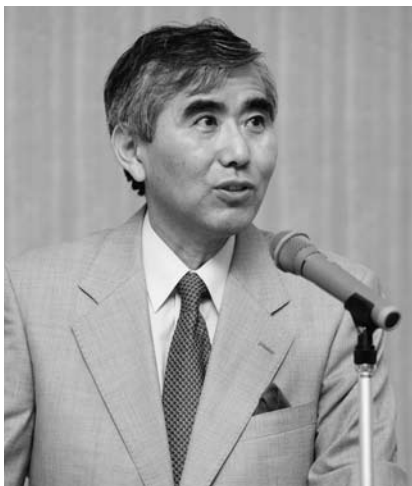
～12:00 講師：柳生正名氏

〈フィールドアクティビティ①：「芭蕉を探す・その壺」〉

12:15 公益大出発



阿部寿一・酒田市長（左）、酒井忠久氏（右）



基調講演を担当した小室正紀氏（左）、柳生正名氏（中）、金森敦子氏（右）



柳生正名氏のレクチャー「俳諧、命の容（かたち）としての」



フィールドアクティビティ①  
酷暑の三崎公園をゆく



にかほ市象潟郷土資料館



雄大な姿を呈する鳥海山



ガイド役の斎藤一樹氏



絶景～！（「眺海の森さんさん」から見るサンセット）



蛸満寺にある芭蕉像の前で記念撮影



金森氏によるレクチャー「芭蕉 象潟へ～その後の庄内砂丘と象潟～」

13:00 三崎公園（～ 14:00）

14:20 にかほ市象潟郷土資料館（～ 14:50）

☆斎藤一樹学芸員による案内・『象潟図屏風』見物

15:00 象潟町・蛸満寺・象潟見学（～ 16:10）

☆金森先生・斎藤学芸員による案内・解説

17:30 眺海の森さんさん 着

〈講義②：眺海の森さんさん大広間〉

19:00 「芭蕉 象潟へ～その後の庄内砂丘と象潟～」

講師：金森敦子氏

21:30 セッションⅡ・1 終了

《セッションⅢ：芭蕉が見た庄内の生命・2》

[9月2日（木）]

〈フィールドアクティビティ②：「芭蕉を探す・その式」〉

7:15 さんさん 発



恒例！ 羽黒山の参道を登る（2446段の石段）



ガイド役は羽黒山伏の伊藤賢一氏

8:00 羽黒山（～ 11:30）

☆伊藤賢一氏（羽黒山伏）の案内で登山と出羽三山神社・出羽三山博物館などを見学

11:30 慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）訪問

12:00 山居倉庫（昼食）

13:00 グループ毎のフィールド開始（酒田市内）（～ 17:30）

18:00 さんさん 着

20:00 グループ・ワーク（プレゼンテーション準備）



出羽三山博物館を見学

《セッションⅢ：プレゼンテーション（中間報告）》

[9月3日（金）]

☆会場：東北公益文科大学・公益ホール中研修室1

☆プレゼンテーション（進行：西村崇）

10:10 第1グループから第4グループまで（プレゼン 20分+質疑5分）（～ 11:45）

11:50 コメント・質疑（～ 12:50）

☆コメンテーター：

黒田昌裕氏（東北公益文科大学学長）

白 迎珠氏（東北公益文科大学准教授）

高橋幸吉氏（慶應義塾大学商学部専任講師）

13:00 合宿セミナー終了

◇庄内セミナー成果報告会 11月13日（土）

庄内セミナー成果報告会は、慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて、以下の要領で開催されました。

【庄内セミナー成果報告会】

・日時：11月13日（土）14時～18時

・場所：日吉来往舎シンポジウムスペース

・内容：

14:00 開会（進行） 羽田功（慶應義塾大学経済学部教授・プロジェクトリーダー）

主催者挨拶 不破有理（慶應義塾大学経済学部教授・教養研究センター所長）

14:05 来賓ご挨拶 本間正巳氏（酒田市副市長）

14:15 庄内セミナー報告 羽田

14:45 グループ・プレゼンテーション

進行：吉田恭子（文学部准教授）

\*各グループ：発表15分・質疑5分

14:45 コメンテーター紹介

14:50～15:10 第1グループ



本間正巳・酒田市副市長



コメンテーターを務めた小室氏（左）、柳生氏（中）、金森氏（右）

15:10～15:30 第2グループ  
 15:30～15:40 休憩  
 15:40～16:00 第3グループ  
 16:00～16:20 第4グループ  
 16:20～16:40 西村崇君（卒業生）  
 16:40～17:40 コメント（フロアも含む）  
 17:45 閉会

☆コメンテーター：

小室正紀氏（慶應大学経済学部長・セミナー講師）  
 柳生正名氏（俳人・セミナー講師）  
 金森敦子氏（作家・セミナー講師）  
 高橋幸吉氏（慶應大学商学部）  
 白迎玖（東北公益文科大）

☆ご来賓：（敬称略）

岩城公志（鶴岡市東京事務所長）  
 渡部幸一（鶴岡市企画調整課主任）  
 阿部知弘（鶴岡市東京事務所係長）  
 安達哲郎（庄内日報東京支局長）  
 佐藤裕樹（山形新聞鶴岡支社編集部）

#### ◇庄内セミナー関連企画

##### 【庄内セミナー関連企画1：俳句コンテスト】

- ・テーマ：自由
- ・応募資格：セミナー参加者・一般
- ・募集期間：2010年10月12日～10月30日
- ・選者：柳生正名氏（俳人・「海程」同人）
- ・入所作品については「俳句コンテスト」の報告を参照。；

##### 【セミナー関連企画2：庄内フェアなど】

5月22日（土） 生協総代会に庄内展示ブースを設置  
 6月7日（月）～11日（金） 学生健保・学生部「朝食サービス」で庄内米を提供

11月8日（月）～27日（土） 庄内フェア開催

・「食す」：8日～13日 庄内米おにぎり、いも煮などを提供（生協食堂）

・「知る」：12日～17日 鶴渡川原人形の展示と色づけ体験・講演会（独立館B1・日吉の家）

・「読む」：8日～27日 庄内関連図書の特集（生協書籍部）

・「探す」：8日～13日 庄内ご当地スナックなどを販売（生協購買部）

・山形県内の特産品の配布：8日（月）～12日（金）（配布品：玉こんにゃく、ラフランスジュース、米沢牛せんべい、ラフランスなど／生協店舗前）

＊特産品配布ご協力：米沢ドライビングスクール、村山自動車学校、長井自動車学校、松岬自動車学校、県南自動車学校

＊庄内フェアご協力：庄内観光コンベンション協会・慶應義塾大学生協





「俳句コンテスト」の表彰式



酒田・鶴渡川原人形の展示



生協食堂で庄内米おにぎり、いも煮を提供



庄内関連図書の特集



庄内ご当地スナックなどを販売



## 庄内セミナー現地発表会

吉田恭子（教養研究センター副所長／文学部准教授）

中間発表会で参加学生諸君に課されたのは、セミナーでの実体験を踏まえて得た着眼点を出発点に、地元でのフィールドワークやリサーチを経て、より方向性のあるテーマに絞り込み、考察・仮説や検証方法だけでなく今後の課題を含めて限られた時間の中、グループで発表するという、極めて高度な課題です。多岐にわたるスキルが必要な上、わずか4日間でグループワークをやり遂げる体力・集中力・協調性も求められました。

セミナー最終日の9月3日、東北公益文科大学キャンパスで約3時間にわたった中間発表会は、初日の講演同様に一般公開形式で、セミナー参加者・関係者を含めて約55名の方々が足を運んで下さいました。まず一般の方々への紹介と参加者の振り返りを兼ねて、羽田先生が4日間の活動をまとめました。その後、社会人参加者西村崇さんに司会のバトンタッチをして、学生のグループ発表に移ります。4つのグループが、順番に15分ずつの中間発表を行いました。それぞれの発表の後に短い質疑応答があり、すべての発表ののち、東北公益文科大学学長黒田昌裕先生、同准教授白迎玖（バイ・インジュウ）先生、慶應義塾大学商学部専任講師高橋幸吉先生の3名が講評をされ、その後フロアから質問やコメントを募りました。

第1グループは「庄内未来航路図～そのときは芭蕉によろしく～」と題し、酒田市の繁栄の歴史を踏まえた上で現状とその問題にふれ、未来への提言として観光資源の積極利用のための施策を提言しました。酒田市役所政策推進課の前田さんの協力を得て、具体的には酒田の観光スポットを巡るツアーバス、ゆるキャラの導入、マップ等情報ソースの充実が挙げられました。

発表後、不破先生からのコメントがあり、観光政策のターゲットを若者に絞る前に、伸び悩む観光客の現状分析で年齢層の分析が欠けていること、また学生自身が自分たちの視点を「若者らしい」と評価

することへの違和感、政策提言にそぐわないことは遣いが指摘されました。

第2グループは酒田の豪商本間光丘の再評価にチャレンジ。私益と公益の両立を実現したとされる光丘の通説評価にあえて疑問を呈するというアプローチを取りました。とりわけ植林事業と低金利貸付に焦点を絞り、市立資料館等で調べた結果、本間家の資料は公開されているものが非常に少ないことを実感、農民資料や藩史、論文・小説などの二次資料を含めて調査に工夫が必要なことが今後の課題として提示されました。

これに対して、本間美術館顧問の高瀬さんから、本間家の資料公開への期待が述べられるとともに、貸付資本業ともいえる光丘の地主業の重要性が享保の改革以降の慢性的不況に苦しむ諸国財政事情とからめて指摘されました。

第3グループは最上川の歌枕としてのイメージ変遷と商業を中心とした歴史背景変化の関係について。芭蕉以前と以後で歌枕最上川のイメージが変わったのは歴史の変化に呼応しているという仮説の下に、最上川を詠った和歌・俳句3点とその当時の最上川の商業利用を比較検討し、今後商業以外の歴史背景にも調査を広げるとして発表を締めくくりました。

この発表に高橋先生がコメントし、まず文芸ジャンルや歌枕の定義の基本を確認され、その上で、検証方法の正当性、まず仮説ありきの論法に疑問が呈されました。司会の西村さんが「愛のムチ」と呼んだ厳しい指摘に、学生たちも最終発表に向けて精密な検証を誓っていました。

第4グループは芭蕉を切り口とした酒田の米作りに関する発表。芭蕉が酒田を訪れたのが、セミナーとはほぼ同時期の盛夏にあたること、また都会育ちの学生たちにとって庄内や象潟の水田風景の印象が強かったことから、旅の達人芭蕉が酒田を訪れて稲作にまつわる句を詠まなかったのはなぜなのか、という謎が提示されました。これに対して3つの仮説が

紹介され、検証方法は今後の模索にゆだねられました。

白先生からは、発表の技術と方法論に関するコメントがあり、とりわけ、研究の目的、意義、アプローチを明確化することの大切さが強調されました。また、参加学生の伊藤さんからは、庄内の米作を扱った文学作品についての質問がありました。

全グループが発表を終えた後、黒田学長が、問題設定のユニークさと「若者らしさ」が強い印象として残ったと講評され、それぞれのグループ発表の内容についても具体的な提言をされました。白先生からは、エヴィデンスの収集、リサーチの技法、検証方法についてアドバイスがあり、とりわけインターネット以外のソースで文献に当たるよう具体的指導がありました。また、グループ全員が積極参加するよう叱咤激励がありました。高橋先生は、独りよがりな論にならないためには、資料に基づいた論証、根拠のある分析や立論能力といった下地が不可欠であると指摘し、常識を疑うことも大事だが、まず自分を疑い、先入観のみで論を進めないように注意を促しました。

この後、フロアの一般参加の方々から質問やコメントが寄せられました。郷土文学研究家の東山先生は、座の文芸としての俳諧、共同作業としての植林といった今回のテーマが持つコミュニティ・ワークの側面を指摘され、ひとりの業績に論を収斂せず、地域にある足元の 財産を再発見するような研究に期待が寄せられました。その後、第一グループの学生から、観光資源化に対する地元の方々の考えについて質問があり、黒田学長から点として存在する観光スポットを歴史の文脈の中に置くことで、ストーリー性をもった流れとして点が繋がる可能性が指摘され、白先生からは地理学的視点から観光地研究の着眼点が示されました。



コメンテーターを務めた黒田昌裕氏(左)、白迎珠氏(中)、高橋幸吉氏(右)

続いて、第一グループの調査に協力した酒田市役所の前田さんから、酒田市の観光業の停滞気味な現状と、新機軸を積極的に取り入れたい市の意向、周辺市町との協力の必要性が述べられました。それを受けて、NPO 国際ボランティア事業団の斉藤さんから日本酒コンベンションホール建設の提言が出ました。

東北公益文科大の山本先生からは、酒田と東京で連絡を密に取り合うこと、公益大の学生は地元の資料を活用し、慶應の学生は歴史ある図書館を利用するように、また、帰りには庄内の風景、とりわけ鼠ヶ関近辺の地勢をよく観察するように、といった実際的なアドバイスがありました。最後に横山先生から、庄内の魅力はその先達の層の厚さと地元の方々の懐の深さにあり、今回新たに培ったネットワークを大切に育んでいくように励ましがりました。

夜を徹して準備したプレゼンテーションに講評の先生方のみならずフロアの方々からも続々と厳しい質問や要求の高いコメントが寄せられ、秋の最終報告のハードルはますます高くなり、学生たちは発表が終わってほっと息をつく間もない様子でしたが、報告会に集った皆さんは学生諸君の「若さ」ゆえに大胆なテーマ設定やアプローチに大いに触発されたのだといえるでしょう。





## 2010 年度「庄内セミナー」報告書

# グループ・プレゼンテーション

2010 年 11 月 13 日（土）に活動報告会が開催され、庄内セミナーの最終成果を各グループが発表しました（会の詳細については、73～74 頁をご参照ください）。当日の発表原稿ならびにパワーポイントのスライドを掲載します。

### 第 1 グループ「酒田未来航路図～観光と地域活性化～」

|             |                    |                     |
|-------------|--------------------|---------------------|
| Gr.1<br>6 名 | 鳥屋尾天平（慶應義塾大学経済学部）  | 田中京祐（慶應義塾大学商学部）     |
|             | 山崎将太（慶應義塾大学法学部）    | 西山千尋（慶應義塾大学法学部）     |
|             | 嶋貫紘斗（東北公益文科大学公益学部） | 五十嵐千佳（東北公益文科大学公益学部） |

### 第 2 グループ「本間光丘の再評価」

|             |                    |                 |
|-------------|--------------------|-----------------|
| Gr.2<br>5 名 | 橋本慎也（慶應義塾大学経済学部）   | 内田ユリ（慶應義塾大学商学部） |
|             | 村田大介（慶應義塾大学法学部）    | 森川良穂（慶應義塾大学文学部） |
|             | 池田 涼（東北公益文科大学公益学部） |                 |

### 第 3 グループ「最上川について」

|             |                    |                   |
|-------------|--------------------|-------------------|
| Gr.3<br>5 名 | 國井耕太郎（慶應義塾大学法学部）   | 宮上七重（慶應義塾大学法学部）   |
|             | 久村亮介（慶應義塾大学商学部）    | 伊藤奈津美（慶應義塾大学経済学部） |
|             | 進藤貴則（東北公益文科大学公益学部） |                   |

### 第 4 グループ「つや姫の挑戦～山形県のブランド米戦略～」

|             |                    |                    |
|-------------|--------------------|--------------------|
| Gr.4<br>6 名 | 池田 純（慶應義塾大学経済学部）   | 武田さとみ（慶應義塾大学法学部）   |
|             | 鎌田尚之（慶應義塾大学法学部）    | 山本亜純（慶應義塾大学商学部）    |
|             | 阿部 新（東北公益文科大学公益学部） | 高野和季（東北公益文科大学公益学部） |

### OB「芭蕉は出羽の天狗を見たか ——『おくのほそ道』から探る酒田の気風」

|                            |
|----------------------------|
| 西村 崇（三菱 UFJ モルガンスタンレー証券勤務） |
|----------------------------|

# 第 1 グループ

## 酒田未来航路図～観光と地域活性化～

鳥屋尾天平／山崎将太／田中京祐／西山千尋／嶋貫紘斗／五十嵐千佳

### 1. はじめに

私達が今回のセミナーで感じたことは、庄内地域・酒田は自然環境や食、旧跡など多くの魅力あるコンテンツを持つ素晴らしい場所であるということだ。芭蕉の足跡をたどるフィールドアクティビティや自転車での酒田市観光はまさに今回のテーマである「生命」のつながりを実感する貴重な体験であった。しかしその一方で疑問も生まれた。果たして日本人のどれだけの人々がこの庄内の魅力を知っているのだろうか。都心で生活をしている慶應義塾大学の学生の中には庄内という地域に何があるのか全く知らぬままセミナーに参加した人も少なくない。また、旅行代理店に行くと北海道や沖縄、京都や広島のパンフレットはすぐに見つけることができるが山形県のパンフレットを目立つ位置に発見することはあまりないだろう。

今回の発表では主に酒田市を対象とし、いかに酒田市の魅力を外部にアピールし人を呼び込むかということを考えていきたい。地方都市にとって観光産業は重要な収入部門である。冒頭でも述べたが庄内地域・酒田は非常に魅力ある地域である。しかしそれは、魅力ある資源を保持しているということだ。資源はただ持っているだけでなく効率的な使用方法を考えなければその潜在的な力を発揮することはできない。私達はいくつかのポイントを絞り、酒田市に人々を惹きつけるような方策について提案していこうと思う。

### 2. 酒田市の現状分析

酒田市は山形県北西部に位置する人口約 11 万人の都市である。庄内地方の中心地であり、かつては港湾都市として栄華を極めた。松尾芭蕉の『おくのほそみち』の題材になったことでも有名であり、近年ではアカデミー賞受賞作品『おくりびと』のロケ地として脚光を浴びた。しかし数多くの地方都市の例に漏れず、人口減少と少子高齢化による経済停滞に直面している。地元商店街は人が集まらずシャッター通りになっている現実もある。このような状況を改善する一つの方策は観光産業の振興にあると考えられる。データによると平成 17 年度から平成 21 年度の観光客入込状況はほぼ横ばいである。これは酒田市の魅力を満喫した我々にとって意外な数字であった。ではなぜ観光客数は増加しないのであろうか。

平成 18 年に行われた庄内町観光振興計画でのアンケート調査を見ると様々な問題点が明らかになってくる。来訪者の年齢構成は 50 代が最も多く、年齢層は全体的に高めである。訪問頻度は一位の「はじめて」に対し二位が「五回以上」となっておりリピート率が高い。訪問目的は「自然」「食べ物」が上位を占める。これは我々が実感したところと合致するものだった。最も注目される、評価が低いところの項目では「案内表示が分かりにくい」「PR 不足」「公共交通が不便」といった答えが見られた。観光客数を増やすためには観光客の満足度を高めなくてはならない。我々はメインターゲットを高齢者層及

び昨今注目されている外国人客に定め、このような不満点への対策を考えた。次章では個別の案件について具体的に言及していく。

### 3. 酒田市振興計画

#### (1) PR活動・イベント創設

##### ①ゆるキャラの経済効果

酒田市は全国的に知名度が高くない。そのためにはまずPR活動に力を入れなくてはならない。そこで一つの方策となるのがいわゆる「ゆるキャラ」である。

まず、全国のゆるキャラについて紹介する。近年、国内で顕著に見られるのが、地方自治体や企業などのイベントなどで登場するマスコットキャラクターの人気である。これまでも公共イベントや企業の販促キャンペーンなどでは、認知度を上げるためにマスコットキャラクターを設けることが多々あった。しかし、その多くはイベントの終了とともに役目を終え、人々の記憶から消えていってしまうという現状がある。

そんな中、知る人ぞ知る存在だったマスコットキャラクターが一躍脚光を浴びたのが、2007年に滋賀県で誕生した国宝・彦根城築城400年祭のキャラクター「ひこにゃん」だ。一般公募によって誕生したひこにゃんは、イベントの枠を超えて全国的な人気に発展。滋賀大学産業共同研究センターの報告書によると、ひこにゃん人気によって400年祭は彦根市総生産の7%を占める338億円もの莫大な経済効果を生み出した。また訪問者の3割以上がひこにゃんの関連グッズを購入しており、キャラクター人気イベントを牽引したまれなケースとも言える。ひこにゃん人気は依然続いていて、こうした「ゆるキャラ」と呼ばれるローカル発のキャラクターが、町おこしの新たな手法として大きな注目を浴びている。では、ひこにゃんのように、長く愛され続けるキャラクターはどのようにして作られるのか。所謂、「キャラクター戦略」とは、どのような役割を持っているのか。これは5つのカテゴリに分けられる。第一に、認知効果。キャラクターの認知度を利用し、その商品やイベントの周知を高めることにある。第二に、販売効果。キャラクターブランドの開発により、売り上げ拡大をはかる。第三に、その販売促進効果。キャンペーンやキャラクターイベントなどに

より、その価値を利用して新商品販売や拡販をはかることができる。第四に、イメージアップ効果。広告にそのキャラクターを使用することで、キャラクターがもっている良いイメージを商品に付加することができる。最後に、ターゲットコミュニケーション効果。広告表現にキャラクターを使用したりと、コミュニケーション戦略によってターゲットの変更や絞り込みをはかる。

また、キャラクター開発は比較的安価なことから、多くの地方自治体でキャラクターが生産されている。しかし、先ほども述べたように、その大半がイベントと共に消えてしまうばかりなのだ。では、優れたキャラクターを開発するには、全項目のキャラクター戦略を理解した上でどのような視点を持てばよいのか。

キャラクターの持つ役割としては、①イベントの中身を表現し、伝える役割、②イベントのテーマやキャラクターを色やデザインで表現する役割、③そのイベント自体に別のイメージを与える役割、をもっている。優れたキャラクターの開発には、パーソナリティやコンセプトの深化、ターゲットの設定、多重なパーソナリティを感じさせるような優れたデザイン、そしてそのキャラクターを多く広告することが大切である。

つまり、経済効果をもたらしたイベントの裏側には、キャラクターの活躍という大きな存在があるといっても過言ではない。多くの地方自治体がこのような策を取るなか、前述したように、「すぐに消えてしまうキャラクター」が多発していることに苦言を呈する方も多いが、キャラクター開発にあたり、キャラクター自身が持つ役割をきちんと認識した上で作っていくことに意味があると考える。

ここでは具体的に酒田市がどういったキャラクターを作製すればいいのかという話にまでは踏み込むことが出来ない。しかし酒田市といえばあのキャラクター、というような存在を作ることが出来れば大きな強みになる。市に対する認知度が低いのはつまり、市に対する明確なイメージが無いということである。何か一つ強烈な印象を残すPRが出来れば状況は大きく変わるのではないかな。

##### ②松尾芭蕉と俳句 イベントの作成

松尾芭蕉は『おくのほそみち』で庄内を訪れ、多

くの句を残した。芭蕉ゆかりの地は酒田市の大きな観光資源となっているにも関わらず、あまり知名度は高くないのが現状である。観光におけるメインターゲットに中高年層や外国人を考えた場合、芭蕉は魅力的であろう。出羽大橋での夕日や日和山公園から眺める港風景は素晴らしいものがある。それらの観光スポットに芭蕉を紹介する碑文や像を建て、また実際に芭蕉が『おくのほそみち』で歩いたルートにストーリー性を伴わせながらまとめることによって酒田市を「芭蕉のまち」としてPRすることが出来るであろう。芭蕉の知名度は抜群であり、市に対する印象付けという点で大きな効果が期待される。

それに関連して、俳句大会のようなイベントの創設が考えられる。芭蕉を全面に押し出すことと同時に俳句を利用するのは自然な流れである。特に最近では外国で俳句が浸透しているという状況もあり、外国人客へのアピールになる可能性を秘めている。このようなイベントで大切なのは、体験型のイベントにするということである。例えば修験道体験をしたり『おくのほそみち』をめぐったりしながら、自然に親しみ人と交流する中でイベントを行うことによって酒田市の強みが発揮されることが考えられる。

ここで前章のアンケートに立ち返ろう。「PR不足」と言われてしまうのはつまり、これといった特徴が無いということだ。芭蕉や俳句は酒田市が日本の中でもオリジナリティー溢れる資源として売り出せるものであり、マスコットキャラクターもそれに関連したものになるかもしれない。美しい自然や美味しい食べ物に加え、何かプラスアルファのPRを行うことで初めて人々の関心を酒田市に向けることができるのではないだろうか。

## (2) 交通の整備

様々なPR活動を通して人を市内に呼ぶことが出来たととしても、現地で満足が得られなければリピート率は上がらない。観光資源そのものと同時に重要なのは交通や情報のインフラストラクチャーだが、アンケート結果によると「公共交通が不便」「案内表示が分かりにくい」との声が多かった。我々は自転車を借りて酒田市内を観光したのだが、その時に強く感じたのは観光名所それぞれが点在していて移動がしにくいということであった。特に中高年層の観光客を考えた場合、自転車の利用は現実的ではなく、また簡素で分かりやすい交通誘導が必要である。そこで、観光用に特化したコミュニティバスの創設が考えられる。

観光専用バスの利点は、身一つで誰でもが利用でき、利用料が安く、各観光名所のすぐ近くまで行ってくれるという所にある。現在酒田市では庄内交通と酒田市福祉乗合バス（るんるんバス）の二つのバスが走っているが、ともに市民の生活の足となることが目的であり観光に対する利便性には乏しい。他の地方都市に目を向けても松江市や金沢市ではいち早く観光専用バスを取り入れており、各観光名所を一時間程度で循環し安価な料金で利用できるようになっている。酒田市における観光名所の点在と交通の便の悪さは観光客の満足度という点で大きな足枷になっていると思われる。

また、コミュニティバスは地元企業の協賛を受けられるパターンが多い。市全体の経済を考えた場合、観光客が各観光地を回るだけでなく中心市街地に赴き消費するということが重要になる。そこでバスの運営資金の一部を地元企業・商店の協賛金で賄い、見返りとしてバス内での宣伝広告とバス運行ルート





工夫により人を市街地に送りこむという方策がある。

### (3) 地元商店街の活性化

我々が訪れた中町商店街は、多くの商店のシャッターが閉じられ活気を感じるにはほど遠い現状であった。実際に市内の商店数は減少の一途をたどっている。市の活性化を目指すのであれば外部から人を呼び込むだけでなく、その結果地元の商店が活気づかなくてはならない。大型のショッピングモールを誘致する等の方策もあるが、酒田市のように自然や歴史が強みになっている都市では昔ながらの景観を残しながら発展させることが良策のように思われる。

まず初めにやるべきは商店街マップの作成である。どこに何の店があってなにを扱っているか分からないという人のために商店街マップを作り、商店街の魅力をPRする。ただ作るだけでは意味がないので、商店街にしかないもの、見どころをわかりやすく表示し、人がたくさん来る場所に設置する。例えばこれを観光専用バスの車内で無料配布すれば効果的に人を呼び込める。また、現地では若年層の認知度が低いようなので、大学などの学校に配布するのもよいだろう。

商店街に価値を生み出すという意味ではシャッターペイントも注目されている。シャッターに絵を描くことにより、開店していない時間帯にも楽しめる、また今は営業していない閉じたままのシャッターにもペイントを施すことにより、ただ閉まっているだけのところを明るく見せる効果もある。この取り組みは実際に東大大学院生が行っており、築地にて新しい魅力を生み出している。

最後に最も重要なことは、看板商品を売り出すことである。仙台の「萩の月」や広島の「もみじ饅頭」のように、酒田といえばこれ、と認識されるような土産物が見当たらないのが現状である。商店街はこれまで市民の生活必需品を主に販売してきたであろうが、大型店やコンビニエンスストアと競合して勝つことは難しいだろう。それならばもっと地元色を出し、地元商店でしか買えないものを生み出すことが必要だ。一例として米を使った食品が考えられる。現在山形県は独自ブランド米「つや姫」の全国的な知名度向上を目指している。このような取り組みと一体になり、酒田ならではの強みを発揮する方向に向かうのが将来に向けて可能性のある行動であると

思われる。

観光客を呼び込み、地元も元気になり、相互作用で酒田市全体の経済を活性化していく。これこそが最終的なゴールになる。

## 4. おわりに

我々は今回の庄内セミナーで酒田市の魅力に触れ、「もっと多くの人に酒田を体験してもらいたい」と強く感じた。それが観光客にフォーカスを当てることになった一つの理由である。観光客による経済発展のためには、「PR活動での認知」——「域内インフラ整備による満足向上」——「現地住民との相互作用による活性化」という段階が必要であろうと考えた。それぞれの部門において、具体的にどういった方策が考えられるかを班員一人一人が各自の興味に沿って事例提案を行ったのが今回の発表である。細かいデータの全てを載せきすることは出来ないし、実現可能性の精査にまで至っていない部分が多い。実際の体験から、自分ならばどうするかと考えたことをまとめたプリミティブな段階に留まってしまったことは反省すべき所である。しかし今回の発表を通じ、まだまだ行われていない施策が多いこと、改善できる点がたくさんあることを実感できた。これから我々一人一人が酒田市を愛し、その発展に貢献できるように考え続けていきたいと思う。

### 参考文献

- 青木幸弘「ブランド構築におけるキャラクターの役割」日本経済新聞社、2000
- 青木幸弘他編『ブランド構築と広告戦略』日経広告研究所、2000
- 荒木、長照；田口「自治体開発キャラクターのパブリシティ効果の推定：平城遷都1300年記念マスコットキャラクター」大阪府立大学経済研究、2008
- 松本幸正『成功するコミュニティバス』学芸出版社、2009
- 三浦展『商店街再生計画 大学とのコラボでよみがえれ!』神奈川大学曽我部昌史研究室、2008
- 酒田市「Sakata Data File 2010」
- 庄内町「庄内町観光振興計画（平成18年）」
- 酒田市公式HP、<http://www.city.sakata.lg.jp/> 2010/9/3
- 世界俳句協会「世界の俳人」、<http://www.worldhaiku.net/japanese.htm> 2010/10/15
- 彦根城築城400年祭 経済効果測定調査報告書、<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/jrc/annual-no8/no8-6-3.pdf#search=> 2010/10/10



1

## 酒田未来航路図 ～観光と地域活性化～

庄内セミナー1班  
五十嵐千佳  
島貫紘斗  
鳥屋尾天平  
西山千尋  
山崎将太

2

## アウトライン

- 1.はじめに-目標設定-
- 2.酒田活性化施策
  - PR活動
  - イベント
  - 交通
  - 地元商店活性化
- 3.おわりに-酒田未来ビジョン-

3

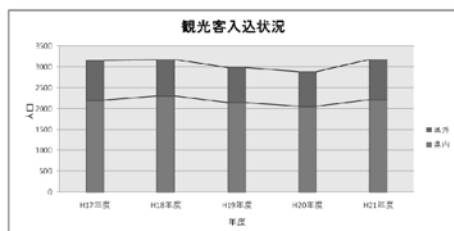
## 1.はじめに-目標設定-

- 庄内酒田が全国に誇れるものは・・・
- 自然 ex,最上川・鳥海山
- 味覚 ex,海産物
- 歴史 ex,松尾芭蕉・酒田港

4

## 疑問点

- あんまり知られてない・・・？
- 観光客が意外に少ない！



5

## 1、はじめに～目標設定

- 酒田市の現状
- 人口減
- 高齢化
- シャッター通りの増加
- ⇒観光産業の強化で酒田の活性化！
- ⇒庄内酒田の素晴らしさを知ってほしい！

6

## ターゲットの設定

・外国人



・中高年層



7

酒田活性化施策 PR活動

現在の酒田市民に  
酒田にある松尾芭蕉は  
**知名度が低い。**



8

## 酒田で芭蕉による活性化を 計るには

松尾芭蕉のPR

- ・芭蕉のイベント
- ・出羽大橋でのPR



9

## 芭蕉資料展示会

酒田に散らばる松尾芭蕉に関わるもの  
のPR

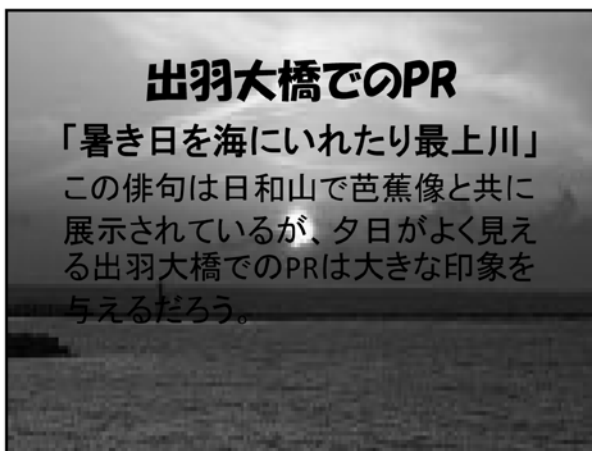
- ・奥の細道
- ・芭蕉像



10

## 出羽大橋でのPR

「暑き日を海にいれたり最上川」  
この俳句は日和山で芭蕉像と共に  
展示されているが、夕日がよく見える  
出羽大橋でのPRは大きな印象を  
与えるだろう。



11

## 芭蕉PR有効地in酒田 ベスト7

1.海向寺



2.日和山公園



12

3.舞姫茶 雛蔵画廊 相馬樓



4.酒田市美術館



13

5.土門拳記念館



6.財団法人本間美術館



14

7.山居倉庫



15

それぞれの場所で酒田芭蕉の  
パンフレット等でのPRが地元だ  
けでなく県外の方々にも地名度  
が高くなる。



16

酒田活性化施策 イベント

外国人向けのお祭りがない...

酒田港、酒田空港を国際化しようとしている...

俳句は外国人をも魅了しているらしい...

酒田市は俳人芭蕉が二度訪れた地...



俳句をメインテーマにした外国人  
誘致のためのイベントを行えない  
か？

17

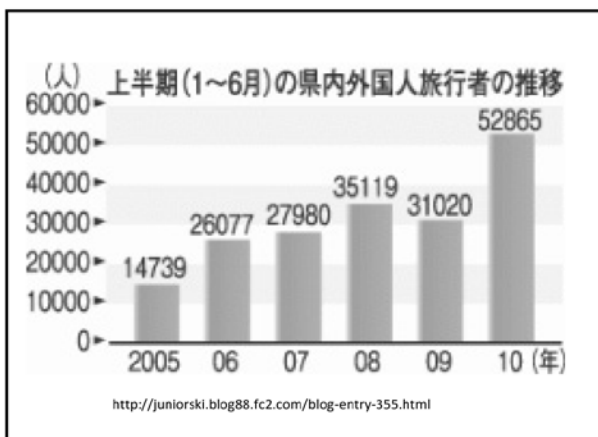
## 現状

一庄内空港への国際定期便はなし  
一酒田港への国際旅客便はなし

山形県への外国人観光客は過去最多  
(2010年度)



18



19

## 世界の著名な俳人

- Ludmila Balabanova(ブルガリア)
- Mohammed Bennis(モロッコ)
- Martin Berner(ドイツ)
- Angelee Deodhar(インド)
- Georges Friedenkraft(フランス)
- Paul Pfeuger, Jr(台湾)
- Robert Spiess(アメリカ)
- Zeljka Vucinic-Jambresic(クロアチア)

20

## 酒田市俳句世界大会

- 各部門をつくる。日本語の部(中学生、高校生【俳句甲子園】、大人の部)、英語の部、ドイツ語の部、ロシア語の部、中国語の部など。
- 酒田市に足を運んでもらいたいために即興俳句の部も設ける。
- 同時に外国人観光客向けのツアーやバス、ガイドを整備する。(修験道体験、酒田市うまいものめぐり、鳥海山登頂、飛島でダイビングなど)

21

## 大きなイベントにするために

- 国際交流都市への広報  
俳句勉強会、酒田市への招待
- 日本国内への広報  
メディアの利用、投句大会

22

## 参考文献

- Sakata Data File 2010
- 港都酒田大いなる船出
- 世界俳句協会  
<http://www.worldhaiku.net/japanese.htm>
- 「イベントが日本を変える」  
通商産業省商務室 編  
• <http://juniorski.blog88.fc2.com/blog-entry-355.html>

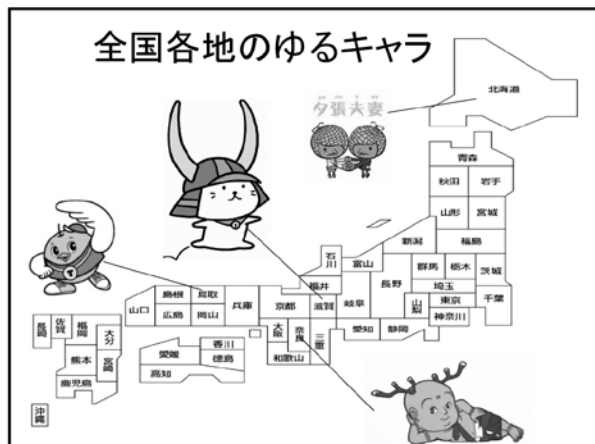
23

## 庄内セミナー2010

keio univ. CHIHIRO nishiyama.

「ゆるキャラ」がもたらす  
経済効果

24



25

### キャラクター戦略

| 認知効果                                                                    | 販売効果                                                                        | 販売促進効果                                                                                         | イメージアップ効果                                                                                   | ターゲットコミュニケーション効果                                                                                      |
|-------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>キャラクターの認知度を利用し、周知を高める</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>キャラクターブランドの開発により、売上拡大をはかる</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>キャンペーンやキャラクターイベントなどにより、その価値を利用して新商品販売や拡販をはかる</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>広告にキャラクターを使用したリして、キャラクターが持っているよいイメージを付加する</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>広告表現にキャラクターを使用したリと、コミュニケーション戦略によってターゲットの変更や絞り込みをはかる</li> </ul> |

出典「キャラクターマーケティング」2002

26

### 優れたキャラクターの開発

- ① イベントの中身を表示し、伝えようとする役割
- ② イベントのテーマやキャラクターを色やデザインで表現する役割
- ③ そのイベント自体に別のイメージを与える役割

荒木、長照、田口「自治体開発キャラクターのパブリシティ効果の推定：平成連都1300年記念マスコットキャラクター」大阪府立大学経済研究、2008、54(2)、p.55-70

青木幸弘「ブランド構築におけるキャラクターの役割」、青木幸弘他編「ブランド構築と広告戦略」J1 pp. 345-374、日経広告研究所、2000。

27

### ひこにゃん

- ・「彦根の、にゃんこ」
- ・井伊直孝にゆかりある一匹の白猫がモデル
- ・2007年、「国宝・彦根城築城400年祭」のイメージキャラクターとして登場

28

### fig1

【表2 観光客1人当たり消費金額内訳】

|           | H20年調査(文化庁) |         | (彦根)彦根市400年祭調査(H19年) |        | (彦根)彦根市400年祭調査(H17年) |         |
|-----------|-------------|---------|----------------------|--------|----------------------|---------|
|           | 割合          | 平均金額    | 割合                   | 平均金額   | 割合                   | 平均金額    |
| 交通費       | 19%         | ¥5,638  | 29%                  | ¥1,947 | 12%                  | ¥2,917  |
| 宿泊費       | 41%         | ¥12,059 | 0%                   | ¥0     | 43%                  | ¥9,861  |
| 飲食費       | 17%         | ¥5,109  | 27%                  | ¥1,807 | 19%                  | ¥4,364  |
| お土産購入費    | 17%         | ¥5,102  | 29%                  | ¥1,953 | 28%                  | ¥4,592  |
| 内ひこにゃんグッズ | 22%         | ¥1,111  | 22%                  | ¥442   | 47%                  | ¥2,160  |
| その他       | 8%          | ¥1,648  | 14%                  | ¥953   | 8%                   | ¥1,475  |
| 合計        |             | ¥29,554 |                      | ¥6,660 |                      | ¥23,308 |

※「内ひこにゃんグッズ」の割合のみ、お土産購入費に占める割合  
 ※彦根市調査とは「彦根市観光動向調査報告書」を参照

彦根城築城400年祭 経済効果測定調査 報告書より  
<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/jrc/annual-no8/no8-6-3.pdf#search=>

29

### Fig2

【1人あたりお土産購入費に占めるひこにゃんグッズ購入費の割合】

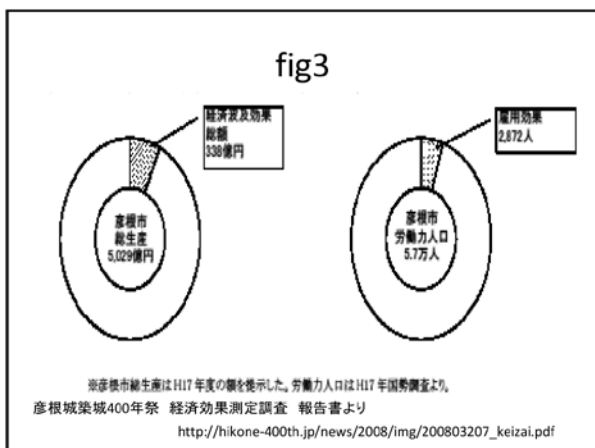
|      | 10/13(土) | 11/3(土・祝) | 11/8(木) | 全調査日(全地点)合計 |
|------|----------|-----------|---------|-------------|
| 宿泊客  | 44.9%    | 55.4%     | 35.5%   | 47.1%       |
| 日帰り客 | 38.7%    | 33.7%     | 32.9%   | 35.1%       |

【1人あたり観光消費額に占めるひこにゃんグッズ購入費の割合】

|      | 10/13(土) | 11/3(土・祝) | 11/8(木) | 全調査日(全地点)合計 |
|------|----------|-----------|---------|-------------|
| 宿泊客  | 8.9%     | 11.2%     | 6.9%    | 9.3%        |
| 日帰り客 | 9.3%     | 9.9%      | 9.4%    | 9.7%        |

彦根城築城400年祭 経済効果測定調査 報告書より  
<http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/jrc/annual-no8/no8-6-3.pdf#search=>

30



31

### 優れたキャラクターの開発

- ① イベントの中身を表現し、伝えようとする役割
- ② イベントのテーマやキャラクターを色やデザインで表現する役割
- ③ そのイベント自体に別のイメージを与える役割

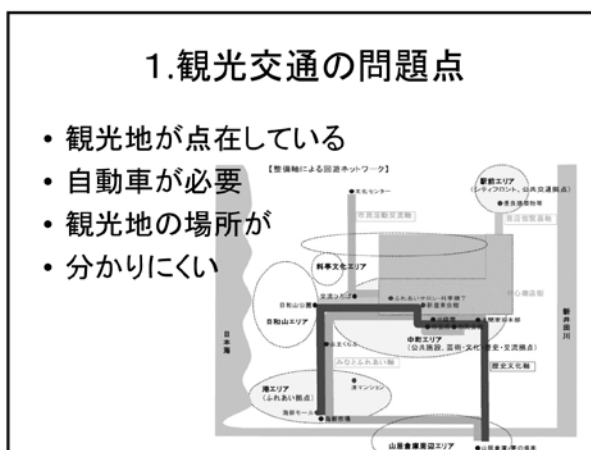
荒木, 長照; 田口 「自治体開発キャラクタのバプリシティ効果の推定: 平成連都1300年記念マスコットキャラクタ」大阪府立大学経済研究. 2008, 54(2), p.55-70

青木幸弘「ブランド構築におけるキャラクタの役割」、青木幸弘他編「ブランド構築と広告戦略」J1 pp. 345-374、日経広告研究所、2000.

32



33



34

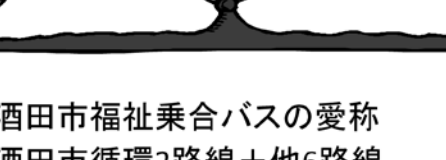
- |             |               |
|-------------|---------------|
| ・ 評価の低い項目   | ・ 観光へのニーズ・改善点 |
| ・ 観光情報・案内表示 | ・ 案内表示が分かりにくい |
| ・ 交通手段・道路状況 | ・ 公共交通が不便     |

35

### レンタサイクルの問題点

- ・ 高齢者は使用できない
- ・ 雨の日は使用できない
- ・ 台数に限りがある

36



るるるんバス

- ・酒田市福祉乗合バスの愛称
- ・酒田市循環2路線＋他6路線
- ・乗車賃100円
- ・⇒観光用に使えないだろうか？

42



### 3、観光特化バスの必要性

- ・ぐるっと松江レイクライン



- ・500円で一日フリーパス
- ・20分に一本運行、主要観光地を50分で一周
- ・車内で観光マップを無料配布

43

### 3.観光特化バスの必要性 -るんるんバス改良案-

- ・土日祝のみ、路線と運行時刻を改定する
- ・名称と外装の変更
- ・観光マップの作成、配布
- ・地元商店との協賛

44

### 観光特化バス創設の目的

- ・酒田市を「分かりやすい観光地」にする
- ・利便性向上による満足度アップ
- ・地元商店との相互扶助による地元活性化

45

### 商店街と酒田の活性化に向けて



46

### 中町商店街の現状

- ・シャッターが閉まっている
- ・空き店舗が多い
- ・客足が遠のいている



47

### 1.自家用車の普及

- ・移動手段の変化  
徒歩→自転車→自家用車

⇒行動圏が広がり、  
気軽に遠いところに行けるようになった。

48

## 2.コンビニ、スーパーの普及

- ちょっとした買い物  
→ 近く  
→ 品揃えのよいところにいきがち



また、広い駐車スペースが利用者にとって  
効率がよい。

49

## 3.消費者の好みの変化

- 現在→ものがあふれている
- 値段や素材を自分好みに選択

⇒ よって、品揃えが豊富な大型店舗に  
人気集中

⇒ 一方、昔からの商店街の呉服屋は  
業務縮小を迫られる。

50

## 4.加工食品、調理済み食品

- 女性の社会進出

商店街→帰宅→調理  
時間がかかる、負担大きい

品揃え  
近隣商店街<量販店



51

## 5.ドーナツ化現象

- 中心市街地から郊外へ  
お店増加、多様化

旧市街では過疎化、高齢化  
→ 商店街が衰える



52

## 内部要因

- 店主の高齢化  
急激な時代の流れについていけず、  
時代遅れになる

- 商店街  
→ 商店のあつまりにすぎない  
→ 結束力が弱い



53

## 「酒田まちなかサロン」

- 物販
- まちづくりイベント
- 「街の詩」、「街の写真」展示
- その他イベント  
料理教室、木工教室など



54

## 酒田どんしゃん祭り -MUSIC FESTIVAL-

酒田市の中心街が商売繁盛を願って開催

### どんしゃん

→舟を飲み込む伝説の大魚どんしゅうから転じた名称

55

## 「商店街マップの作成」

- 商店街の魅力PR
- 配布により認知度UPをはかる
- ポイント制の導入でリピーター獲得

56

## 「シャッターペイント」

- 開店していない時間、閉じたままでも楽しめる
- 描いた人がまわりの人と見に来る  
→集客にもつながる

これまでなかった人とのつながりを生み出す

57

## 「看板商品の作成」

- それを目当てにくる客の獲得を目指す
- 提案 お米商品 庄内米をもっとPR
- ネット販売



58

## 「オンデマントバス」

- 乗車時間、場所を指定し利用
- 時間的、経済的ロス最小限に
- 環境にもやさしい
- 普段も使える、観光客も気軽に利用



59

## 3.おわりに～酒田未来ビジョン

- まだ実現できていない施策はたくさんある
- 松尾芭蕉が観光の目玉になるのでは
- 酒田市の目指す方向性
- ⇒観光産業の振興と地元経済活性化
- ⇒「訪れたい都市」ナンバーワンへ

60

## 今後の課題

- 実現可能性の精査

- 周辺都市との連携

- 市民の受け入れ態勢



61



62

## 第2グループ

## 本間光丘の再評価

橋本慎也／村田大介／内田ユリ／森川良穂／池田 涼

## 1. はじめに

(文責：内田ユリ)

合宿セミナー参加者に配布された酒田市の資料の中に、必ずといっていいほど頻繁に登場する名前があった。「本間光丘」—江戸時代後期の商人資本家であるが、ただの豪商とはどうやら紹介のされ方が違う。砂防林建設をはじめとする数多くの慈善事業がたたえられており、現代にまで伝わる公益思想の祖という書き方をしている文章もあった。

詳しく見てみると、確かに慈善事業に多くの私財を投入しているようである。豪商であることを考えればそれだけの資金を持っているのは当然ともいえるが、どうして一商人があれほどの慈善事業を行ったのか。「公益のため」「共存共栄」というが、実は裏があって最終的には全て自分の利益につながっていたのではないか。そういった疑念のもと、この「本間光丘」という人物を再検証し、言い伝えだけでなく自分たちで評価してみようと考え、今回研究の対象に設定した次第である。

結果から先にいうと、当初の疑念は覆ることなく、再評価と呼ぶに相応しくない内容になってしまったかもしれない。しかし、改めて事実を咀嚼し、現代に生きる新たな視点を見出すことができたのは、この研究の成果であろう。

本報告書では、はじめに本間光丘の一般的評価を明らかにし、農民と光丘自身の両財政状況を比較する。その上で光丘の事業を詳しく考察し、新たな視

点を模索する。

## 2. 本間光丘の一般的評価

(文責：村田大介)

## 1) 本間光丘とは

本間光丘とは1732年(享保17年)、本間家の2代目、本間光寿の三男として生まれた、酒田(現山形県庄内地方)の商人である。本間家とは酒田を代表する商家として知られ、光丘の時にはすでに問屋業を中心とした商いでかなりの成功を収めており、しっかりと財政基盤ができていたとされる。その基盤を基にさらなる財産を築き、本間家の名を日本中に知らしめたのが、今回調査した本間光丘である。そのため光丘は「本間家中興の祖」とも呼ばれ、本間家歴代の中でも最もよく知られている。そんな光丘は、商人となるべく、19歳の頃に播州姫路の豪商、奈良屋権兵衛のもとへはるばる修行に行き、およそ三年間商売を学んでいる。その後2代目が亡くなったため、酒田に戻り、後を継ぐ形で23歳の若さで3代目本間光丘として表舞台に登場したのである。その後光丘は、一生の間に多くの業績を残している(その業績についてはのちに詳しく触れる)。そして光丘は享和元年、70歳でその生涯を閉じたとされている。

## 2) 本間光丘の業績

彼の業績は生涯を通じてさまざま挙げられるが、

今回は大きく三点に分類する。

#### ①商人としての光丘

本間家は代々問屋業を中心に栄えてきたが、光丘のころからは問屋業で蓄えた資本を基に貸金を中心とした金融業や土地経営（地主経営）などの商売にまで及んでいた。そこで商人としての光丘の業績をさらに分類すると「問屋業」「金融業」「土地経営」の三点が中心となる。

問屋業に関しては、本間家は代々船などを使って交易を行い（江戸時代の総合商社ともいえる）利益を上げていたとされている。また、金融業では問屋業で蓄えた資本をもとに町民、農民、武士、大名にまで貸金などの事業を拡げ、次第に大きな利益を上げていった（現在の消費者金融や銀行などの機能に近い）。そして、土地経営において、質地政策で土地の集積を促進させ、遂には日本一の大地主と呼ばれるまでに至ったのである。

#### ②政治家としての光丘

以上のように商いで大成功を収めた光丘は、藩の目に留まり、悪化していた藩財政の立て直しの協力を求められるようになる。そこから光丘は商人としてのみならず政治家としても活躍をはじめた。まずは藩の財政整理に尽力することとなった。具体的には大名の放蕩を改める藩財政の予算案を実行した。また武士にはお金に困っているのにもかかわらず、「武士は食わねど高楊枝」などと嘯く態度を改めさせるため、低金利でお金を貸し、生活の改善を促し、農民や町民にも低金利でお金を貸すことで、武士と同様に生活の改善を促した。これらの政策が認められ、藩からは最終的に御郡代という藩士同格（藩の武士・藩臣）の称号を手にするまでに至っている。それは、光丘は商人ではあるが、武士と同じ権限が与えられていたことを意味する。その後は、彼の庄内藩での手腕が評価され、庄内藩のみならず、米沢藩をはじめ新庄藩、松山藩などさまざまな藩から財政再建の要請を受けて、それぞれの藩で成果を残していった。以上のように、彼は藩政治の立て直しに大きく貢献し、商人としてのみでなく武士としても才能を発揮したとされる。

#### ③社会事業家としての光丘

商人としても成功し、政治家として藩財政の立て直しにも貢献した光丘であるが彼の功績はこれだけ

にとどまらない。やはりよく知られた西浜の植林事業から、当時は一大事であった火事のための防火基金づくり、および罹災者への救済事業、神仏仏閣に対する寄進など儲けを決して独占するようなことはしなかったとされる。

以上三点をまとめると、本間光丘は、庄内藩に取り立てられ藩財政の窮乏を救済し、東北有数の富裕藩を改革。やがて、東北諸藩に対する大名貸しによって、自己の富を着々と築きあげ、地方農民や町民に対しても、社会事業を行いながら貸金制度を確実に進め、本間家の基礎を築いたということになる。

### 3) 本間光丘の一般的な評価

光丘の業績の中でも見てきたように、商人として、武士として、そして社会事業家として、自分が儲ければそれでよい、といった考えではなく、光丘自身も儲かり、相手も喜ぶこと、つまり「共存共栄の思想」を持った人物というのが光丘の一般的な評価である。そして当時の光丘の尊敬を示すことばに、「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」といった言葉が残されており、光丘は当時の人々からも尊敬を受けていたと考えられる。

以上をまとめると、今も昔も、本間光丘の一般的な評価はとても高いと言える。

## 3. 庄内藩における農民の生活

（文責：池田涼）

### 1) 酒井家の影響

光丘の事業について検証する上で、当時の農民の暮らしぶりについても調査してみた。当時の農民の暮らしについては、「酒井家」「飢饉」「徳政令」の影響が強くあったと考えられる。

まずは、酒井家について。酒井家は、代々庄内藩を治めていた一家である。光丘が存命だった頃の庄内藩の藩主は、酒井家7代目忠寄、8代目忠温、9代目忠徳の三名である。7代目の忠寄は、1731年（享保16年）に藩主となっている。そして、1739年（元文4年）には、庄内藩は幕府より日光東照宮の整備を命じられている。その際、庄内藩で負担した費用は、48,470両で当時としては、莫大な出費であったとされている。

その後、1749年（寛延2年）には、忠寄は老中へと任命される。老中に任命されたことにより、忠寄の幕僚との交際費は増加していった。それに伴い庄内藩の江戸での支出も増加していったのである。支出が増加したことによって、庄内藩の財政は圧迫していった。しかし、このような状況においても、当時は忠寄の現状認識が甘く、江戸の藩邸での贅沢な暮らしは続いていた。その後、藩の財政が改善されることはなく、1766年（明和3年）に忠寄は死去している。忠寄の死後、同年（1766年）に忠温が藩主に就任するも、病弱であったため翌年（1767年）に死去している。そして、その後忠徳が9代目藩主となるが、当時忠徳は13歳ということもあり、藩の体制は安定せず、依然として庄内藩の財政は改善されることなく、悪化するばかりであった。

## 2) 飢饉により困窮する農民

酒井家の影響もさることながら、当時は、飢饉の多い頃でもあった。1755年（宝暦5年）と1756年（宝暦6年）には、冷害や害虫の影響により相次いで凶作が発生、「宝五の飢饉」と呼ばれた。この宝五の飢饉は東北地方一帯に被害を及ぼした。しかし、このような状況にもかかわらず、当時の庄内藩は農民に対して、年貢の比率が毎年一定の定免法を用いて、年貢を納めるように命じたのである。そのため、農民の多くは年貢を納めることができず、未納米を抱えることとなった。そして、藩は未納米に対しては14割の利子を課し、翌年に納めるよう農民に命じたのである。このように、当時の農民にとって年貢や未納米は重荷であった。このような状況において、農民は自分たちが口にする米も十分に確保できず、粥や芋などを食べて空腹をしのいでいたのである。

そして、更に追い打ちをかけるように、1780年（安永9年）には庄内大地震が、1783年（天明3年）から1788年（天明8年）にかけては、冷害により、またしても東北地方で凶作が発生、「天明の大飢饉」と呼ばれた。庄内藩における被害は小さかったが、この飢饉の影響を強く受けた、他の東北地方の難民や乞食が、大量に庄内へと押し寄せた。この当時、庄内藩では領内の農民に対しては備蓄米や粥を施したが、難民や乞食は食にありつけず、路上で息絶え

る者が多かった。その一方で、領内の農民の中には食を求めて寺に出家する者が増加、1789年（寛政元年）には「出家制限令」が出されたほどである。このように、農民の中には農業を止める者が多く、耕作放棄地が増加した。そのため、年貢の納入は滞り、庄内藩の財政は益々厳しくなっていたのである。

## 3) 徳政令の影響

そして、この頃の農民の状況を当時の庄内藩士、白井重固は、その著書『野中の清水』において、次のように述べている。

「御郡中の百姓は、困窮のため年貢不納の者多く、なかには、家を捨て妻子を連れ他国に逃れ去る者数知れず。その百姓の田地は村あげ地（村の管理地となる）として、不納の年貢は残った村人や親類の負担となり、なんとかやっていた百姓も、このため潰れ百姓になっていく」と。

当時、この状況を打開しようとしたのが、白井重固の兄で庄内藩士の白井矢太夫である。そして、1796年（寛政8年）に、矢太夫らによって「徳政令」が行われたのである。徳政令により、農民がそれまで抱えていた借財や借米は、返済しなくてもよいこととなった。こうして農民の暮らしも安定するかに思われたが、その後も1833年（天保4年）には地震や大凶作が発生し農民の暮らしに影響を及ぼしている。

このように、当時の農民は藩主や天災の影響もあり、常に困窮状態にあったのである。

## 4. 本間光丘の財政状況

（文責：内田ユリ）

「2. 本間光丘の一般的評価」では、本間光丘が一般的に「共存共栄をめざした商人」という評価を得ていると述べた。しかし、今まで見てきたように当時の農民の暮らしは困窮しており、とても生活を立て直したとはいえない状況であった。共存共栄の片一方が揺らぎ始めたが、ここで気になるのは光丘自身の財政状況である。この章では光丘の資産とそれに関係する事業について見ていく。

表1. 光丘の資産

| 家督相続時                   | 1代(50年間)で築いた財                         |
|-------------------------|---------------------------------------|
| ・金 1000両あまり<br>・田地 350俵 | ・貸金 54781両<br>・銀 49963貫<br>・田地 16000俵 |

(出典：酒田市史)

表1は、光丘の家督相続時の財産と、1代で築き上げた財を示したものである。田地にして45倍の資産を1代で築き上げたのである。農民が困窮している中これだけの財を自らに引き寄せるとは、並の商人が成せる業ではない。何か裏があるのでは、という問いにはあとで答えるとして、表1からは分からない光丘の資産の動きについても言及しておく。

「共存共栄をめざした商人」と呼ばれる所以でもあるが、光丘は砂防林植樹に代表される多くの慈善事業を残した。藩士の財政を立て直すために行った低利・長期返済の貸付に4000両の自己資金を投じ、また藩の財政改革に参画した約30年間のうち、藩のために投入した金も20万両を超すといわれている。天明の大飢饉の際、備荒粃のおかげで1人の死者も出さなかった庄内藩だが、その備荒粃20000俵を投じたのも光丘である。そのほかにも日枝神社など、社寺への寄進も多く行っていた。

さらに忘れてはならないのが、巨額の損をも出しているという点である。前章でも見たように、反光丘派の白井矢太夫により財政改革が実行され、借米や借金を帳消しにする「徳政」が行われた。この徳政により農民が被った恩恵は莫大なものであった。一方、貸し付けていた側の光丘にとっては、今まで農民に貸し付けていた巨額の資金が水の泡になったため、大損となってしまったのである。

このように、光丘はビジネスでは多くの財を築き上げたようだが、慈善事業に私財を投げ打ったうえに巨額の損失を被っていた。確かに最終的な損益で考えるとプラスではあるが、とてもその過程を見ると私益と他益を両立できていたようには思えない。困窮していた農民の状況も考えると、光丘が目指した共存共栄のビジネスモデルは失敗したのではないだろうか。そこで、次章では光丘の事業に焦点をあて、検証していく。

## 5. 光丘の事業と農民

(文責：橋本慎也)

改めて光丘の商業活動について確認しておこう。前述の通り、大まかに分類すると「問屋業」「金融業」「土地経営」に分けられる。このうち、光丘の時代において特に考察すべきは金融業と土地経営の二つである。というのも、光丘以前の本間家は問屋業が中心であったが、光丘は金融業と土地経営に重心をシフトし、それによって莫大な利益をあげたからである。

以降では、金融業と土地経営における経営システムを考察し、共存共栄のビジネスモデルと呼ぶに相応しいものであったか検証したい。

まずは金融業である。光丘は大名貸しなども手がけており、貸し付けの対象は多岐にわたるが、農民との関わりにのみ注目したい。農民に対する貸し付けは、田畑を質入地として抵当することによってなされていた。ただし、そこには当時の他金融業においては見られない三つの特徴があった。

一つめは、入質期間が長期だったことである。旧幕時代には田地質入れ期限は十年季が最も長期とされているが、本間家では三十年期による貸し付けが最も多く、中には百年を超えるものもあった。

第二には、このような長期の期限を設けておきながら、期限が過ぎてもなお請返しが可能だったことである。

第三は、低金利である。宝暦初年で1割から1割5分であり、当時としては破格の低利だった。

このような好条件にもかかわらず、支払いが不可能となった田畑を接収することで、光丘は土地を集積していった。そうして全国有数の大地主になったわけだが、非道な方法で土地を求めたのではないことは明らかである。また、耕作放棄された田畑を担税能力のある本間家が受け入れたという面もあるようである。

次に、土地経営について見ていきたい。本間家では地主業において他地域では見られないような経営を行っている。それは、代家・支配人制度、俵田渡口米制のふたつである。

代家（たや）・支配人制とは、主要な村において自家の所有地とその小作人を管理するためのシステ



ムである。本間家の庄内農村への金融活動は、先に見たとおり田畑を質入地として抵当にするものだった。光丘の時代には1100町歩を超えるほどの土地を有していたので、その管理のためにこのような制度を敷いた。

代家と支配人の職務は同じだったが、代家が遣わされるものであったのに対し、支配人は土地住人に土地管理を依頼したものだたとされる。代家・支配人は小作米の取り立てや保管、日常的な小作人監督や農業指導にもあたった。これに対して、本間家からは給与米のほか、各所の恩典があった。

俵田渡口米は、小作米と同じものだと見なされていたが、大場正巳『本間家の俵田渡口米制の実証分析』によれば違う。

小作は、土地を貸し付けて賃貸料として小作米をとっていた。一方、光丘は土地を貸し付けてなどない。没落農民を「代家」として、労働力付きの土地、すなわち経営そのものを購入していた。渡口米高として表現される生産力総体（労働力と生産手段）を集積し、それに見合うものを地代として収集した。

以上のように、光丘の経営を見てみると、農民にとって非常に「優しい」システムであったことがわかる。得られるはずであった光丘の収益を削っているだけのようにもみえるが、過度に搾取して小作争議が起きたりするおそれを考慮すれば、きわめて理に適っているといえる。当時、百姓一揆が起きた場合、それは藩主の治国不行届だということで幕府は領地を没収するしきたりであり、農民の疲弊には敏感になる必要があった。実際、本間家は大地主にしては珍しく、当時から戦後にいたるまで小作争議ひ

とつ起きなかったといわれている。それには代家・支配人制度などによって小作人の要望をよく聞き入れて、最大限の配慮をしてきたことが一役買っているのだろう。

結論として、光丘の経営システム自体には大きな問題はなく、共存共栄のビジネスモデルが成立しているといえる。農民への救済策が完全に成功しなかったのは事実だが、それは天災や藩財政などの要因が大きく、光丘の評価を揺るがすものではないと考えられる。

## 6.. 光丘とCSRの比較

(文責：森川良穂)

表2. 光丘とCSRの比較

|      | 光丘                                                   | CSR                                             |
|------|------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 基本理念 | ・ 共存共栄の思想。<br>・ 人の役に立つことをするという思想。                    | 利益を優先するだけでなく、ステークホルダー（利害関係者）との関係を考慮しつつ果たす責任のこと。 |
| 活動   | 松林の植林や、低利の貸し付けなど、よりよい社会作りの為の公益事業を展開。<br>例)：植林・低利の貸付等 | 健全で持続可能な社会作りのために社会貢献活動を展開。<br>例)：企業の環境保全活動等     |

(参考：社団法人日本経済団体連合会「CSR推進ツール」)

表2からも分かるように、現代のCSR（企業の社会責任）の考え方と光丘の考え方は、似ているものがあるといえる。光丘の場合、農民に貸し付けを行っていたので、植林活動や災害時の為の積立といった



事業は農民の為の慈善事業であると同時に、農民が栄えることで自分にも利益がめぐってくるという仕組みがある。この事業システムは、CSR の目指すステークホルダーとの関係を高めながら果たす、社会貢献活動というものにつながるものである。

## 7. まとめ

私達の班は、「公益の祖」と呼ばれる光丘が私益と公益を本当に両立していたのか、という疑問から光丘の事業を調べてきた。

そして、光丘の一般的評価、農民の実情、光丘の事業利益と事業システムを調べた。結果、光丘の公益事業は飢饉や天災によって成功しなかったものもあるが、一人の餓死者も出さなかったこと・藩の財政を助けたこと・そしてなにより光丘自身が大きな富を築いていたこと、この三点を考慮すると光丘の事業の素晴らしさというものが見えたのである。

公益を追求するにあたり利益と公益を両立した形、つまり共存共栄の状態をうまく作り出すことは非常に困難である。実際、光丘の利益面では藩にお金を出したことにより大きな損失を被っている。それにもかかわらず、光丘の代で築いた富は莫大なものであった。これは、光丘の本業である商人としての利益が大きかったためである。

公益を追求するには、少なからず資金というものが、投資をせねばならない。しかし、この点で私益が損なわれることになる。そこで、公益事業を行うことで自分に利益が帰ってくる事業システムこそ、理想のシステムと考えられる。この事業システムにおいては、光丘は低利の貸し付けをするという、リターンを考えたシステムを作り出したのである。加えて、商人としての才もあった光丘は、商売をして富を増やすことで、公益事業に費やしたお金を補い、また新たな公益事業を行うといったよいサイクルを生み出したのである。つまり光丘は、失敗はあったものの私益も増やし公益も行うという、まさに理想的な公益の活動を行ったのである。

このような共存共栄のシステムや、理念は現代のCSRにも通じるものがあり、光丘についてより深く学ぶことで現代の公益活動をより深く追求できるの

ではないかと考えられる。

## 参考文献

- 酒田市史編纂委員会 『酒田市史 史料篇第五集 経済篇上』  
酒田市 1971 年
- 佐藤三郎 『酒田の本間家』  
東京都：中央書院 1972 年
- 石川正敏 『庄内風土記 上巻』  
庄内日報社 昭和 47 年
- 佐藤三郎 『庄内藩酒井家』 東洋書院 1975 年
- 大場正巳 『本間家の俵田渡口米制の実証分析』 御茶の水書房 1985 年
- 鈴木旭 『本間光丘 - 人を活かし金を活かす本間流ビジネス マインド - 』 東京都：ダイヤモンド社 1995 年
- 伊豆田忠悦編集 『郷土史時点 山形県』 昌平社出版株式会社 1979 年
- 岡本好古ほか 『歴史の群像 7 挑戦』 集英社 1984 年
- 横山昭男 『酒田市史 改訂版 上巻』 酒田市 1987 年
- 横山昭男、菅田慶信、伊藤清郎、渡辺信 『山形県の歴史』  
株式会社山川出版社 1998 年
- 斎藤正一 『庄内藩』 吉川弘文館 平成 2 年
- 童門冬二 『「本間さま」の経済再生の法則—欲を捨てよ、利益はおのずとついてくる』 東京都：PHP 研究所 2003 年
- 中江克己 『“御家” 立て直し』 青春出版社 2004 年
- 小松隆二 『公益とは何か』 論創社 2004 年
- 本間勝喜 『シリーズ藩物語 庄内藩』 現代書館 2009 年
- 米田正巳 『130 年を超える養蚕と製糸事業の歴史 - 旧庄内藩 (山形県鶴岡市) の松ヶ岡開墾の例にみる』 東京富士大学 2010 年

## 参考 URL

- 社団法人日本経済団体連合会 (以下のサイトから CSR についての記事を参照)

<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/csr.html>

## ご協力いただいた方々

酒田市立資料館の職員の皆様  
どうも有難うございました。

## 本間光丘の再評価

池田涼（東北公益文科大学3年）  
内田ユリ（慶應義塾大学2年）  
橋本慎也（慶應義塾大学2年）  
村田大介（慶應義塾大学1年）  
森川良穂（慶應義塾大学1年）

1

## アウトライン

- ▶ 光丘の一般的評価
- ▶ 当時の農民の生活
- ▶ 光丘の懐事情
- ▶ 光丘の商業活動と農民
- ▶ 光丘の理念とCSRの理念

2

## 本間光丘とは

- ▶ 出羽酒田（山形県酒田市）の商人
- ▶ 本間家中興の祖
- ▶ 江戸中期に活躍

3

## 本間光丘の業績

- ▶ 商人としての光丘
- ▶ 武士としての光丘
- ▶ 社会事業家としての光丘

4

## 商人としての光丘

- ▶ 問屋業…貿易による利益  
（総合商社）
- ▶ 貸金業…貸金による利益  
（金融機関）
- ▶ 地主業…土地経営による利益  
（不動産会社）

5

## 武士としての光丘

- ▶ 庄内藩の財政再建
- ▶ 他藩の財政再建  
（米沢藩・新庄藩・松前藩など）

6

## 社会事業家としての光丘

- ▶ 西浜の植林事業
- ▶ 火事対策(防火基金、罹災者救済)
- ▶ 神仏仏閣に対する寄進  
などその他多数

7

## 本間光丘の一般的評価

- ▶ 共存共栄の思想の持ち主
- ▶ 本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に  
↓  
本間光丘に対する一般的評価は高い

8

## 庄内藩における農民の生活

- ▶ 酒井家の影響  
→ 当時の藩主は7代忠寄、8代忠温、9代忠徳
- ▶ 困窮する農民  
→ 凶作や飢饉が相次ぐ
- ▶ 徳政令による農政改革  
→ 白井矢太夫らによって

9

## 酒井家の影響

- ▶ 日光東照宮の普請を命じられる(1739年)
  - ▶ 7代忠寄、老中に任命(1749年)  
→ 江戸における支出の増加
  - ▶ 薄命な8代忠温・9代忠徳、13歳で藩主に。  
→ 安定しない藩の体制
- ⇒ 藩の財政は次第に悪化

10

## 困窮する農民

- ▶ 宝五の飢饉による影響(1755～1756年)
- ▶ 藩からの過酷な年貢の取立て  
→ 自分たちの食べる分を確保できないほど
- ▶ 天明の大飢饉(1783～1788年)  
→ 流れ込む他国の難民、出家制限令が出される

11

## 徳政令による農政改革

- ▶ 追い詰められる農民  
→ 白井重固著「野中の清水」より
  - ▶ 白井矢太夫らによる徳政令(1796年)  
→ 農民の負担軽減
  - ▶ 依然として続く災害
- ⇒ この頃の農民は常に困窮状態にあった

12

## 一般評価では...？

- ▶ 共存共栄を目指した商人
- ▶ 当時の農民は困窮していた
- ▶ 光丘の懐事情は...？

13

## 光丘の資産

- ▶ 家を継いだ際の資産  
金1000両あまり  
田地(あがり)16町(小作料)16町(表分)
- ▶ 1代(光丘)の資産  
貸金547両  
銀167両  
田地16町

あくどい商人  
だったのでは？

酒田市史

14

## あまたの慈善事業

- ▶ 砂防林
- ▶ 本間役所の資金4000両
- ▶ 備荒粉20000俵
- ▶ 藩への献金20万両以上
- ▶ 日枝神社などへの寄進

15

## むしろ損してる?!

- ▶ 白井矢太夫による寛政改革→「徳政」



- ▶ 莫大な額の献金が水の泡に...！

16

共存共栄のシステムは失敗策だったのか...？

17

## 光丘の商業活動

- ▶ 問屋業
- ▶ 金融業
- ▶ 地主業
- ▶ 光丘の時代には金融業・地主業に重きを置くようになる

18

## 光丘の金融業

- ▶ 田畑を質入地として抵当
- ▶ 長期の期限……30年期が多い(10年で長期とされた)
- ▶ 期限が過ぎてもなお請け返し可能
- ▶ 低金利……1割～1割5分
- ▶ 放棄された田畑を担税能力のある本間家が受け入れる

19

## 光丘の地主業

- ▶ 代家・支配人制度
- ▶ 自家の所有地とその小作人を管理するためのシステム。小作米の取り立てや保管、日常的な小作人監督や農業指導。
- ▶ 俵田渡口米制
- ▶ 没落農民を「代家」として、労働力付きの土地、すなわち経営そのものを購入していた。渡口米高として表現される生産力総体(労働力と生産手段)を集積し、それに見合うものを地代として収集した。

20

## 農民の生活

- ▶ 大地主にしては珍しく、小作争議ひとつ起きなかった
- ▶ 小作人の要望をよく聞き入れて、最大限の配慮をしたため
- ▶ 庄内の生活レベルは高かった(幕府の巡見使記す)

21

## 現代の公益事業CSR

- ▶ 企業が事業活動において利益を優先するだけでなく、顧客、株主、従業員、取引先、地域社会などの様々なステークホルダー(利害関係者)との関係を重視しながら果たす社会的責任のこと。

22

## CSRの基本理念

- ▶ 健全で持続可能な社会作りのために社会貢献活動を展開すること



光丘の目指した共存共栄の理念

23

## 現代のCSRの先駆、光丘

共存共栄の理念  
事業システム



現代のCSRの先駆的存在

## 主な参考文献

- ・ 酒田市史編纂委員会『酒田市史 史料篇第五集 経済篇上』、酒田市、1971年
- ・ 佐藤三郎『酒田の本間家』、中央企画社、1972年
- ・ 石川正敏『庄内風土記 上巻』、荘内日報社、1972年
- ・ 佐藤三郎『庄内藩酒井家』、東洋書院、1975年
- ・ 大場正巳『本間家の俵田渡口米制の実証分析』、御茶の水書房、1985年
- ・ 鈴木 旭『本間光丘―人を活かし金を活かす本間流ビジネスマインド―』、ダイヤモンド社、1995年
- ・ 小松隆二『公益とは何か』、論創社、2004年
- ・ 中江克己『御家"立て直し"』、青春出版社、2004年
- ・ 本間勝喜『シリーズ藩物語 庄内藩』、現代書館、2009年
- ・ 米田正巳『130年を超える養蚕と製糸事業の歴史―旧庄内藩(山形県鶴岡市)の松ヶ岡開墾の例にみる』、東京富士大学、2010年
- ・ ご協力いただいた方々
- ・ 酒田市立資料館の職員の皆様

## 第3グループ

## 最上川について

國井耕太郎／久村亮介／宮上七重／伊藤奈津美／進藤貴則

## 1. はじめに——「最上川」という視点

「庄内を知る・芭蕉が見た庄内の『生命（いのち）』」をテーマに、8月31日から9月3日の3泊4日の日程で開催された「庄内セミナー」。私たちはこの四日間、山形県酒田市を中心に俳人・松尾芭蕉の足跡をたどった。講師の基調講演をはじめ、象潟郷土資料館の見学、羽黒山登山、庄内のフィールドワークなど、貴重な経験をさせていただいた。その中で私たちが最も圧倒されたのが、庄内の「自然」であった。彼方まで広がる庄内平野。雄大にそびえる出羽三山。稲穂の揺れる象潟の九十九島。山伏の方と登った荘厳な羽黒山。宿泊所「眺海の森・さんさん」から見た息をのむほどに美しい夕日。夜空にきらめく幾千もの星ぼし。

「庄内の魅力はこの素晴らしい自然にあるのではないか？」と考えた際、真っ先に頭に浮かんだのが庄内の象徴ともいえる「最上川」の存在だった。生命の水をたたえ、悠々と流れる最上川。<sup>1)</sup>今回はそんな最上川について（1）歴史面（2）経済面（3）自然面という異なる3つの側面から考察し、その価値を再考してみたい。

## 2. 歴史からみる最上川

最初に、最上川という川の自然と、そしてこれに対し人間がどう関わり暮らしてきたかについて軽く触れておきたい。最上川はこれまで何度も氾濫をし

ている。この氾濫には台風性の場合と、8月下旬から9月あたりに日本海を通る温帯性低気圧による豪雨の場合の二通りがある。平成元年までの主な例として、大正2年8月、昭和19年7月、昭和42年8月、昭和44年8月、昭和50年8月がある。また、初期の洪水の多くで破堤が起こっている。こういった自然の災害や、また人間の生活に欠かせない農業・商業のために、有史以来多くの人々が最上川と相対した。直江兼続、最上義光、北楯大学利長、河村瑞賢、西村久左衛門らであり、彼らはそれぞれ川の氾濫や川辺の農業開発、河川舟運のための整備や西日本への航路を開いたりした。また、昭和30年代に定められた「農業基本法」により、大農業育成という弊害が生じて出稼ぎや過疎化が進んだことで、工場の誘致を行い第二次産業の割合が増加しているなど、第三次産業が盛んになった近年でもその影響力は衰えていない。さらに、人々の生活とは切っても切り離せないような強いつながりがいまだにあるのだ。

（文責：久村亮介）

## 3. 経済からみる最上川——最上川舟運の衰退

舟運は江戸時代より減少傾向にはあった。

明治時代には、ヨーロッパより導入されたエンジン搭載大型汽船の就航は、水深の浅い河口港に立地する酒田港にとって港としての機能に関わる問題となった。さらに、明治27年(1894年)の大地震によって、船場町一帯が壊滅的な打撃を受け、酒田港は河



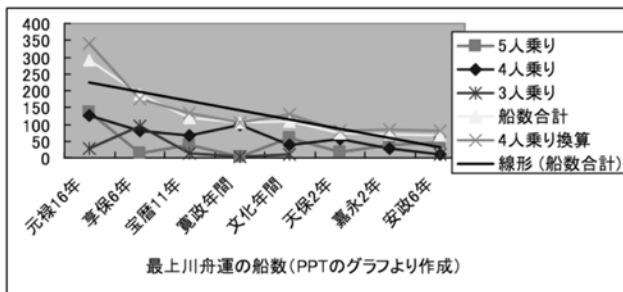
口港から海岸港への脱皮を余儀なくされた。

このピンチを打開するために酒田港は最上川河口港から海岸港へ築港しなすことになる（この築港は最上川と酒田港を完全分離するもの）。そして第三種港から第二種港に格上げされ、全国 39 港への仲間入りを実現した。このことから酒田港は最上川舟運の港としては衰退したが、日本の海岸港として力をつけたのではないかと推測する。

そして酒田港の最上川舟運の港としての機能が低下することは最上川舟運の衰退へと繋がっていくものと考えられる。

また同時期に鉄道国有法による新幹線の敷設があり、舟運から速くて安全な鉄道へと転換していった。そして 1903 年の奥羽線の開通、1914 年の陸羽西線の開通により最上川舟運の運搬をまかなうことのできる鉄道が配備されたことが、荷物輸送ルートに変化をもたらし、舟運関係者に大きな打撃を与えた。このことから、舟運関係者は舟運から他の事業へと転換していき、舟運従事者の人数も減っていったことも衰退の原因と考えられる。

（文責：進藤貴則）



#### 4. 自然からみる最上川

舟下りなどの文化遺産や様々な景観などの存在から、最上川は山形県全体の重要な観光資源となって

いる。また、酒田市が行った酒田市環境基本計画策定のためのアンケート<sup>2)</sup>において、「酒田市の環境といえど？」という問いに対し、砂丘や鳥海山などの答もあるなかで全世代において「最上川」と答えている割合が一番多いことから地域住民の中で最上川がどれほど大きな存在であるかが分かるが、同時に、酒田市と同じく最上川が市内を流れる村山市の行った環境に関するアンケート結果<sup>3)</sup>をあわせてみると、どちらの市でも水辺のきれいさに不満を持っている人の数が決して少なくないことが分かる。そこで、最上川の自然面として、川の印象を悪くしているゴミ問題と水質問題という二つの問題について調査を行った。

428 もの支流をもち、県全体の約 76% の土地から水が集まってくる最上川ではゴミの量は膨大となる。国土交通省が 13 年度に回収したゴミ<sup>4)</sup>は大型ダンブ 10 台でも回収しつくせないほどであった。また、平成 19 年度に行われた最上川河口ごみ定点調査結果<sup>5)</sup>によると、莫大な量のごみ、特にプラスチック類の破片（硬質プラスチック、プラスチックシート・袋、発泡スチロール破片）が海に流れ出ていっていることが判明した。このプラスチック類の破片は川を下りながら破片化していっていると考えられているのだが、海へ流出して更に微細な破片となってしまうのは回収することはほぼ不可能となってしまうため、川の汚染のみならず海洋汚染をもすすめてしまう。最上川のゴミ問題は、このように流域からでた莫大な量のゴミが川はもちろん海まで汚染しているという点で特に深刻であるといえる。

このようにゴミ問題は非常に深刻ではあるが、現在、地域市民による川の清掃活動も活発だ。特に酒田では 19 年度は海岸、港湾、河口部では 26 団体で延べ 43 回の回収活動<sup>6)</sup>が行われ、30 トン以上のゴ

1) 松尾芭蕉も、『おくのほそ道』において「五月雨を集めて早し最上川」「暑き日を海に入れたり最上川」という最上川に関する二首の俳句を詠んでいる。

2) 酒田市民部環境衛生課環境保全係担当「酒田市環境基本計画策定のためのアンケート調査結果」、<http://www.city.sakata.lg.jp/ou/shimin/kankyo/hozen/files/sanshahikakukekka.pdf>（閲覧日：2010 年 11 月 29 日）

3) 村山市環境課「村山市環境基本計画」、<http://www.city.murayama.lg.jp/0230kankyou/kurashi/kankyou/documents/plan.pdf>（閲覧日：2010 年 11 月 29 日）このサイトのⅦ. 資料 2. 市民、学生、事業所へのアンケート調査を参照した

4) 国土交通省山形河川国道事務所「ゴミストップマップ」、<http://www.thr.mlit.go.jp/yamagata/river/gstop/mura.html>（閲覧日：2010 年 11 月 29 日）

5) 環境省「漂流・漂着ゴミに係る国内削減方策モデル調査 地域検討会（山形県）報告書第Ⅲ章 1」、<http://www.env.go.jp/earth/report/h21-04/1yamagata/chpt3-1.pdf>（閲覧日：2010 年 11 月 29 日）

6) 環境省「漂流・漂着ゴミに係る国内削減方策モデル調査 地域検討会（山形県）報告書第Ⅲ章 1」、<http://www.env.go.jp/earth/report/h21-04/1yamagata/chpt3-1.pdf>（閲覧日：2010 年 11 月 29 日）

ミが回収されていて、市民の問題意識の高さが窺える。

しかし、ゴミ発生の原因を無くさなくては、永久に新たなゴミが次から次へと生まれるだけで、ゴミ問題は無くならない。現在おこなわれている川の下流に住む人々の努力だけでなく、問題解決には内陸部の広い地域の人々の協力が欠かせない。

よって、問題解決のためには、これからは川の清掃ボランティアと並行して、内陸部とのゴミ問題に関する情報交換をより緊密化し問題意識を共有する必要があるといえる。また、問題解決に向けた具体的な方策としては、プラスチック類の破片が多いという現状からレジ袋の有料化などを県全体で進めるなどといったことが考えられる。

次に、見た目からは汚染の程度を把握することが困難な水質についてであるが、最上川のBOD値の河川縦断と経年変化のグラフ<sup>7)</sup>からは最上川の変った性質が見えてくる。BODとは水がどれほど有機物で汚染されているかを表す指標なのだが、一般的な河川は汚染物質の蓄積する下流ほどBOD値が高いのだが、最上川はむしろ下流の方が低い値であり、中流の値が一番高いのだ。この原因の解明が最上川全体の水質問題解決につながると考え様々な水質汚染原因を調査した。

平成21年度版の山形県の環境白書のグラフ<sup>8)</sup>からは、BODの値が黒滝橋～基点橋間で上昇していることが読み取れ、この区間に水質汚染の原因が潜んでいると予想された。そこで、さらに、実際にその区間の水中に存在する物質を最上川フォーラムの行った調査<sup>9)</sup>をもとに調べると、だいたいどの年も微生物の栄養となるリンと窒素が多く含まれている事が分かった。このリンと窒素がBOD値上昇の原因物質と思われるので、これらの物質を排出する二

つの汚染原因が想定できた。それは過剰施肥と都市からの排水である。

だが、調査を進めていくと、過剰施肥の方は、確かに果樹栽培地域<sup>10)</sup>と汚染区間が重なるため汚染と関連がありそうだが、流域に果樹栽培地域が存在する寒河江川がそれほど汚れていないこと、また、この地域の果樹栽培が水田より圧倒的に川に負荷を与えている事が考えにくいことなどから過剰施肥は水質汚染の主な原因とは言えないという結論に至った。

都市から排水については、ちょうどBODの値が上昇する区間へ人口<sup>11)</sup>・工業<sup>12)</sup>の集中する地域から排水が流れこんでいることが分かり、更に、水質が同様に悪い上流の糠野目橋付近も果樹栽培地域ではなく、人口・工業の集中する地域であることも判明したため、都市からの排水がBOD値上昇の主な原因であろうという結論に至った。

しかし、汚染区間の前半部分に存在する朝日、大江、寒河江町の生活排水処理施設普及率はそれほど高くないが、最もBODの値を押し上げていると思われる人口密集地域の生活排水処理施設普及率は非常に高い<sup>13)</sup>ので、単に排水処理場を普及させるだけじゃ問題は解決しないであろう事が分かった。このように人口密集地が高い生活排水処理施設普及率にありながら水質汚染の原因となっているのは、普通の排水処理ではそれほどリンと窒素が取り除けないためと考えられる。

以上のような現状から、水質汚染解決への方策としては、普及率の低い地域での排水処理施設の更なる普及、大都市への一般的な排水処理に比べて大幅にリンと窒素を取り除くことを可能とする高度処理の導入、ヨシなどの植物を利用した川の浄化能力の向上が考えられる。とくに大都市からの排水と最上川の合流地点に近い基点橋付近のBOD値がどの年



も高いという事は、普通に処理された大都市の排水に含まれるリンと窒素の量が基点橋付近では最上川の自浄作用を超えているという事だと考えられるので、普及率の低い地域での排水処理施設の更なる普及に加え、大都市に高度処理を導入することは恒久的な水質改善へ繋がると思われる。また、リンや窒素を吸着する植物により川の浄化能力を向上させることも、同様に恒久的な水質改善へと繋がると考えられる。

以上においてゴミ問題と水質問題に対して提案した方策を実行することにより、最上川清流化が実現され、観光資源としての価値も上昇し、山形県や地域の人々は様々な面で利益を得る事が出来るようになる。

(文責：國井耕太郎)

## 5. まとめ

### (1) 結論

これまで述べてきたように、最上川は歴史面において、人々の生活の中心をなしてきた。舟運における経済効果をはじめ、最上紅花などの特産物も生み出しており、文化的側面からも多大なる利益をもたらしてきたといえる。その重要性ゆえ、氾濫など幾多もの自然災害に直面した際にも優秀な指導者のもとでその復興を遂げてきた。

しかし、経済面においては衰退する一方である。エンジン搭載大型汽船の就航、明治27年の大地震、鉄道の着工などによって大きな打撃を受け、舟運としての機能を実質的に失っているのが現状である。

そんな中、最上川の観光資源としての利用は幅広い。最上川を観光に有効利用するためには、深刻なゴミ問題と水質汚染への対策が必要となる。前述した解決への方策を参考に、地域住民だけでなく内陸部などの広い地域の人々が協力して最上川の自然問題に取り組む必要があるといえる。

### (2) 将来への展望

2007年12月、山形県では「最上川の歴史的景観」をテーマにユネスコ世界文化遺産登録を目指す動きがあった。しかし、文化庁は文化的な価値は認める半面、「普遍的価値を有する可能性が高いとまでは評価されない」「主題や資産構成、保存管理を十分なものにするには、なお相当な作業が見込まれる」と評価し、政府の世界遺産候補(暫定リスト)記載を見送った。<sup>14)</sup>

思うに、最上川の価値評価に関する調査・研究が進み、また自然環境面で改善が見られれば、世界遺産登録への道は近づくはずである。また、世界遺産登録が難しくとも、最上川を観光資源として今まで以上に有効に活用することは可能であろう。

最上川は「母なる川」と呼ばれている。現在まで地域住民に慕われ、大きな役割を果たしてきた。そんな母なる最上川の価値をもう一度見直し、環境を整備して最善の状態に保つことが、今を生きる私たちの使命ではないだろうか。今回の発表で、最上川への問題意識を持ち、長い歴史と共に継承されてきたその価値を意識する方が一人でも増えてくれれば嬉しい限りである。

(文責：宮上七重)

7) 国土交通省酒田河川国道事務所「水質調査(最上川)」、<http://www.thr.mlit.go.jp/sakata/office/works/river/kanri-suishitsu-f.html> (閲覧日：2010年12月3日) このサイトの河川縦断及び経年変化(BOD75%値)のグラフを参照した

8) 山形県地球温暖化対策課「平成21年版環境白書第2部第3章」、<http://www.pref.yamagata.jp/ou/seikatsukankyo/050009/kankyohakusyo/hakusyo-zenbun/h21hakusho/3.pdf> (閲覧日：12月3日) このサイトの図2-3-4 最上川の水質(BOD値)縦断変化図を参照した

9) 美しい山形・最上川フォーラム「最上川の環境保全に向けた取り組み」、<http://www.mogamigawa.gr.jp/modules/tinyd0/index.php?id=4> (閲覧日：12月3日) このサイトの平成14年度～平成18年度の身近な川や水辺の健康診断実施結果を参照した

10) 帝国書院「農業と漁業2006」、[http://www.teikokushoin.co.jp/japan\\_world/japan/map/agri/06.html](http://www.teikokushoin.co.jp/japan_world/japan/map/agri/06.html) (閲覧日：2010年12月3日)

11) 帝国書院「人口」、[http://www.teikokushoin.co.jp/japan\\_world/japan/map/population/06.html](http://www.teikokushoin.co.jp/japan_world/japan/map/population/06.html) (閲覧日：2010年12月3日)

12) 帝国書院「工業」、[http://www.teikokushoin.co.jp/japan\\_world/japan/map/industry/06.html](http://www.teikokushoin.co.jp/japan_world/japan/map/industry/06.html) (閲覧日：2010年12月3日)

13) 山形県下水道課「平成21年度末生活排水処理施設整備状況」、<http://www.pref.yamagata.jp/ou/kendoseibi/180040/H21gesuidohukyu.pdf> (閲覧日：2010年12月3日) このサイトの生活排水処理施設普及率(平成21年度末)【普及率順】を参照した

14) 「最上川、世界遺産遠のく 暫定リスト記載逃す 評価厳しく 山形県」、『朝日新聞』、朝刊、山形・1地方、2008年09月27日、山形：朝日新聞社、インターネット、閲覧ii ビジュー、<http://database.asahi.com/library2/topic/t-datal.php> (2010/12/8にアクセス)。

「世界遺産へ再挑戦 24道県から19件の提案 【大阪】」、『朝日新聞』、朝刊、3社会、2007年12月27日、大阪：朝日新聞社インターネット、閲覧ii ビジュー、<http://database.asahi.com/library2/topic/t-datal.php> (2010/11/8にアクセス)。

## 参考文献

- 井川一良「書評：横山昭男『近世河川水運史の研究』』『山形史学研究』山形大学
- 佐藤寛，米田富太郎著、中央学院大学社会システム研究所編『川と地域再生——利根川と最上川流域の町の再生』、東京：丸善プラネット、丸善出版事業部、2007年。
- 横山昭男『近世河川水運史の研究』
- 横山昭男ほか、『山形県の歴史』、東京：山川出版社、1998年。
- 横山昭男編、『最上川と羽州浜街道』、東京：吉川弘文館、2001年。
- 横山昭男、『最上川舟運と山形文化』、鶴岡：東北出版企画、2006年。
- 「最上川電子大辞典」  
<http://www.thr.mlit.go.jp/yamagata/river/enc/index.html>  
 (2010/10/28にアクセス)
- おいしいものがたり  
<http://www.town.oishida.yamagata.jp/oishida-story.files/oishida-story.htm> (2010/11/3)
- 美しい山形・最上川フォーラム「平成21年度報告書 笑顔を写す山形の川」  
<http://www.mogamigawa.gr.jp/modules/smartsection/category.php?categoryid=42>
- 庄内町役場「庄内町環境基本計画」第2章「環境の現状と課題」  
<http://www.town.shonai.lg.jp/hp/page000002900/hpg000002850.htm>
- 国土交通省「最上川」  
[http://www.mlit.go.jp/river/toukei\\_chousa/kasen/jiten/nihon\\_kawa/82024/82024-1.html](http://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/82024/82024-1.html)
- 「最上川ごみ拾い、小学生ら大作戦 11トンダンプ2台分／山形県」、『朝日新聞』、朝刊、山形全県・2地方、2009年6月9日、山形：朝日新聞社、インターネット、聞蔵iiビジュア、<http://database.asahi.com/library2/topic/t-datail.php> (2010/11/1にアクセス)。

## 最上川

慶應義塾大学 経済学部 2年 伊藤奈津美  
 法学部 2年 國井耕太郎  
 法学部 2年 宮上七重  
 商学部 1年 久村亮介  
 東北公益文科大学 公益学部 4年 進藤貴則

1

## 目次

- 1、導入
- 2、経済面からみた最上川
- 3、自然面からみた最上川

2

## 歴史

導入

明治36年

- ・奥羽本線が新庄まで鉄道開通

大正3年

- ・鉄道・陸羽西線(酒田線)が開通

大正6年

- ・下流部、直轄改修事業着手
- ・明治42年4月洪水

昭和8年

- ・上流部(須川を含む)、直轄改修事業着手
- ・\*大正2年8月洪水

昭和32年

- ・中流部、直轄編入事業着手
- ・\*大正2年8月・昭和19年7月洪水

昭和46年5月

- ・白川ダム建設着手(\$55.10完成)
- ・\*大正2年8月洪水

平成元年4月

- ・最上川中流堰着手(H7完成、最上川さみだれ大堰)
- ・下流部掘削に伴う河床の維持及び取水位の確保

3

## 洪水について

導入

台風性の場合と、八月下旬から九月あたりに、日本海を通る温帯性低気圧による豪雨の場合の二通りある。以下に主な例を挙げる(平成元年まで)。また、初期の洪水の多くで破堤が起きている。

大正二年八月

昭和十九年七月

昭和四十二年八月

昭和四十四年八月

昭和五十年八月

4

## 農業基本法

導入

- ・1961年に定められた。
- ・大農業育成の方針が失敗、出稼ぎや過疎化が進んだ。そこで工場の誘致を行ったことで、第二次産業の割合が増加している。

5

## 直江兼続(1560-1619)

導入

- ・米沢城主・上杉景勝の家臣
- ・「直江石堤」建設
- ・米沢を水害から守るため
- ・最上川の上流、海老ヶ沢橋の上・下流にある

6

導入

## 最上義光(よしあき)(1546-1614)

- 山形城主・村山地域
- 米の輸送路として最上川に注目
- 酒田まで開削
- 最上川中流の三難所
- 「基点(ごてん)・三ヶ瀬(みかのせ)・隼(はやぶさ)」を開削
- 開削により最上のみでなく、村山地方の物資も多く酒田まで運ばれるようになり発展

7

導入

## 最上川の三難所



基点



隼



三ヶ瀬

8

導入

## 北楯大学利長(としなが)(1547-1625)

- 最上義光の家臣・狩川城主
- 「北楯大堰」建設
- 慶長17年に最上川左岸地域につくる
- 水不足で悩む地域に立谷川の水を引いて、米どころ庄内の基礎を作り上げる

9

導入

## 河村瑞賢(1618-1699)

- 幕府の御用商人・土木家
- 「東西航路」: 東北地方から江戸までの物資輸送路開拓
- 舟運の発達を促す
- 山形県内でつくられた米や紅花など、最上川を通って酒田に集積
- 大阪や京都に運ばれ、遠くはなれた京都の文化も山形に入ってくる

10

導入

## 西村久左衛門

- 米沢藩京都御用商人
- 米を主とする領内物資を、最上川を利用し酒田へ下すことを計画
- 黒滝の難所を開削し、米沢から左沢(あてらざわ)までの舟路を開く
- 1693年(元禄6)6月に工事を開始、翌年9月に完成

11

導入

## 「最上紅花」

- 村山盆地は紅花の主要産地
- 紅花は大石田まで陸送して酒田まで輸送
- 大石田には「紅花大尽」とよばれる豪商

12

## 最上川

経済の面から  
舟運の歴史を中心に

13

最上川—経済—

### なぜ「舟運」に着目？

日本において  
とりわけ  
近世において

- ・河川は重要な運搬路であった
  - 理由：主な荷物は米
  - 馬と比べて格段の輸送力

4人乗りの船1艘 = 馬およそ130頭分

理由 盛期 衰退期 今後

14

最上川—経済—

### ・酒田の米

- 酒田の米相場が  
物価の基本となる米の値段を決定
- 大名と商人の両方の米を運んできた

- ・川の流域は、経済的・社会的に一体的
  - 上流下流で経済・文化の交流があった
  - \*ただし鉄道がしかれるまで

理由 盛期 衰退期 今後

15

最上川—経済—

### いつから舟運があった？

- ・流通経路としての利用は？
  - 奈良末期～平安と思われる丸木舟の発見
  - 平安時代には、軍隊を運べるほどの船
  - 慶長初め、三難所の開削、大石田、船町などの船着き場を作った

舟運の始まり・活性化

理由 盛期 衰退期 今後

16

最上川—経済—

### ・本格的に発達したきっかけ

- 幕領や諸藩の廻米
- 地域の特産物の発達とともに  
商人荷物の輸送が増加、  
木綿・繰綿・塩・茶など(上方商品)移入  
・庶民の日常生活必需品として

理由 盛期 衰退期 今後

17

最上川—経済—

### 酒田港の危機(明治維新後)

#### 3つの要因

- 1.幕藩制的な舟運形態の崩壊と  
大型蒸気船の出現
- 2.奥羽線・陸羽西線などの鉄道の開通
- 3.港自体の機能低下

理由 盛期 衰退期 今後

18

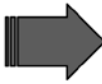
最上川—経済—

|          | 5人乗り | 4人乗り | 3人乗り | 船数合計 | 4人乗り換算 | 備考 |
|----------|------|------|------|------|--------|----|
| 1. 元禄16年 | 136  | 128  | 28   | 292  | 340.8  |    |
| 2. 享保6年  | 13   | 81   | 96   | 190  | 176.0  |    |
| 3. 宝暦11年 | 37   | 68   | 15   | 120  | 131.8  |    |
| 4. 天明末年  |      |      |      |      | 110.8  |    |
| 5. 寛政年間  | 5    | 97   | 3    | 105  | 106.4  |    |
| 6. 文化年間  | 59   | 40   | 11   | 110  | 131.4  |    |
| 7. 天保2年  | 16   | 57   |      | 73   | 79.4   |    |
| 8. 嘉永2年  | 40   | 29   |      | 69   | 85.0   |    |
| 9. 安政6年  | 44   | 10   | 11   | 65   | 80.4   |    |

減少

19

最上川—経済—

- ・ 舟運を回復させるのは難しい  
— 鉄道が優位
- ・ 最上川沿いの経済の活性化には  
 水を用いた産業・農業・漁業の活性化

理由 > 盛期 > 衰退期 > 今後

20

最上川—経済—

### 今の最上川は？

舟運衰退後の最上川の利用

1. 観光資源として利用している  
→ 最上川舟下り
2. 水力発電として利用している  
→ ex) 朝日町の上郷発電所

理由 > 盛期 > 衰退期 > 今後

21

最上川—経済—

最上川舟下りの観光客は山形新幹線の開通などにより、他県からの観光客が増加した。

理由 > 盛期 > 衰退期 > 今後

22

## 最上川 自然

23

自然—導入—

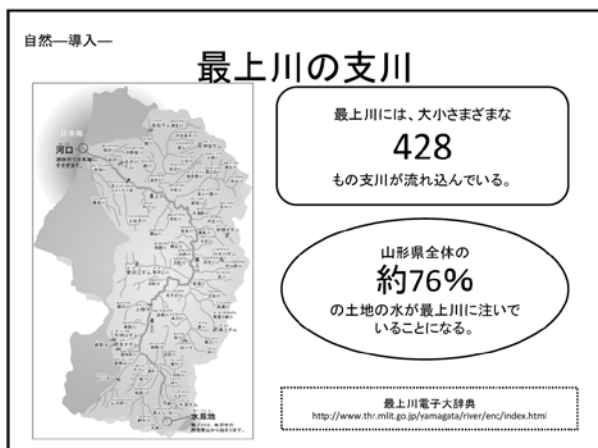
### 最上川の観光

- 多くの観光スポットの存在
- 四季を通して、観光の中心

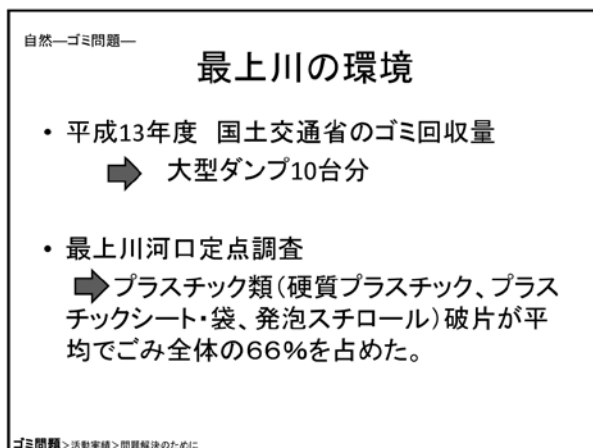
最上川は、山形の大切な観光資源

24

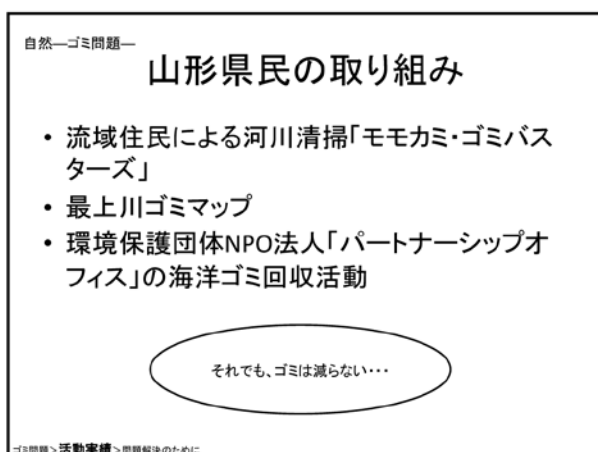




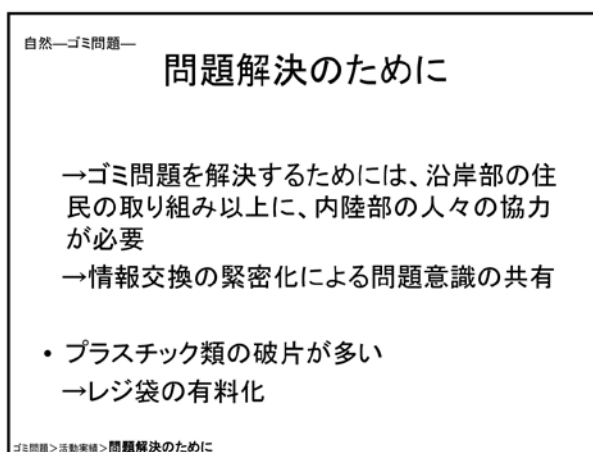
25



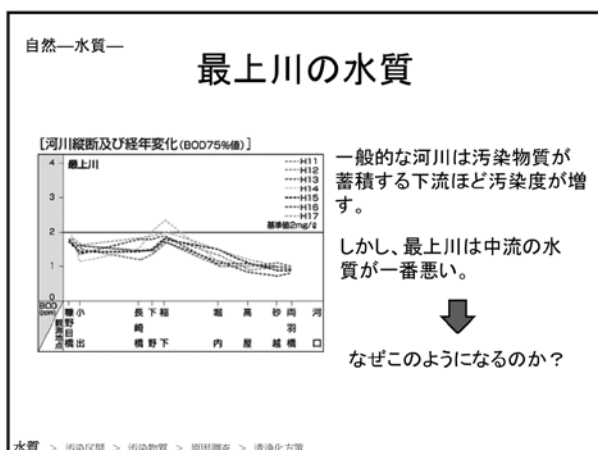
26



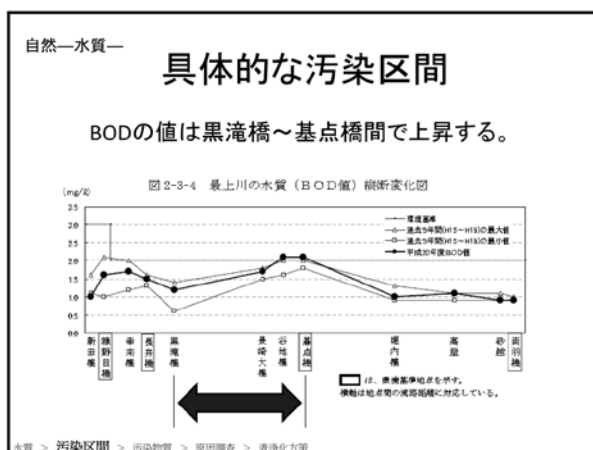
27



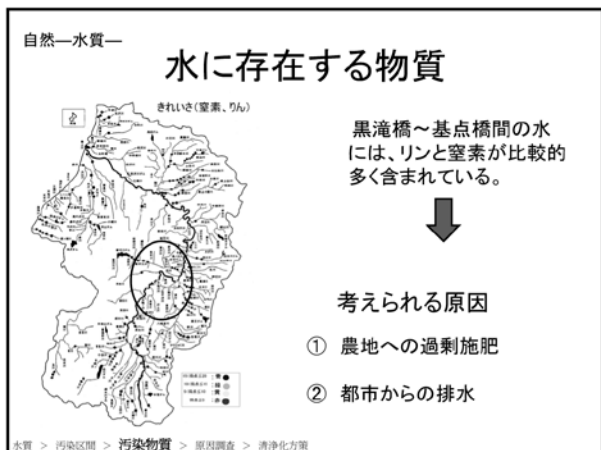
28



29



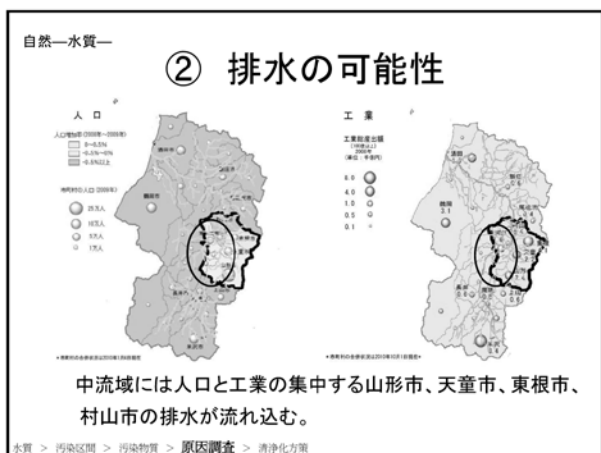
30



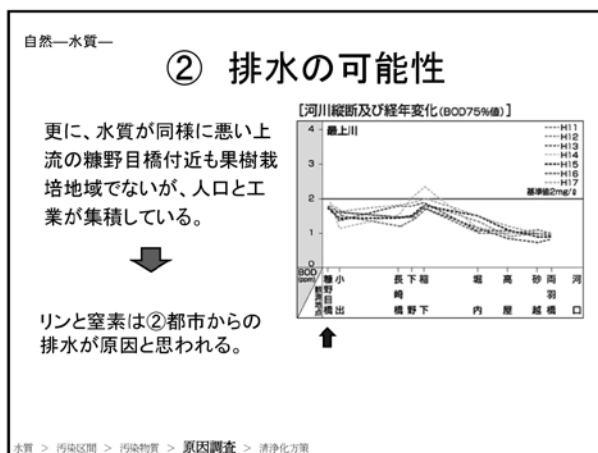
31



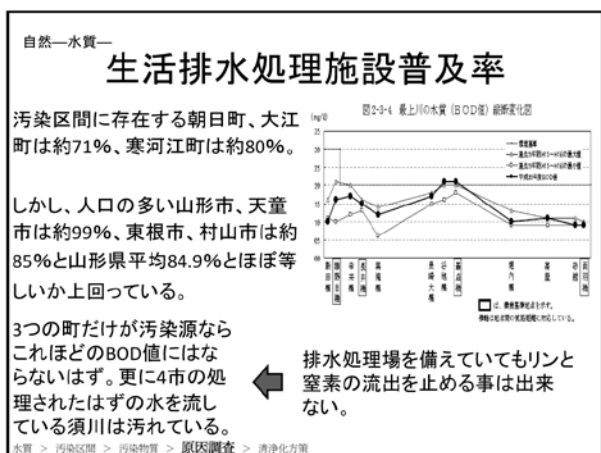
32



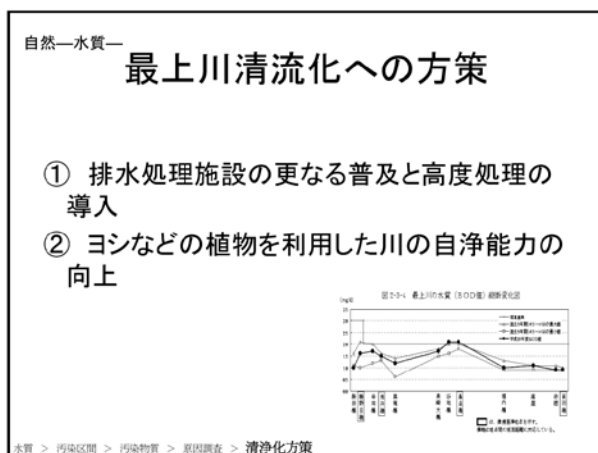
33



34



35



36

### 対策のまとめ

- 情報交換の緊密化による問題意識の共有
- レジ袋の有料化
- 排水処理施設の更なる普及と高度処理の導入
- ヨシなどの植物を利用した川の自浄能力の向上



観光資源としての価値の上昇

37

### 最上川

38

## 第4グループ

つや姫の挑戦  
～山形県のブランド米戦略～

池田 純／鎌田尚之／武田さとみ／山本亜純／阿部 新／高野和季

## 1. はじめに

庄内地方の自然や食に触れ、一番心に残ったのは、やはり「米」の存在感だった。

象潟に広がる水田は、米どころならではの美しさが印象的だった。最上川河口に広がる海岸林は、稲作を通じた、300年にわたる植林の所産でもあった。

フィールドワークでは、庄内米歴史資料館などを訪ね、米作りについて調べた。山形県では、今年10月から「つや姫」という水稻の新品種がデビューしたそう。酒田市内でも、活発な宣伝が行われていた。

米の品種開発競争は、各地で激化している。今年は、秋田県や福島県も、新品種をデビューさせた。

オリジナルの品種を全国で「おいしい米」として認知させることで、新たな需要を掘り起こし、消費拡大につなげようというのだ。米価格や農家の収入の上昇も期待できる。現在、所得向上や食の安全意

識の高まりなどを背景に、米は質や味で勝負する時代となった。

つや姫とは、どのような品種なのだろうか。山形県のブランド米戦略の現状を探るとともに、そのあり方について考えた。

## 2. つや姫開発の背景

まず、開発された経緯について。山形県水産農業試験場・結城和博さんに聞いてみた。

現在の山形県の主力品種「はえぬき」は、全生産量の65%を占める。高温や病気に弱い「ササニシキ」に代わり、1992年に登場した品種で、食味や収量の安定性が優れている。ただ、弁当やおにぎりといった中食（市販の調理済み食品を家で食べる）向けにとどまり、購買層は広がらなかった。某コンビニのおにぎりの大半は、はえぬきを使っているが、他の米とブレンドしているため、あまり注目されず、

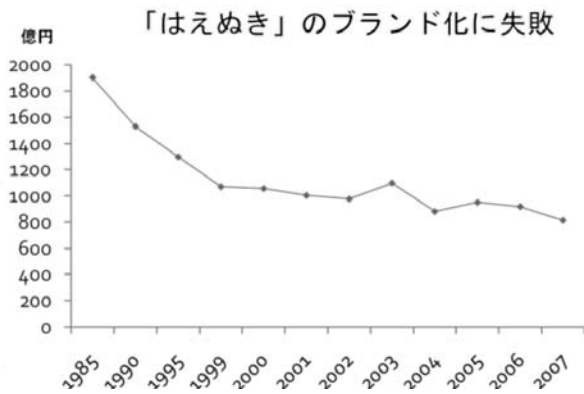


秋田県にかほ市 象潟



山形県酒田市 山居倉庫前

山形県の米の産出額



資料：農林水産省「生産農業所得統計」から作成

高い評価を得られないという。「あきたこまち」や「ひとめぼれ」といった全国区の米に比べ知名度は低く、価格は低迷した。

上のグラフは、山形県の農業産出額のうち、米の推移を見たものだ。2007年には、20年前の水準の約半分に落ち込んでいることがわかる。

全国的にコシヒカリの作付が拡大し、他県のブランド米も多く登場する中、はえぬきの不振に危機感を抱いた生産者の要請を受け、2000年から品種改良が始まる。そして、約10年間の歳月をかけて、つや姫が開発された。

稲の育種は、成功まで10年前後の月日を要するのが普通だという。交配後、育てた数千個体から有力な数個だけを選別するまでに4年。特性を見分けるまでにさらに3年。種子を農業試験場にも送り、地域的な適否を判定してもらうのにも3年はかかる。

県は今後、はえぬきの生産を続けながら、つや姫で山形米のブランド力を補う方針だ。はえぬきはブランド化に失敗したとはいえ、あまり手をかけずに高品質が期待でき、農家から人気があるからだ。

つや姫は、山形のみならず、全国的に生産の場を広げるといえる。消費者の目に留まるには、一定の流通量が必要だからだ。今年は、宮城県でも収穫された。だが、作り過ぎると品質にばらつきが生まれ、希少価値も下がるため、バランスが求められる。

今年のつや姫の生産量は、約1万2500トン。県全体の米生産量約40万トンに占める割合は、ごくわずかだ。本格的な生産拡大は再来年以降で、全国の店頭に並ぶのは、7～8年後だという。つや姫の生産は全体の3割程度に制限し、はえぬきと一体となった、県産米の需要底上げを狙う。

つや姫は、コシヒカリの対抗馬としての性格もある。現在山形県では、農家の約10%がコシヒカリを作っており、一定の信用を得ている。県は、つや姫がコシヒカリよりも優れていることをアピールし、つや姫への転換を説得していく方針だという。

### 3. 品種としての特徴

1つは、収穫期をずらすことで、はえぬきとの競合を避けていることだ。つや姫の収穫期は9月下旬～10月下旬で、9月中旬のはえぬきよりも遅い。

一般に、米は品種ごとに収穫に適した時期があり、その間に刈り取りをしないと、品質が落ちる。時期が分散していれば、各品種を最大限作付することができ、コンバインを遊休化させずにすむ。冷害や病気のリスクも分散できる。

つや姫は、暑さや病気に強いだけでなく、背丈が低い倒れにくく、刈り取りがしやすい。

東北農政局によると、今年の新米検査では、つや姫の1等米比率は99.6パーセントだったそうだ。猛暑の影響で多くの銘柄米が等級を下げる中、つや姫は全国1位を誇る。

1等米とは何か、説明しておこう。市販される米のほとんどは、検査を受け、粒の状態や水分、異物の混入に応じて、1等、2等、3等、規格外に格付けされる。格が下がると値段が安くなるため、生産者にとっては、1等米の比率は高いほど良い。

味も向上した。山形県農業総合研究センターによる生産力検定試験では、粘りや光沢、味といった、ほとんどの項目でコシヒカリを上回る。

山形県の主な品種の1等米比率

| 品種     | 1等米<br>比率(%) | 検査量<br>(トン) | 2009年産<br>の1等米<br>比率(%) |
|--------|--------------|-------------|-------------------------|
| はえぬき   | 78.1         | 31004       | 97.1                    |
| ひとめぼれ  | 80.3         | 10285       | 95.4                    |
| あきたこまち | 67.9         | 7296        | 89.4                    |
| コシヒカリ  | 84.3         | 1395        | 95.8                    |
| ササニシキ  | 11.5         | 1255        | 88.9                    |
| どまんなか  | 85.5         | 1030        | 99.0                    |
| つや姫    | 99.6         | 500         | 検査なし                    |

資料：朝日新聞 2010年10月22日朝刊

## 4. 生産現場

生産管理には、細心の注意が払われている。

品種が良くても、作り手の技術や土地が悪ければ、品質は落ち、信頼性は揺らぐ。発売して間もないうちは、ブランド米としての将来を左右する重要な時期であるため、生産農家は認定制だ。

県は、品質にばらつきが出ないように、温度条件を満たす適地を定めている。つや姫を作付できるのは、県内の水田面積の約3割に絞られる。栽培マニュアルも配布し、こまめな水の管理などを徹底させている。厳しい出荷基準も設けている。例えば、タンパク含有率には厳しい上限が定められている。米には、タンパクが5～10%含まれるが、多過ぎると食感が硬くなり、味が劣るからだ。

## 5. 販売やPRの現状

山形県庁農林水産部生産技術課・加藤賢一さんに、PRや販売の現状を聞いてみた。

新品種のPRには、県や農協合わせて約1億4000万円の費用をかけている。発売に伴って、テレビCMを流すほか、イベントも頻繁に開いているようだ。

「つや姫」のパッケージデザインは、au Lismoのデザインで知られる佐野研二郎氏に依頼したという。Jリーグ・モンテディオ山形も、ユニフォームに「つや姫」の広告をつけている。

このように、県をあげた取り組みには目を見張るものがある。

今年は生産量1万2500トンのうち、県内で2500トン、県外で1万トンを販売する。昨年にはすでに、試験販売を行ったが、今年も収穫が少ないため、販売は一部の米穀店や大手量販店に限られる。東京で



モンテディオ山形のユニフォーム

はイトーヨーカ堂や三越などのデパートでしか見られない。8割は農協経由で市場に出るが、農家も自ら売り込み、首都圏や関西まで出向くという。東京都世田谷区の商店街では、庄内の農家が屋台を出し、芋煮や果物などとともに、つや姫を販売していた。

東京・銀座にある、山形県のアンテナショップを訪ねた。

お米コーナーには、ササニシキ、コシヒカリ、はえぬき、ひとめぼれといった品種が並び、健康志向を意識したのか、雑穀や発芽米、黒米なども置かれている。他県の特産品店に比べ、品ぞろえの多さは群を抜く。

中でもひとときわ目立つのが、つや姫だ。農薬を通常の半分に抑えた特別栽培米が5キロ2780円。全く使用しない有機栽培米もある。はえぬきと比べ、それほど割高ではない。

副店長の保科義和さんに話を聞いた。

「販売開始と同時に試食会を開いたり、併設されたレストランで、つや姫を使ったメニューを提供したりして、認知度アップを図っています。

色々なパッケージをそろえ、幅広いニーズを取り込むことにも、力を入れています。例えば、ペット



東京都世田谷区 尾山台商店街



東京都中央区 「おいしい山形プラザ」

ボトルはそのまま冷蔵庫に入れられる、という保存のしやすさを意識しています。車で買い物をしない人や、消費の少ない核家族向けに、1キロ、450グラム、3合入りなど、様々に小分けした袋も販売しています。

つや姫は、全てのパッケージを合わせ、1日当たり約70袋売れています。他のお米は、せいぜい2～3袋にとどまっており、人気は抜群です。主な購買層は40代以上ですが、若い人からも、宅配便での注文を受けます。」

保科さんによると、今は米を食べない時代だといわれるが、良いものをしっかり売れば、消費者は買ってくれるという。各県がブランド米を売り出す中、品質の管理はもちろん、売る側の発信力、販売戦略がカギを握る。

## 6. 消費者へのアンケート調査

つや姫がブランド米として地位を確立するには、知名度の向上が第一歩だ。私たちは、首都圏と山形県におけるつや姫の認知度を調べるため、11月上旬、簡単なアンケートを行った。

慶應義塾大のメンバーは神奈川県・日吉周辺で、東北公益文科大のメンバーは酒田市内のスーパーマーケットで、高齢者や主婦層を中心とする買い物客100人に、つや姫を知っているかどうか尋ねた。知っている人には、食べた経験の有無も聞いてみた。

酒田では、ほぼ全員がつや姫を知っていたのに対し、日吉ではわずか27人。首都圏でのPRは、あまり成果があがっておらず、全国的な知名度も低いと言えそうだ。

テレビで目にしたのを覚えている人もいたが、ほとんどの人は名前自体を知らなかった。中には、「お



店頭に並ぶつや姫

### アンケート結果



米は新潟と奥多摩から取り寄せている」「うちは宮城米を食べている」「あきたこまちを地元から送ってもらっている」など、お米の購入先・入手先がすでに固定化している人も多かった。

驚いたのは、酒田でも、実際に食べている人は半分以上にとどまったことだ。本格デビューから間もないことや、米余りの現状で、古米が多く流通しているからか、山形県でさえ、それほど浸透していないのも事実だ。

## 7. 考察

以上を踏まえ、山形県のブランド米戦略について、知名度向上の観点から、施策を考えてみた。

まず、作り手が「見える」販売を推進することだ。現在、各地域のオリジナル米が多く店頭に並び、一方で米への関心自体が減っている。つや姫のどのようところが「ブランド」なのか、しっかり伝えることが必要だ。

現状では、マスコミや広告を利用して大々的な販売を行っているものの、他の品種との差別化には至っていないのではないかと。

選抜されたベテラン農家が、手間暇をかけ、大切に育てていることをアピールする。作り手のメッセージや写真をつけて販売したり、エピソードをまとめた冊子を配布したりするなど、心をこめた販売戦略は、消費者を引きつけるに違いない。

次に、山形県民自らが、積極的に売り込むことだ。

「県民が一番有力な営業マンである」と県知事の言葉にあるように、生の人々を通じた口コミは、大きな宣伝効果を持つ。

親しい人への贈り物につや姫を使うなど、身近なところから、つや姫をPRしていくべきだ。

そのためには、より多くの県民が、実際につや姫の味を知らなくてはならない。実体験があつてこそ、PRの質も上がる。

県内での流通量を増やしたり、試食販売、給食での提供に力を入れることが効果的だろう。子どもたちを将来の購買層として取り込むことは、長期的な需要創造に欠かせない。

最後に、農業だけでなく、観光や外食、IT産業など、他業種が一体となった取り組みを求めたい。

新品種を定着させるための流通ルートの開拓など、農家の力だけでは難しいことも多いからだ。

近年あらゆる意味で衰退しているといわれる農業だが、逆にそれを資源と捉えて多くの企業が参入すれば、成長産業に変えられる可能性がある。

山形県のブランド米戦略が、そんなモデルを提示することを期待したい。(終)

## 参考文献

大泉一貫『日本の農業は成長戦略に変えられる』洋泉社 2009年

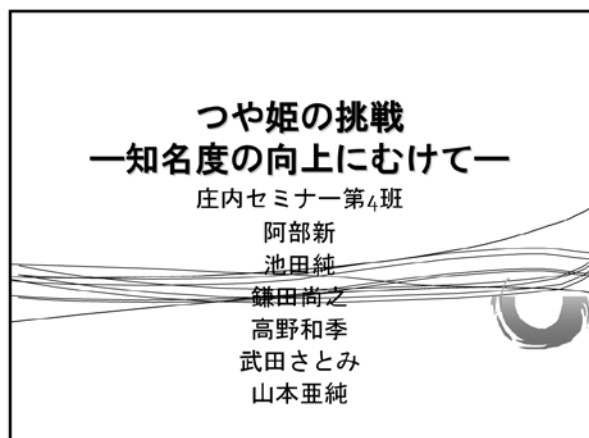
遠藤功『プレミアム戦略』東洋経済新報社 2007年

富山和子『日本の米 環境と文化はかく作られた』中央公論社 1993年

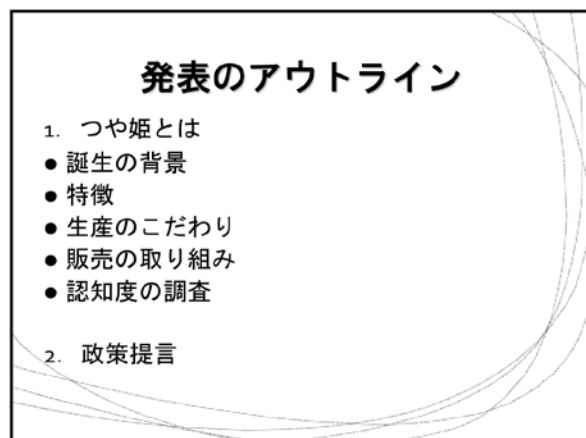
山本博史他『いま、日本の米に何が起きているのか』岩波書店 2008年







1



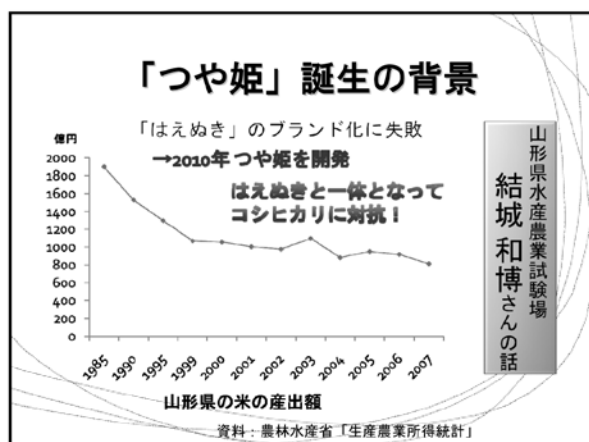
2



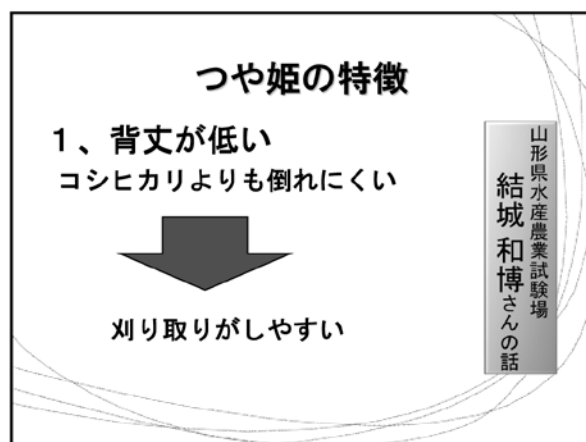
3



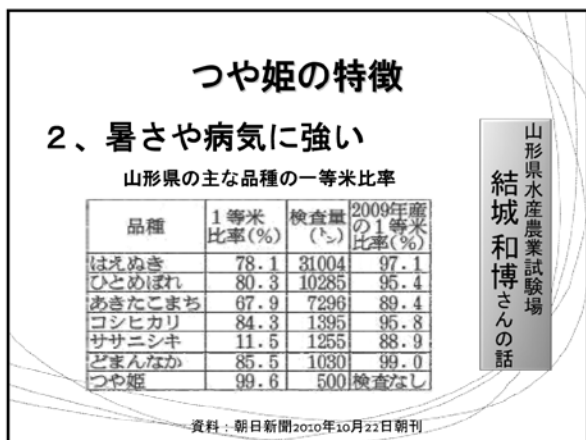
4



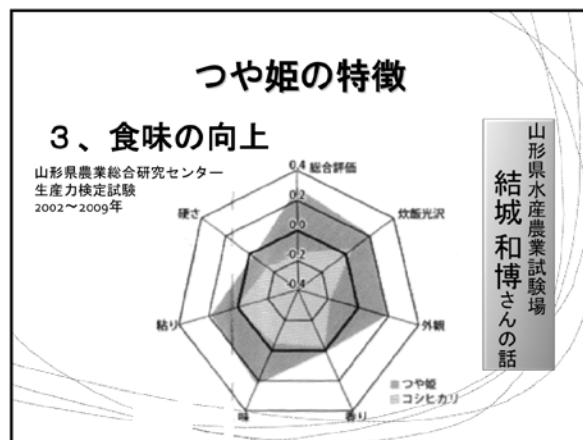
5



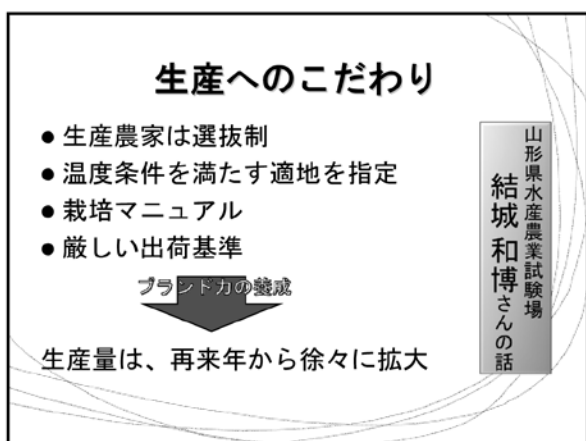
6



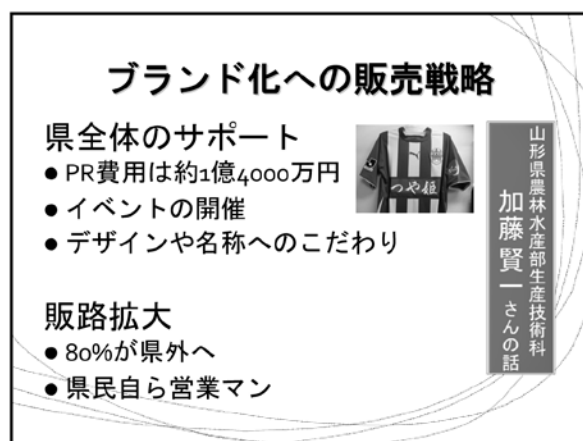
7



8



9



10



11



12

## ブランド化のために 認知度アップが第1歩！

13

## つや姫の認知度調査

### ● 調査内容

1. つや姫を知っているか
2. つや姫を食べたことがあるか  
(1.でYESの人のみ)

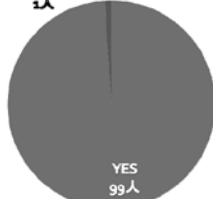
### ● 調査方法

山形、神奈川の各県で100人に街頭アンケート

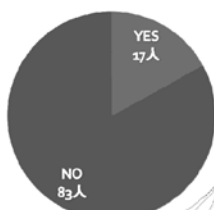
14

### 1. つや姫を知っていますか？

山形県 (100人)



神奈川県 (100人)



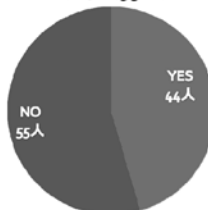
山形県と神奈川県では認知度に圧倒的な差がある!!

15

### 2. つや姫を食べたことがありますか？

1.で「YES」の人のみ

山形県 (99人)



神奈川県 (17人)



山形県民でさえ、つや姫の味を知らない!!

16

## 調査の結果

全国的な認知度不足

山形県での浸透不足



改善策はあるのか？

17

全国

知名度の向上

山形

県民をファンに

18

## 私たちの提言

【全国】  
作り手が「見える」販売

【山形】  
山形県民への浸透

19

## 作り手が「見える」販売

ブランド米があふれている  
→差別化の必要!!



「見える」販売を行う  
作り手の顔/思い/歴史を消費者に伝える  
→差別化、消費者の安心につながる

20

## Twitterの活用

### ● Twitterとは...

個々のユーザーが「ツイート」と呼ばれる短文を投稿し、閲覧できるコミュニケーション・サービスである。

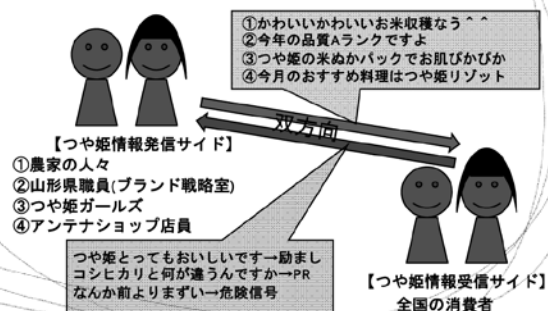
現在つや姫は公認アカウントなし!!

### ● Twitterのメリット

- ・幅広い年代層に発信可能
- ・コストがかからない
- ・双方向性がある(消費者の声も聞ける)

21

## 具体的な活用法



22

## 山形県民への浸透

- 山形県民全員がつや姫を食べる  
⇒県民をファンにする

【具体的には・・・】

- 県内の出荷量増加
- 試食販売、給食での提供

23

## 知名度が上がる



山形県産米ブランドの確立へ

24

## OB

# 芭蕉は出羽の天狗を見たか ——『おくのほそ道』から探る酒田の気風

西村 崇

(略歴) 2003年慶應義塾大学経済学研究科博士課程単位取得中退、JP モルガン証券(投資銀行部門)を経て、2006年より三菱UFJ証券(現三菱UFJモルガンスタンレー証券)にて日本国債の定量分析を担当

## 1. (序)『おくのほそ道』の定量分析

さて、今回は卒業生として特別参加となった経緯より、簡単な自己紹介から始めたい。まず筆者は証券会社にて日本国債の「定量分析」という仕事をしており、松尾芭蕉に関する知識は一般的なものに過ぎない。しばしばこの「定量分析」とは何であるのかと質問を受ける。そこで、自己紹介と本報告の導入も兼ねた、二重の意味でのイントロダクションへと進んでみよう。

今回の庄内セミナーのテーマは松尾芭蕉の『おくのほそ道』である。これは、1689年に現在の1都12県(東京、埼玉、栃木、福島、宮城、岩手、山形、秋田、新潟、富山、石川、福井、岐阜)に渡る旅行記である。ではウォーミングアップも兼ねて、クイズからスタートしてみよう。まず『おくのほそ道』で、①芭蕉が最も俳句を詠んだ都または県はどこか、②紀行文としての最も記述量が多い都・県はどこか、

考えてみよう。

図1で答えを確認してみよう。

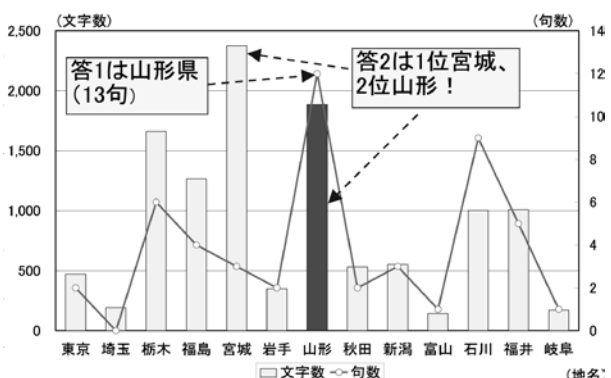
まず、最も俳句が詠まれたのは山形県で、その数は13句になる。図中の赤い折れ線に着目すると、他の地域と比べて山形県の数値が相対的に多いことが分かる。そして、最も紀行文として記述量が多いのは宮城県である。山形県は2位であるが、その分量に着目すると、他県と比較して申し分ない。

もう一問クイズに挑戦してみよう。今度は、③記述量の多い場所はどこか、考えてみよう。前述のような都や県でなく、「千住」とか「草加」という地名になる。

この答えに関して、図2にて上位10ヶ所をグラフにまとめてみた。

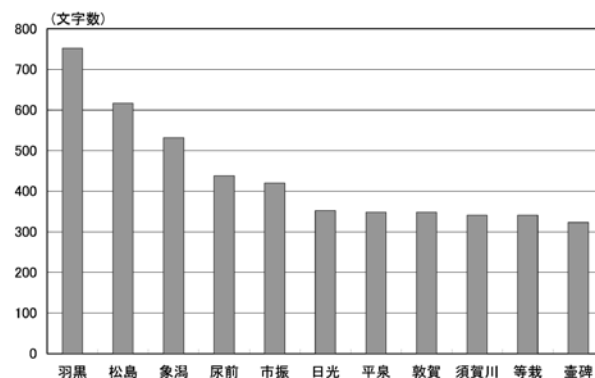
図よりわかるように、1位は「羽黒」つまり出羽三山である。2・3位は芭蕉が旅の目的とした、松島そして象潟である。このようにテキストの定量分析

図1 『おくのほそ道』における句数と文章量の県別分布



出所:『おくのほそ道』

図2 『おくのほそ道』における文章量の地域別分布



出所:『おくのほそ道』

を行うと、漠然とであるが、芭蕉が何処に重みを置いているのか見えてくる。

ここまでをまとめてみよう。『おくのほそ道』のテキストを数量的に分析すると、山形、特に出羽三山にて、紀行文、俳句とともに、芭蕉が多産的であった。しかし、これはあくまでも「量」の変化であって、問題となるのは、それに対応する「質」の変化である。そこで「質」の変化として、芭蕉の俳句理論の頂点でもある「不易流行」という考えを、本報告書では中心に扱っていく。なお、自己紹介に戻れば、このように数量的な分析を切り口として背後に伴う質的ないし構造的な変化へとアプローチするのが、筆者の行っている定量分析という仕事である。

## 2. 「不易流行」の体得——出羽の国と芭蕉

この「不易流行」の概念であるが、ここでは基本的な部分の確認に止めよう。この「易」という文字は「変化」を意味し、「不易」とは、「変わらないもの」、「不変」なものを意味する。一方で、「流行」とは日々変化するものである。芭蕉の特徴は、これらが対立するものではなく、本来的に同じものと把握した点である。わかりやすい例として、「不易」とは古典の和歌の世界、つまり不変となる歌枕を題材としたものであって、「流行」とは俳句のように常に新しいものの発見する行為とも言える。芭蕉の大胆さはこの対立しかねない二つを同時に追求した点である。そして、本報告にとって重要なのは、この「不易流行」の萌芽が出羽三山に見られて、芭蕉が羽黒滞在中にその世話人たる呂丸に語っている点である。なぜ出羽三山にて「不易流行」が萌芽したのか。三つの観点からこの問題にアプローチしてみよう。まず芭蕉の主観的要因として、出羽の国に至る前後での心境の変化である。これは「歌枕の喪失と発見」としてまとめられよう。歌枕という和歌の時代から詠まれた有名な山や川や石や木を芭蕉は目指すのであるが、それらが長年の歳月の自然の変化の中で失われていることに気付くのみである。芭蕉の言葉を借りると、「山崩れて、川流れて、道あらたまり、石は埋もれて土にかくれ、木は老て若木にかはれば」と、歌枕の多くが跡形も無く喪失してしまったことを述べている。一方で、新たな歌枕とも言うべきものを

出羽の国にて発見している。例えば「閑さや岩にしみ入る蟬の声」という不朽の名句を詠んだ山寺に関しては、芭蕉は事前にその存在を知らず、訪問する予定すらなかった。また、出羽三山に関しては四句も俳句を残している。さらに、「蚤虱馬の尿する枕もと」という句で、その地名の独特さを詠んだ「尿前の閑」も、新たな歌枕の創出とも十分に解釈できよう。

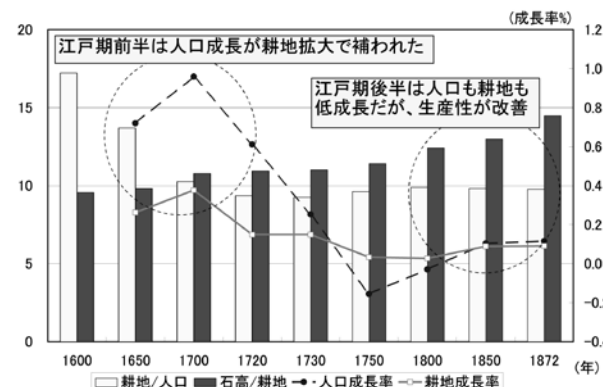
第二の要因として社会経済的状況が考えられる。まず、芭蕉にとっての「旅の北限地」としての酒田である。本セミナー講師である金森敦子氏が指摘するように、出羽の国において芭蕉の旅の便宜を図ったのは、俳句に理解ある文化水準をもった裕福な商人層の存在であった。湊町酒田は、最上川水系の物流が集積されて、西回り航路で日本海を通じて上方に至るといふ、富と商人が集中した場所であった。酒田以北において少なくとも同規模の商業地を探すのはかなり難しかったと考えられる。また商人層にとっての俳句の意義である。そもそもなぜ多くの商人が俳句を好んだのであろうか。これは、「自由精神の発露」が考えられる。この点は本セミナー講師の小室正紀教授の受け売り（もちろん筆者の稚拙な理解に過ぎない）になるが、俳句における「自由」という側面である。漢詩などの形式を重んじる古典と比較して、俳句は常に新しい話題を求める革新的な側面が強い。この自由への希求こそが勃興してきた商業的自由と共鳴した可能性が大きくある。そう考えれば、富裕な商人たちが芭蕉の旅の便宜を競って図ったことも理解可能である。

三番目の要因として江戸前期の新田開発が挙げられる。これに関してデータで確認してみよう。

図3において、青い点線の折れ線は人口成長率を、赤い折れ線は耕地面積の増加率を示す。図中の左半分にあたる江戸期前半を見てみると、高い人口増加率を補うように、耕地拡大つまり新田開発が行われたことが確認される。すなわち、江戸前半期とは全国的に米市場が需要（人口増加）でも供給（耕地増加）でも拡大した時期である。このような江戸前半期の社会経済的状況を鑑みると、この時期において「米」と「湊町酒田」との関係性が飛躍的に高まって行ったことが読み取れる。

第三の要因として以下の三つの風土的特長が挙げられる。一番目に最上川と庄内平野を指摘できるが、

図3 江戸時代の人口と耕地面積の推移



注：「耕地/人口」は人口100人当たりの町数、「石高/耕地」は1町あたりの石高

出所：速水融・宮本又郎『日本経済史1』岩波書店、1988年

社会経済的要因を述べる際に触れたのでここでは割愛しよう。二番目は羽黒修験道である。これは中央（近畿地方）の吉野や熊野の修験道と異なり、原始的でより土着の山岳信仰が強いとされている。そこで三番目にこの山岳信仰として、出羽三山の「擬死再生」思想が挙げられる。これは、芭蕉も実際に登山したように、月山で死を疑似体験しそこから下って湯殿山に至って再生するという考えである。そこで、この思想の独特さである。例えば、熊野三山も修験道と関連して有名であるが、古事記や日本書紀に関連した「神話性」が前面に出て、それ程に「再生」思想が強調されているわけではない。このような単純な比較からも、出羽三山の「擬死再生」思想は、独特の山岳信仰と指摘される。

### 3. 酒田気風のモデル化——俳諧師から相場師へ

以上、ここまでが本報告の前半部分にあたる。まとめると、まず『おくのほそ道』のテキストの定量分析を行った。そして、出羽三山を中心に、紀行文と俳句と、「量」の面において芭蕉が多産的であることが確認され、それに対応する「質」の変化として、「不易流行」という思想の萌芽、そしてそれを誘発したと思われる諸要因を考察してきた。

ところで、この芭蕉の「不易流行」であるが、その後の酒田の俳諧において明示的な継承者はいないというのが通説と思われる。そこで、本報告の後半部分では、俳句以外の分野で酒田における「不易流行」の継承者を探してみよう。その人物として「本

間宗久」を考えてみたい。この人物は酒田で最も有名な歴史上の人物とされる、本間光丘の叔父にあたり、「米相場の神様」といわれる人物である。片や俳諧師、片や相場師と、前代未聞の試みであるが、両者の関係性を考察してみよう。

まず本間宗久の概略である。本間家が「新潟屋」として看板を掲げた原光（もとみつ）を初代とすると、この時代の本間家は三十六人衆（酒田での裕福な商人階層）の一員になる。芭蕉が酒田を訪れてから約20年後で、既に歴史的に隔絶されている。宗久は原光の五男であるとされ、二代目の光寿より経営委任され、米取引で莫大な資産を築き、本間家の財政的基礎を作りあげたとされる。しかしながら、甥である光丘が三代目として家督を継ぐと、米取引は投機的で本間家の経営方針にそぐわないとして、光丘は宗久を本間家から絶縁する。背景を見ると、1730年に大阪に堂島米会所が開設されるが、酒田では公認の米会所が出来る以前から、様々な闇相場と言うべきものがあり、有力な商人も関わっていたという指摘もある。光丘が米取引から距離を置きたかったことも理解できる。また意味深いのは、「出羽の天狗」という宗久の異名である。この言葉の意味を考えてみると、江戸時代は天狗と山伏のイメージが重なり始めた時代であり、羽黒修験道を指し示していると思われる。もっとも宗久には修験道との関連は見られない。しかしながら「出羽の天狗」と称されたのは後にも先にも（調べた限りでは）本間宗久のみであり、当時の人々が出羽の風土と結びつけながら、そして出羽を代表する人物として、本間宗久を畏怖していたことが窺い知れる。

### 4. 本間宗久の功績——世界に通じる酒田五法

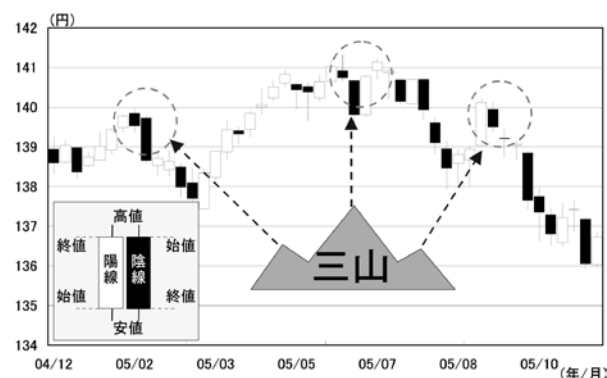
では、本間宗久の功績である。まずは今日の相場分析の礎を築いた点である。宗久が対象としたのは米相場であったが、現代の株式や為替や金や原油といった商品相場にも、宗久の分析方法は有効とされている。この宗久の相場理論に関しては、『本間宗久翁秘録』という本があるが、これは宗久自身ではなく、宗久の説話を弟子がまとめたものと考えられている。また、宗久には謎の部分も多く、後世からの脚色もありうる点には注意が必要である。

本間宗久の最も有名な功績が「酒田五法」であり、図4にてその要点をまとめて見た。

酒田五法に関しては柳生正名氏がセミナー講義で言及されており、それにヒントを受けた。金融関係者以外でも、この様なグラフを株式投資に関する雑誌などで見たことがあると思う。これは「ローソク足分析」と呼ばれる。もっとも宗久は明示的にローソク足を提唱しておらず、後世の人々が宗久の意図するところを敷衍させてこのような図表が出来上がってきたと考えられる。最小限の説明にとどめると、図中の左下に表示したように、一日の相場の動きである四本値（始値、高値、安値、終値）を、白と黒の色分けと上下のヒゲによって表すという、情報を実に効率よく凝縮した表記法である。このローソク足を使いながら、ここでは酒田五法のうちの「三山」を取り上げた。このように、小さな山、大きな山、そして小さな山を見せながら相場が大きなトレンド転換を見せるという分析である。現代から見ると至極当たり前のように見える、この当たり前のことを最初に理路整然と述べたのが本間宗久である。さらに重要なのは、このローソク足分析であるが、海外でも非常に重宝され、いくつかの専門用語は翻訳されずに日本語のまま使われている。つまり、「世界に通用するものを酒田人である本間宗久が作った」としても決して過言ではない。

さらに宗久の功績に関してだが、まず相場をより多角的に捉える視座である。単なる需要と供給という数量で価格が決まるのではなく、その決定過程における市場参加者の心理的な駆け引き、現代経済学で言う「期待」の役割を重視しており、価格決定理論における先駆的な分析と評価される。また、米相場は投機的とのことで光丘は宗久を絶縁したが、宗久の投資理論における投機性はかなり低いものである。その日その日の短期的な売買ではなく、中長期的なトレンドを考えて、底値圏で買い高値近くで売るというスタイルである。そのためには単に相場の値動きを見るだけではなく、よりファンダメンタルな要因（米の豊作や不作などの供給要因など）をも考慮に入れた、総合的な視点を持ったものである。また低レバレッジ、つまり借金してまでの投資にも宗久は否定的である。今日のサブプライム危機が、高レバレッジ、つまり借金してまで世界中の資産市場に投資した過剰流動性が主因であったことを

図4 ローソク足分析と酒田五法



注：日本国債先物の四本値

出所：東京証券取引所

考えると、宗久の理論は極めて健全と言える。このように単なる相場の分析だけではなく、その投資への実践的心構えへの考察も不可分となっており、後の人々より宗久の理論は「相場禅」とも呼ばれている。

## 5. 新たな視座——芭蕉と宗久、そして光丘

以上、松尾芭蕉と本間宗久、俳句と米相場という、全く関係がないとされるものについて考察してきた。確かにこの二人は歴史的な接点すらない。宗久が生まれたのは、芭蕉が酒田を去った四十年近く後である。本来ならばその間の社会経済的な変化も考慮しなければならない。しかし、宗久の功績は米相場に関する「不易流行」の探究とも言える。宗久には俳句への関心は特に見られないが、古典的な教養は豊かであり、「古典」つまり「不易」と解釈すれば、この古典的な教養を日々変化する相場分析に応用しようとした試みと考えられる。もっとも、変化する現象の背後に法則性を見出す行為は、古今東西多く見られることである。しかし、米相場という博打に近い最も世俗的なものに、不変の法則性を追求した者は、本間宗久以前には見られない。「世俗」と「流行」を同義語と解釈すれば、芭蕉が俳句で試みたことと、宗久の「相場禅」は非常に共鳴しあう。

以上、芭蕉に宗久を結び付けることが前代未聞であったが、さらにもう一歩進んでみよう。それは、従来では対立するものとされてきた、本間宗久と光丘を統合させる試みである。それは両者の経済における「現実主義」的な態度のあり方である。光丘と言えば「公益」つまり公共の利益への投資で有名である。当セミ



ナーでも見た、防砂のための幅数キロ長さ数十キロにわたる松の植林事業へ、本間家の私的財産を光丘は惜しみなく投げ打った。そこで、「私益」と「公益」という一見対立する概念を、不易流行のように本来は同じものと考え、光丘の偉大さは、本間家の「私益」を庄内の「公益」と合致させたことである。その際に強調されるべきは、実際に作品となって初めて俳句が存在するように、光丘の「公益」も、単なる理屈ではなく、経済政策として具体的に結実されて初めて意義を持つ「現実主義」である（実験や検証を通じて普遍の理論体系を構築するという方法論と、明らかに異なる知のあり方であり、実に興味深い）。先述したように、宗久の「相場禅」は理論と実践が高度に統合されたものであった。このように把握すると、一見すると正反対の宗久と光丘であったが、物事の取り組み方や考え方において、その「現実主義」的な側面にて実に近い立場にあることが見えてくる。

## 6.（結論）芭蕉は出羽の天狗を見たか？ ——サムライ・ファイナンスへの道

以上、『おくのほそ道』から酒田を見てきた。芭蕉の「不易流行」を取り上げ、本間宗久の再発見、そして光丘への連続性を探求してきた。本セミナーの主題に、芭蕉が見た庄内の「生命（いのち）」がある。本報告の結論としては、「出羽の天狗」なるものが芭蕉に不易流行を授け、その半世紀後には今度は宗久に相場禅を授けたと考える。この結論で本報告を終わらせても良いのであるが、もう一歩前進

してみたい。

日本のみならず世界に向けたメッセージを酒田から発信できないであろうか。それはやはり世界に通用する相場分析の基礎を作った本間宗久、さらに光丘の「公益」への取り組みを合わせて、「古きかつ新しき」日本的経営者モデルの構築にあらう。その際にはやはりインパクトのある名前が必要である。ユダヤ資本、イスラム金融、アングロサクソンの経営などに匹敵するようなグローバルなネーミングとなれば、例えば、「サムライ・ファイナンス」なんていうのは有力な選択肢ではないか。この言葉に宗久と光丘の経営哲学を盛り込んでいく、そのような可能性が湊町酒田にはあることを指摘して、本報告を結びたいと思う。

### 社会経済歴史関係

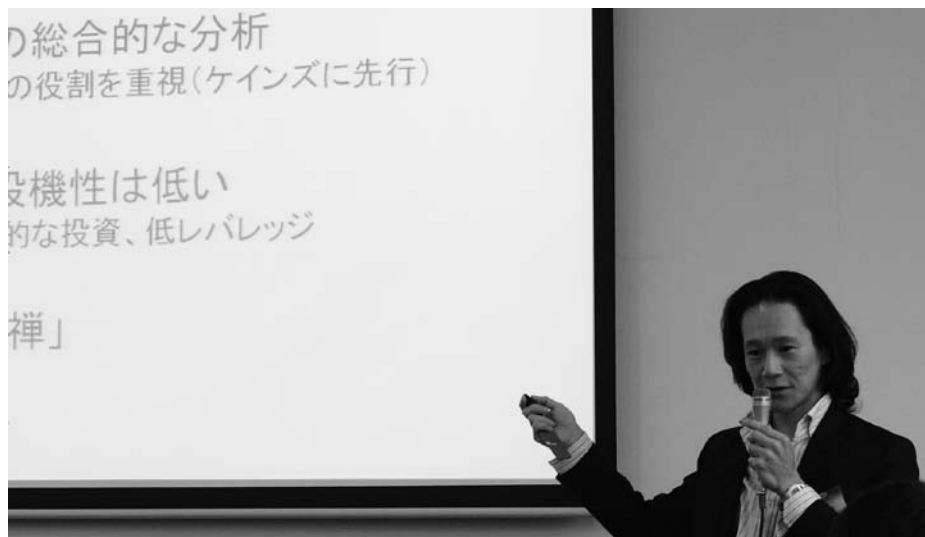
速水融・宮本又郎編『日本経済史1』岩波書店、1988年  
安岡重明・天野雅敏編『日本経営史1』岩波書店、1995年  
酒田市史編纂委員会編『酒田市史』、1987年

### 芭蕉や俳諧に関して

井筒俊彦『意識と本質』岩波文庫、1991年  
金森敦子『芭蕉「おくのほそ道」の旅』角川書店、2004年  
小室正紀『草莽の経済思想』御茶の水書房、1999年

### 羽黒修験と天狗に関して

久保田展弘『修験の世界』講談社学術文庫、2005年  
知切光歳『天狗の研究』原書房、2004年  
戸川安章『出羽三山修験道の研究』佼成出版社、1973年  
宮家準『羽黒修験—その歴史と峰入り—』岩田書店、2000年



本間宗久に関して

青野豊作『相場秘伝 本間宗久翁秘録を読む』東洋経済新報社、  
2002年

北重人『汐のなごり』徳間書店、2008年

西野武彦『相場道 小説・本間宗久』日本経済新聞出版社、  
2010年

## セミナーに参加して ― 殻を打ち破る気概 ―

西村 崇

庄内セミナー参加は、全くの成り行きであった。羽田先生より募集のメールを頂いたが、「人数に余裕あれば興味あります」と曖昧な返信をしたら、数日後に召集通知が来た。しかし、学生が主役の集まりに社会人がこのこと顔を出すのも「場違い」との可能性が十分ある。そこで、参加する以上、最低限やるべきことはやろうと決めた。

まずはテーマの松尾芭蕉をもっと知りたいと思った。多忙な金融の仕事をしながらどうすればよいか。そこで外国語学習方法の応用を考えた。古文を読む時間がなければ、リスニングでよい。『おくのほそ道』朗読CDを入手し、これを通勤中に聞いた。およそ一時間の内容であり、毎日最低一回、最終報告会まで続けたから、100回は超えていよう。これでだんだんと全体像のイメージが出来ていった。さらにセミナー開始直前には、芭蕉の足跡を求めて、山寺を訪れ、出羽三山にも登った。月山では芭蕉を真似して山頂で一泊した。翌日は湯殿山に下り、鶴岡経由で酒田に入った。

セミナー前半は、芭蕉や俳句に関する著名な専門家の話を聞きながら、バスで移動し関連する実際の場所を訪れた。よくよく考えると簡単には参加できない、贅沢な解説つきのツアー旅行である。そしてセミナー三日目のグループごとの酒田市内フィールドワークから、後半の山場である。せっかくだから学生の方と同じように、自分も自転車を借りて酒田市内を回った。すれ違おうと、二つの大学の学生たちが一緒になって酒田湊の残暑の青空の下で自転車を駆けていく光景はとても印象的であった（好きな映画シェルトリングスカイの一場面を思い出す）。

三日目の夜は翌日の中間報告会の準備で、学生の方々は徹夜で準備をされていた。独りでやる試験勉強とは異なり、グループの意見を集約するのであるから大変だ。20年前の自分の姿を重ねた。当時の自分には粘り強く議論を行う集中力もなく真っ先に放棄していただろう。そして、過去にやり残したことに挑戦したい、「過去を変えてみたい」と密かに思い始めた。ついに「自分も最終報告会のプレゼンをします」と、仕事の多寡も考えずに勢いで宣言してしまった。

プレゼンの準備には手を焼いた。とにかく限られた時間で仕上げなければならない。そこで実験的な試みを行った。資料を読むこと（ボトムアップ）と全体の構成を考える（トップダウン）のバランスを再考した。どうも自分は資料をだらだらと探しては読んでまともなく時間切れ（レポート不提出）というパターンが学生や大学院生の頃から多かった。そこで、今回は構成を練ることをメインにして、資料を読む時間を削り落とした。結論として何が言いたいのか、どういう論法で行くのか、論拠が弱そうな部分はどのように補強するかという具合である。この際に基礎テキストの『おくのほそ道』を事前に聞き込んでいたことは助かった。基礎的なものは鍛えておくべきだと改めて確信した。

空いている週末を見つけて、三田の図書館に何回か足を運んだ。改めて気づくと、インターネットの時代でも図書館に来て見なければ分からないことがたくさんある。ネットで検索される情報は、一次資料のサマリーに過ぎない。そうこうしていくうちに、前倒しで進めた成果もあり、最終報告会の一週間前にはプレゼン資料はほぼ完成した。

ここで安心して良かったのであるが、せっかくだから最終的なプレゼンの練習にも時間を割いた。仕事でもプレゼンを行うが、一度挑戦してみたかったのが完全に原稿なしでのプレゼンである。そこで実際に練習を始めると、次第に聴衆を意識し始める。「こんな難しくて抽象的な内容、聞いてて分かるわけないし、退屈だ」と、自分の声に出すことでよく分かる。難解な部分を簡潔な表現で置き換えていく。活字と話し言葉はやはり違う。さらに思わぬ収穫が、6・7回以上繰り返して読む練習をすると、全体のイメージが出来てきて、細部を厳密に暗記しなくても、ほぼ同じ内容がすらすらと出て、しかも時間が経っても忘れない。細部の暗記の積み重ねが重要と考えていたが、全体のイメージが掴めれば、細部は後から付いてくるのかもしれない。まさに、自分の肉声で垣間見た「心と体と頭」の一面である。

そして、当日。午前中に最後の読み込みを行った（まさに試合に近い）。言葉に自分の気持ちが乗ってきて手ごたえを感じた。実は、もう一つ仕込みがあった。それは母親を聴衆として呼んだことである。小学校の授業参観以来で非常に恥ずかしいが、それ以上に、前提知識なしの母親がどのように反応するのか、好奇心が勝った。結果であるが、面白かったと母親は目を輝かせていたが、内容に関する話はそれほどなかった。極力平易な言葉で肉声として語ろうとしたことで、内容よりも全体的な雰囲気との共有が優先されたのかもしれない。弁論のパワーは、正しく使えば有益だが、洗脳のように恐ろしい面もある。西洋哲学も古代ギリシャの公共の討論（話し言葉）から始まり、ソフィストの詭弁を乗り越えるところから始まった、高度に実践的な知のあり方であったと、漠然と感じた。

以上、収穫だらけの庄内セミナーであった。恩師を担ぐわけではないが、改めて知識の実践的な側面、「心と体と頭」の大切さを感じた。「海外に打って出る気概のある人材の育成が重要」というのは、経団連の最近のコメントである。就職活動の長期化で大学と企業社会の対立も大きい、先進国で高齢化社会の先頭を走る日本社会にとって、共通の切実な課題もある。「自分の殻を打ち破る気概」、これには学生も教職員も社会人も関係ない。貴重な専門家の方々の講義、庄内の焼きつく日差し、皆で流した汗（もしくは化粧？）、日本海に沈む真っ赤な夕日、みんな貴重な財産として心にしみいった。そして、新たな成長の種を蒔いて頂けたことに、感謝の思いは今も尽きない。

# 芭蕉は出羽の天狗を見たか 『おくのほそ道』から探る酒田の気風

2010年度「庄内セミナー」報告会  
2010年11月13日  
西村 崇

1

## 目次

1. (序)『おくのほそ道』の定量分析
2. 「不易流行」の体得
3. 酒田気風のモデル化―「出羽の天狗」
4. 本間宗久の功績
5. 新たな視座：芭蕉と宗久、そして光丘
6. (結論)芭蕉は出羽の天狗を見たか？

略歴：2003年慶應義塾大学経済学研究科博士課程単位取得  
中退、2004年JPモルガン証券（投資銀行部門）、2006年三菱  
UFJ証券（現三菱UFJモルガンスタンレー証券）にてクオンツア  
ナリストとして日本国債の定量分析に携わる

2

## 1.(序)『おくのほそ道』の定量分析

- ・ 庄内セミナーの主題は『おくのほそ道』

- ・ 芭蕉1689年に現在の1都12県を旅行

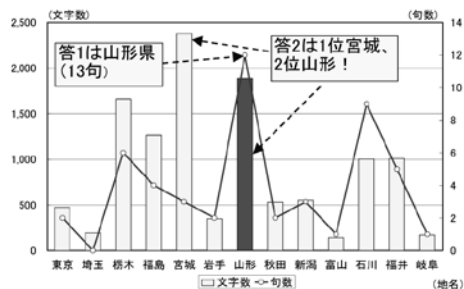
東京、埼玉、栃木、福島、宮城、岩手、山形、秋田、新潟、富山、  
石川、福井、岐阜

Q1: 最も俳句が詠まれた都・県は？

Q2: 最も記述量が多い都・県は？

3

## 1.(序)『おくのほそ道』の定量分析



4

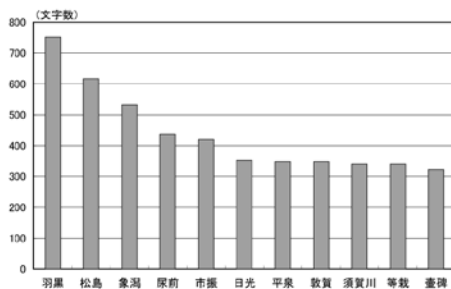
## 1.(序)『おくのほそ道』の定量分析

Q3

記述量が多い場所の上位3位は？

5

## 1.(序)『おくのほそ道』の定量分析



6

## 1.(序)『おくのほそ道』の定量分析

- 山形、出羽三山にて「量的」に多産
- では、「質的」な変化は？
- それは、「不易流行」の萌芽

7

## 2.「不易流行」の体得

- 「不易流行」  
「易」とは変化を意味する
- 出羽三山にて萌芽  
当地の世話人の呂丸に語った

8

## 2.「不易流行」の体得

- 1) 主観的要因  
歌枕の喪失と発見
- 2) 社会経済的状況
- 3) 風土的特長

9

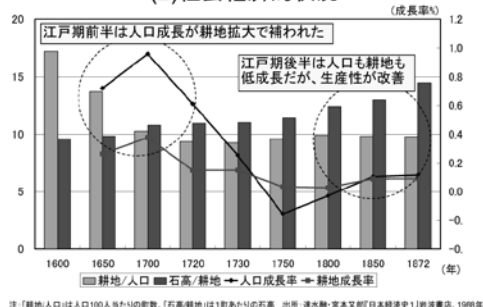
## 2.「不易流行」の体得

— (2)社会経済的状況—

- 1) 旅の北限地としての酒田
- 2) 商人、自由、俳諧
- 3) 江戸前期の新田開発

10

## 2.「不易流行」の体得 —(2)社会経済的状況—



11

## 2.「不易流行」の体得

—(3)出羽の風土的特徴—

- 1) 最上川と庄内平野
- 2) 羽黒修験道
- 3) 出羽三山の「擬死再生」思想

12

### 3.酒田気風のモデル化 「出羽の天狗」

- 「不易流行」は酒田で継承者なし
- 俳句以外で継承者を探してみよう  
(ここより本プレゼンの独自性)
- 本間宗久(1724-1803年)  
本間光丘の叔父、「米相場の神様」

13

### 3.酒田気風のモデル化 本間宗久とは

- 1) 主観的要因  
初代原光が三十六人衆の一員に(1707年)  
宗久は光丘より絶縁される(晩年に和解)
- 2) 社会経済状況  
米取引の活発化、堂島米会所開設(1730年)
- 3) 出羽独自の風土  
「出羽の天狗」の異名

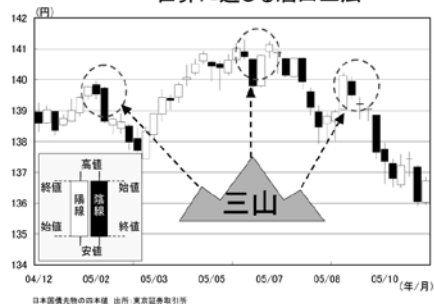
14

### 4.本間宗久の功績

- 1) 今日の相場分析の基礎
- 2) 『本間宗久翁秘録』  
宗久の説話を弟子がまとめた
- 3) 後世からの脚色には注意

15

### 4.本間宗久の功績 世界に通じる酒田五法



16

### 4.本間宗久の功績

- 1) 相場の総合的な分析  
「期待」の役割を重視(ケインズに先行)
- 2) 実は投機性は低い  
中長期的な投資、低レバレッジ
- 3) 「相場禅」

17

### 5.新たな視座: 芭蕉と宗久、そして光丘

- 1) 歴史的に断絶
- 2) 宗久の俳句への関心は見られない
- 3) しかし、米相場の「不易流行」の探求  
最も「世俗＝流行」なものに法則性を追及

18

## 5.新たな視座：芭蕉と宗久、そして光丘 光丘への「連続性」

- 宗久と光丘の同一性を探る  
晩年に両者は和解
- 光丘を「不易流行」で解釈  
「私益」と「公益」を合致させた

19

## 6.(結論)芭蕉は出羽の天狗を見たか？

- 『おくのほそ道』から酒田を見た
- 「不易流行」、宗久の再発見、光丘への連続性
- 芭蕉が見た庄内の「生命(いのち)」とは、「出羽の天狗」なるもの

20

## 6.(結論)芭蕉は出羽の天狗を見たか？

- 酒田とグローバリゼーション
- 宗久の相場禅と光丘の公益哲学

**Samurai  
Finance**

21

## 参考文献

- 社会経済歴史関係  
遠水隆・宮本又郎編『日本経済史1』岩波書店、1968年  
安田重明・天野強敬編『日本経済史1』岩波書店、1995年  
酒田市史編纂委員会編『酒田市史』、1987年
- 芭蕉や俳諧に関して  
井筒俊彦『芭蕉と本質』岩波文庫、1991年  
金森敦子『芭蕉「おくのほそ道」の読』角川書店、2004年  
小室正紀『芭蕉の経済思想』御茶の水書房、1999年
- 羽黒修験と天狗に関して  
久保田義弘『修験の世界』講談社学術文庫、2005年  
矩切光雄『天狗の研究』原書房、2004年  
戸川安雄『出羽三山修験道の研究』佼成出版社、1973年  
宮家準『羽黒修験—その歴史と峰入り—』岩田書店、2000年
- 本間宗久に関して  
青野章作『相場秘伝 本間宗久翁秘録を読む』東洋経済新報社、2002年  
北重人『汐のなごり』徳間書店、2008年  
西野武彦『相場道 小説・本間宗久』日本経済新聞出版社、2010年

22

# 庄内セミナー活動報告会

高橋幸吉（教養研究センター所員／商学部専任講師）

2010年11月13日（土）14時より18時30分まで、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペースにて、第2回庄内セミナー成果報告会が開かれました。庄内セミナー最終日に行った報告を元に、各グループは三ヶ月半に渡って調査を続け、考察を深めてより完成度の高い内容に結実させました。当日は4グループに加え、セミナー最終日にプレゼンテーション参加を表明された経済学部OB西村崇氏の発表があり、計五つの発表が行われました。

報告会当日はプロジェクト・リーダーの慶應義塾大学経済学部羽田功教授による司会と開会のもと、慶應義塾大学教養研修センター所長不破有理教授の挨拶、酒田市副市長本間正巳氏による来賓代表挨拶、来賓紹介、羽田功教授によるセミナー紹介の後、4班＋1名がパワーポイントを使ったプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションは慶應義塾大学教養研修センター副所長吉田恭子准教授の司会で、各発表20分・フロアからの質疑応答5分で行われました。

1班のテーマは「酒田未来航路図～観光と地域活性化～」。酒田の観光と地域の活性化に向けて松尾芭蕉による観光の活性化、外国人観光客誘致と“酒田市俳句世界大会”、ゆるキャラの開発、観光特化バスの運行、さらには市内商店街の活性化案など、盛りだくさんの提案がなされました。その内容の豊富さから発表時間内に収まらず、質疑応答の時間に補足説明するという一幕もありましたが、学生たちが一生懸命現地をフィールドワークしたことが伝わる発表でした。

2班のテーマは「本間光丘の再評価」。江戸時代中期の酒田の豪商本間光丘は、農民たちが飢饉や年貢によって困窮していた時代に多くの慈善事業を行い、問屋業・金融業・地主業を行って莫大な利益を上げたことを指摘しました。そのうえで小作人への配慮や藩への献金まで行い、これらの功績は現代のCSRの先駆であると結論づけました。

3班のテーマは「最上川」。最上川について歴史・

経済・自然の三点から考察しました。歴史面では明治36年以降の治水工事と洪水、最上川に関わる近世の人物、法律、特産など多くのものを紹介しました。経済面では舟運の歴史を中心に、その隆盛と鉄道輸送発達に伴う衰退、水力発電や観光における今後の経済的利用について発表しました。自然の面では観光資源としての最上川と、その水質汚染の状況と問題解決への提言がなされました。

4班のテーマは「つや姫の挑戦——知名度の向上に向けて——」。庄内の新しい米「つや姫」について、その誕生の背景や特徴、生産や販売、ブランド化へ向けての取り組みなどを紹介しました。そしてブランド化へ向けてtwitterを利用した双方向性の情報交換と山形県民への実食の推進を提案しました。

西村崇氏のテーマは「芭蕉は出羽の天狗を見たか『おくのほそ道』から探る酒田の気風」。発表では『おくのほそ道』の定量分析を通じて現在の山形県における句数や記述が多いことを実証し、出羽三山において量的・質的ピークを迎えていることを指摘しました。その質的变化である「不易流行」の体得は、芭蕉自身の主観的要因に加えて社会経済的状況や出羽の風土的特徴にあるのではないかと結論づけた上で、「不易流行」が象徴する酒田気風の継承者として、本間宗久を挙げました。両者は歴史的に断絶し接点もありますが、「流行（＝変化）」する米相場における「不易（＝不変の法則性）」を追求した点での共通性を指摘しました。さらには本間宗久の甥である本間光丘も、理論と実践の合一という点で宗久との共通性があり、酒田にまつわる人物、松尾芭蕉——本間宗久——本間光丘の精神的連続性を指摘しました。結論として芭蕉が庄内で見いだした「生命」とは、「出羽の天狗」と呼ばれた本間宗久が持っていたような独自の気風であるとししました。さらにこの特色を世界に発信する案として宗久の相場禅と光丘の公益哲学を併せ持った“Samurai Finance”を提案するという、大胆なものでした。さすがに学生たちの発表とは一線を画す手法と内容で、参加学生

私たちは大いに刺激されたことと思います。

5つの発表の後、作家金森敦子氏、俳人・「海程」同人柳生正名氏、慶應義塾大学経済学部長小室正紀氏、東北公益文科大学准教授白迎玖氏、慶應義塾大学専任講師高橋幸吉の5名のコメンテーターによる、総評のコメントがありました。

いずれのコメンテーターからも、学生たちの努力や実地アンケートなどの行動力を評価する言葉を頂きました。そして学生たちの発表をより良い報告書にまとめるための、熱心かつ具体的な指摘が多数なされました。

教員から出た指摘は、小室氏が以下の三点に集約して下さいました。テーマを絞る・事実を検証する・自問しながら考える。この三点は学生たちが、以後卒業後も知的営為に携わる際に、必ず持っていて欲しい視点だと思います。柳生氏からは論理的展開の重要性と、概念の明確化というご指摘がありました。発表テーマが絞り切れていない点については、逆に各内容の断絶を聞き手の想像力で埋める面白さということにも言及されました。金森敦子氏は現地を歩いた思い入れの大事さ、歴史的背景の勉強不足を指摘され、「面白い発表というのは発表者独自の考えが表現されているものである」という、知的興奮を刺激する根源的要素をお示し下さいました。教養研究センター所長不破氏からは、厳しい指摘を受け続けた学生たちへの暖かい心遣いと、グループワー

クにおいて多様な考え方を受容しつつ一つの報告書にまとめる経験の貴重さをお話し下さいました。これらの言葉がどれだけ学生たちに届き、彼らの研究成果をどれだけ進歩させたかは、本報告書所収のグループ・プレゼンテーションをご覧頂ければお分かり頂けると思います。

最後に小室氏から学生への努力を高く評価する言葉と、プロジェクトリーダー羽田氏による締め言葉で、発表会は閉会となりました。

その後はファカルティクラブにおいて、庄内セミナー俳句コンテストの結果発表が行われ、懇親会で楽しいひとときを過ごして、当日は散会となりました。

また同時に11月12日から17日まで、独立館地下一階日吉の家にて鵜渡河原人形の展示会と12日・17日の講演会、13日の体験製作などが行われました。一週間日吉に滞在してこれらの活動を行って下さいました鵜渡河原人形保存会の本間光枝氏、松浦正子氏、同会会長・(財)本間美術館顧問の高瀬靖氏には大変なご尽力を頂きました。改めてお礼申し上げます。当日ご来場下さったご来賓の方々、セミナー中に現地でご案内下さった全ての方々に深く御礼申し上げます。教養研究センターの庄内セミナーがつつがなく終了できましたことは、講師の先生方を初めとして皆様のお心遣いによるものであります。有り難うございました。





2010 年度「庄内セミナー」報告書

## 資料編

主催：慶應義塾大学教養研究センター 共催：東北公益文科大学

IA  
InCLA

## 第2回 庄内セミナー

『庄内に学ぶ「生命」—心と体と頭と—』

日本海・庄内平野・鳥海山・出羽三山が織り成す庄内という小宇宙と歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学びつつ「生命」を総合的に考えることを目的としたセミナーです。  
このセミナーは合宿企画と、一般公開企画があります。詳しくは下記のURLをご覧ください。

<http://keio-up.net/shseminar/>

2010年度テーマ 「芭蕉が見た庄内の生命（いのち）」

＜庄内セミナー（合宿）参加者募集＞  
2010年8月31日～9月3日

＜セミナー合宿＞

募集対象：  
慶應義塾大学学生：20名程度  
東北公益文科大学学生：10名程度  
一般の方：若干名

参加費：学生 1万円、一般 3万円  
申込方法：EメールまたはFAXで下記の情報をお送りください。

・氏名  
・ふりがな  
・大学名、所属学部、学年、学籍番号  
・E-mailアドレス  
・住所  
・電話番号  
・応募理由（200字以内）  
申込締切：7月15日（木）  
（応募理由等を考慮して選抜させていただきます。）

※詳細は上記のURLをご覧ください。  
※一般公開企画参加希望者は、企画名・氏名・連絡先をE-mail、FAXまたは電話でお申込みください。  
申込締切：8月30日（月）

＜セミナープログラム＞

＜一般公開企画①＞  
8月31日（火）14:00～17:30  
●基調講演  
○「福澤諭吉と俳諧学」  
講 師：小室正紀（慶應義塾大学経済学部長）  
○「松尾芭蕉関連講演」  
講 師：緑生正名（俳人）  
講 師：金森敦子（作家）  
○全 場：東北公益文科大学酒田キャンパス

9月1日（水）・2日（木）  
セミナー合宿参加者対象のプログラム  
（講義、フィールドアクティビティ）

＜一般公開企画②＞  
9月3日（金）10:00～12:50  
●合宿参加者によるプレゼンテーション  
会 場：東北公益文科大学酒田キャンパス

主 催：慶應義塾大学 教養研究センター 共 催：東北公益文科大学  
お問い合わせ：Eメール：045-566-1151 FAX：045-566-1102 E-mail：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp  
後援：鶴岡市、酒田市、鶴岡市教育委員会、酒田市教育委員会、鶴岡市工芸館、酒田商工会議所

資料1：庄内セミナー 参加者募集ポスター

慶應義塾大学教養研究センター 主催 ・ 東北公益文科大学 共催

## 第2回 庄内セミナー

＜一般公開企画参加者募集＞

2010年度テーマ『芭蕉が見た庄内の「生命」』

慶應義塾大学と東北公益文科大学の学生が、3泊4日の合宿で日本海・庄内平野・鳥海山・出羽三山に囲まれた「生命」の宝庫たる庄内をフィールドとして、さまざまな角度から「生命」を学び、生きる力の基盤となる教養力を身につけるための、新たな学びの形・学びの場を生み出すことを趣旨とした「庄内セミナー」を開催いたします。このセミナーでは期間中のプログラムを一般公開いたします。参加希望者は下記の通りお申込みください。

＜詳細URL＞ <http://keio-up.net/shseminar/>  
庄内セミナー開催期間：2010年8月31日（火）～9月3日（金）

### 一般公開企画 プログラム

①8月31日（火）14:30～17:30

【基調講演】

- 「萩生恒徳と福澤諭吉」  
講師：小室正紀氏（慶應義塾大学経済学部長）
- 「芭蕉のもののけの中心で」  
講師：緑生正名氏（俳人）
- 「芭蕉は異国を越えたのだろうか？」  
講師：金森敦子氏（作家）

②9月 3日（金）10:00～12:50

【セミナー合宿参加者によるプレゼンテーション】

3泊4日の合宿プログラムに参加した慶應義塾大学・東北公益文科大学両学生がグループごとに学びの成果や課題について発表します  
コメンテーター（予定）：酒井忠久氏（数道博物館館長）、黒田昌裕氏（東北公益文科大学学長）ほか

会 場：東北公益文科大学酒田キャンパス公益ホール（酒田市飯森山3-5-1）  
参加費：無料

申込方法

※参加日、氏名、連絡先を明記して、  
E-mail、Fax、Telのいずれかにてお申込みください。

申込締切：8月30日（月） 定員：各70名  
酒田市政策推進課 Tel: 0234-26-5704 Fax: 0234-26-6914  
E-mail: seisaku@city.sakata.lg.jp

※問合せ先：慶應義塾大学教養研究センター Tel: 045-566-1151 E-mail: toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

【後援】酒田市、鶴岡市、酒田市教育委員会、鶴岡市教育委員会、酒田商工会議所、鶴岡商工会議所

資料2：庄内セミナー「一般公開企画」ポスター

教養研究センター主催 「庄内セミナー」関連企画

## 庄内フェア 開催！

「庄内セミナー」の関連企画として、庄内地方を広く知っていただくために、庄内フェアを開催します！

11月8日（月）～11月13日（土）  
庄内米を使ったおにぎり、いも煮などを提供  
★場所：食堂棟1F（生協食堂）

11月12日（金）～11月17日（水）  
「鶴渡川原人形展示と色付け体験」  
庄内（酒田）地方に伝わる土人形  
★場所：独立館地下1階 日吉の家

11月8日（月）～11月27日（土）  
庄内関連図書の特集  
★場所：生協購買部2F書籍部

11月8日（月）～11月13日（土）  
庄内ご当地スナック販売  
★場所：生協購買部1F 購買部

協力：慶應義塾生活協同組合

お問合せ 教養研究センター 045-566-1151 toiawase-lib@adst.keio.ac.jp  
庄内セミナーホームページ <http://keio-up.net/shseminar/news.html>

資料3：庄内フェアポスター

教養研究センター主催 「庄内セミナー」関連企画

## 鶴渡川原人形 展示と講演会

江戸時代から山形県庄内地方（酒田）に伝わる素朴で温かな土人形（鶴渡川原人形）の展示・講演会・ワークショップを行います。

●展示：11月12日（金）～17日（水） 9:00～18:00

●講演会  
11月12日（金） 16:30～18:00  
『羽州酒田湊と鶴渡川原人形』  
11月17日（水） 16:30～18:00  
『鶴渡川原人形は誰のために作られたか』

●土人形のワークショップ（色付け体験あり）  
11月13日（土）10:00から、15日（月）16:30から

※会場：独立館地下1階 日吉の家

お問合せ 教養研究センター 045-566-1151 toiawase-lib@adst.keio.ac.jp  
庄内セミナーホームページ <http://keio-up.net/shseminar/news.html>

資料4：鶴渡川原人形展示ポスター

## 第2回 庄内セミナー 成果報告会

「庄内セミナー」は庄内の歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様など、「生命」を総合的に考えることを目的としたセミナーです。今年度は、芭蕉が見た庄内の「生命」をテーマとし、8月31日～9月3日に開催いたしました。この度、参加学生とコメンテーターによるセミナー成果報告会を開催致します。

皆様のご来場をお待ちしています(入場自由・事前申し込み不要)。

【コメンテーター】  
本間正巳氏(酒田市副市長)  
小室正紀氏(経済学部長)  
柳生正名氏(俳人)  
金森敦子氏(作家)  
高橋幸吉氏(商学部)  
白迎玖氏(東北公益文科大学)

●日時: 2010年11月13日(土)  
14時～18時

●場所: 日吉キャンパス 来住舎1F  
シンポジウム・スペース(入場自由)

●内容: 庄内セミナーの紹介とセミナー参加学生によるグループ・プレゼンテーション




関連企画  
●10/12～30 俳句コンテスト(季節は自由、入賞者には景品贈呈)  
●11/8～27 庄内フェア(庄内米のおにぎり、いも煮、輪渡川原人形展示、庄内関連の図書、スナック販売) 協力: 慶應義塾生活協同組合

主催: 慶應義塾大学 教養研究センター 共催: 東北公益文科大学  
お問い合わせ: 電話: 045-566-1151 FAX: 045-566-1102 E-mail: toiwase-lib@adst.keio.ac.jp  
後援: 酒田市、鶴岡市、酒田商工会議所、鶴岡商工会議所、庄内観光コンベンション協会他  
参照URL: <http://keio-up.net/shseminar/>

資料5: 庄内セミナー 成果報告会ポスター

主催: 慶應義塾大学教養研究センター



## 第2回庄内セミナー 俳句コンテスト

本年度セミナーのテーマ、「芭蕉が見た庄内の生命(いのち)」にちなんで、俳句コンテストを行います。

選者: 柳生正名氏(結社「海程」同人)

入賞者には景品を贈呈します!

【セミナー参加者の部】  
セミナーでの思い出や印象に残ったことをテーマにしてください。

【一般の部】  
内容・季節は自由です。1人何句でも投句が可能です。

【応募方法】  
①下記アドレスに氏名、所属、連絡先を明記して投句。  
または  
②来住舎1F受付脇にある投句用紙に記入し、投句箱に入れる。

募集期間: 10月12日～10月30日  
(入賞者は11月13日以降にご連絡します)

投句先アドレス: [shonai\\_haiku@ml.keio.jp](mailto:shonai_haiku@ml.keio.jp)

資料6: 俳句コンテストポスター

## 芭蕉が見た『生命』追う

### 慶應大と公益大学生が庄内セミナー 講演と学生プレゼンを一般公開

慶應義塾大教養研究センターと東北公益文科大学の学生たちが庄内をフィールドに合宿形式で学ぶ「庄内セミナー」が31日から9月3日まで、酒田市の公益大などで開かれる。31日には一般公開企

画として、小室正紀慶應大経済学部長らの講演、9月3日には学びの成果や課題を発表する「学生プレゼンテーション」が、ともに公益大301教室で行われる。

庄内セミナーは「庄内に学ぶ『生命』」と心と体と頭とを総合テーマに開催。昨年に続き2回目の今回は「芭蕉が見た庄内の『生命』」がテーマで、慶應大の学生18人と公益大の3、4年生7人が参加する。学生たちは芭蕉が「奥の細道」で目的地とした妻鳥(秋田県にかほ市)、羽黒山など芭蕉して講演する。

そのプログラムの一環でもある講演と学生プレゼンを一般公開。31日は午後2時半から、鶴岡市吉研究の第一人者でもある小室学部長が「荻生徂徠と福澤諭吉」、俳人の柳生正名さんが「芭蕉の『みちのく』セカイの中心で」、作家の金森敦子さんが「芭蕉は嵐ヶ関を越えたのだろうか?」と題して講演する。

9月3日は午前10時に開始。両大の学生がグループに分かれて学んだ成果などを発表し、酒井忠久致道博物館長、黒田昌裕公益大学長らがコメントする。

両企画とも定員は70人。申し込みは参加日、氏名、連絡先を明記し、酒田市政推進課へ電子メール([seisaku@city.sakata.lg.jp](mailto:seisaku@city.sakata.lg.jp))、ファックス(02334-26)6914、電話02334-265704へか、鶴岡市政推進課へ電子メール([seisaku@city.shinagawa.lg.jp](mailto:seisaku@city.shinagawa.lg.jp))、ファックス02335-26600、電話02335-262111へ。30日まで受け付ける。

2010年8月29日(日)  
庄内日報

慶応大と東北公益文科大学(酒田市)の学生による合同合宿「庄内セミナー」が31日から9月3日までの4日間、庄内各地で開かれる。「庄内セミナー」としては昨年に続いて2回目の開催。今回は「庄内を知る・芭蕉が見た庄内の『生命(いのち)』」をテーマに、学生が芭蕉の足跡をたどりながら庄内の魅力を検証する。両大学はセミナーを契機に研究センターの新設をはじめ各種の交流事業に力を入れていく方針だ。

### 慶大と公益大 学生の「庄内セミナー」

2008年に慶応大教養研究センターが主催して「鶴岡セミナー」を開催したが、昨年11月に成果を発表した。今年は、芭蕉が庄内にひかれた理由を基に、芭蕉の目に庄内の自然、歴史、生活がどう映り、どのように書き留められたのかを探るのが、未知なるものに出会うことで学生の「学びのフィールド」を広げ、生きる力の基盤となる教養力を身につけてもらうとの企画だ。

昨年は両大学合わせて20人の学生が参加。「激動の時代を生きた松ヶ岡開墾場に学ぶ生命のつながり」をテーマに、出羽三山の山岳信仰、

### 記写あれこれ

31日から4日間

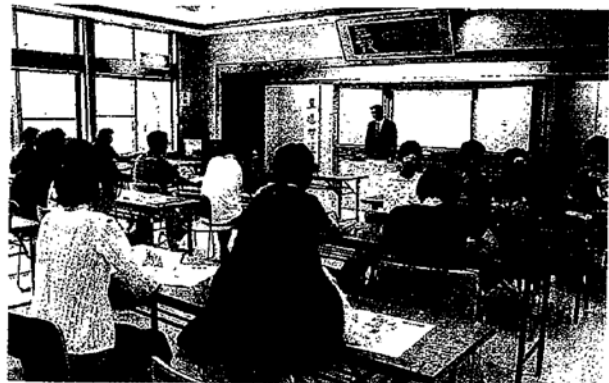
## 「芭蕉軸」に連携強化

### 魅力再発見の研究、ぜひ

狙い。併せて、作品に描き出されているさまざまな「生命」についても考える。

今回は慶大生18人、東北公益文科大学7人が参加。31日は午後2時から東北公益文科大学で小室正紀慶応大経済学部

長が「萩生徂徠と福沢諭吉」、俳人の柳生正三さんが「芭蕉料簡(秋田県)を見聞。2日成果を報告する。



芭蕉をテーマに「庄内」の原点を見ることが世界観が変った」と感動。2年連続で参加する学生もいる。東北公益文科大学の担当者は「学生は研究の事前準備、資料、レポート作成など、睡眠をほとんどとらずに研究に没頭する」と語る。

は羽黒山登山のほか、酒田市内でグループ別の研究テーマに沿ってフィールドワークを実践する。最終日の3日は午前10時から酒田市の公益研修セン

両大学はセミナーをきっかけに連携を充実させる。セミナーにおける単位互換制度の導入、研究センターの新設、研究者の交流、共通授業・講座の設置などを指す方針だ。実現させるためにも、自然に囲まれた「生命」の宝庫である庄内の原点、魅力を再発見する研究成果を期待したい。基調講演と中間報告は一般にも公開する。入場無料。30日まで電話で酒田市政推進課0234(26)5704か鶴岡市政推進課0235(25)2111へ申し込む。(酒田支社・滝井充明)

平成22年9月1日(火) 山形新聞《朝・夕》 公益大・他大学・教育・その他

## 芭蕉が見た庄内たどる

慶応大・公益大  
合同セミナー 初日は俳人ら講演

慶応大と東北公益文科大学(酒田市)の学生による合同合宿「庄内セミナー」が31日から4日間の日程で始まった。庄内を知る・芭蕉が見た庄内の『生命いのち』をテーマに、両大学の学生は松尾芭蕉の目で、また自らの足で芭蕉の足跡をたどりながら庄内の魅力を研究する。初日は公益大で俳人ら専門家の基調講演を聞いた。

セミナーには慶応大18人、理由を起点に、芭蕉の目に庄内北公益文科大学の学生が、内の自然、歴史、生活がどのよう加。芭蕉が庄内にひかれたように映り、どのように書き留められたのかを調べる。



松尾芭蕉をテーマに開講した庄内セミナー。初日は市民にも公開した講座を開いた。酒田市・東北公益文科大学

市民にも公開した初日の講座では、小室正紀慶応大経済学部長が「萩生徂徠と福沢諭吉」と題して個性、個人の独立を重視した徂徠と福沢の共通点や相違点を解説し、「一見、無意味と思える中に重要なものの考え方が潜んでいる。学びし上にもまた一歩間を勉(つと)め」という姿勢を實踐してほしい」と語った。

俳人の柳生正名さんは「芭蕉のみのく」セカイの中心で「をテーマに「おくのほそ道」の序章を読み解きながら

「古池や 蛙飛び込む水の音」は世界の文芸史上において一瞬の世界をリアルに、鮮やかに切り取った最高の作品だ」と説明した。作家の金森敦子さんは「芭蕉は風ヶ岡を越えたのだろうか？」について述べた。

きょう1日は柳生さん、金森さんの講義をはじめ、遊佐町の三崎公園、にかほ市象潟郷土資料館(秋田県)を視察。

2日は羽黒山登山、酒田市内でフィールドワークを實踐し、最終日の3日はグループごとに中間報告を行う。学生は11月13日に横浜市の慶応大日吉キャンパスで開かれる活動発表会で研究成果を報告する。

セミナーは3年目。日常とは異なる環境の中で、未知なるものに会うことで学生たちに「学びのフィールド」を広げ、教養力を身につけてもらおうと両大学が企画した。

平成22年 9月2日(木) 朝日新聞 公益大・他大学・教育・その他

## 合宿で学ぶ

## 「芭蕉と庄内」

酒田でセミナー開始 慶大・公益大

慶応大と東北公益文科大学の学生が庄内をフィールドに合宿しながら学ぶ「庄内セミナー」が8月31日、酒田市の公益大キャンパスで始まった。今年度のテーマは「芭蕉が見た庄内の『生命』」。「おくのほそ道」の分析を通じて、松尾芭蕉が出羽三山、酒田、象潟(秋田県)にひかれた理由などを調べる。

初日は俳人の柳生正名氏が「芭蕉のみのく——セカイの中心で」と題して講演。「涼しさやほの三か月の羽黒山」が、おくのほそ道の中央の句にあたることを紹介し、「芭蕉の心の旅路における重心が出羽三山だったのでないか」などと解説した。

合宿では学生が班に分かれて講義やフィールドワークで芭蕉の足跡などを探索。3日に酒田市中間報告があり、11月13日に横浜市の慶応大日吉キャンパスで最終報告会を開く。

# 研修成果を中間報告

5月11日 報  
庄内(1)

慶應大、公益大  
庄内セミナー 学生4グループが市民に

慶應義塾大教養研究センター(所長・横山千晶、慶應大法学部教授)と東北公益文科大学(黒田昌裕学長)の学生たちが庄内地方をフィールドに合宿形式で学ぶ「庄内セミナー」の学生プレゼンテーションが3日、酒田市の

公益大で行われ、受講生25人が4グループに分かれて研修成果を「中間発表」した。

「庄内に学ぶ『生命』」心と体と頭とを総合テーマにしている庄内セミナーは、昨年に続き2回目。今回のテーマは、芭



蕉が見た庄内の『生命』。慶應大生18人と公益大生7人が受講。同市松山地区で、先月31日に開講した。

城の温泉宿泊施設「眺海の森さんさん」に泊まり込みながら、象潟(秋田県にかほ市)や羽黒山など芭蕉の足跡をたどる一方、専門家による講義を受けてきた。

学生プレゼンテーションは、現地「庄内」での最終プログラム。4グループがそれぞれの研究テーマに沿って、研修で判明した課題や得た成果を、市民に公開で発表した。

あるグループは、芭蕉が歩いたところは砂丘だった酒田海岸に植林し、今

庄内での合宿研修で得た成果や研究課題などを学生たちがグループごとに「中間報告」した

も残るクロマツの美林に、れ多く「詠めなかった」、した豪商・本間光丘に著目。成功例ばかりが残りの「公益の祖」とされる光丘の再評価を行い、事業によって不利益を被った人が本音にのめり込んだことを通説をうのみにしない再考し、新たな見方を提案するとした。その検証方法として、植林事業前後の農民の暮らしにスポットを当てて、ことなを発表した。

別のグループは庄内の米づくりに焦点を当て、芭蕉が「奥の細道」で訪れた際も豊かな田園風景が広がっていたはずなのに、それを詠んだものが一句もない理由を考察。当時ではありふれた風景だったことなどで「詠まなかった」、素晴らしい風景を俳句に表すことが恐

レ多く「詠めなかった」、作品の出来が懸念して「奥の細道」に載せるのはブライドが許さず「詠んだが残っていない」という3つの仮説を立てた。これらに対し、高橋幸吉慶應大商学部専任講師は「発想は素晴らしいが、思い込みだけで研究を進めるのは危険」など、辛口のコメントをした。

「庄内セミナー」は学生プレゼンで終了。両大学の学生たちは今後、インターネットなどで連絡を取り合いながらさらに研究を進め、11月に慶應大日吉キャンパス(神奈川県港北区)で開かれる最終報告会で、各グループごとに成果を発表する。

一をつくり、観光地をめぐるバスを運行するなどのアイデアが示された。「つや姫」については全国的な知名度向上のため、「つくり手の顔や思い、歴史を消費者に伝えることが重要」との提議があった。

コメンテーターとして俳人、作家、両大の研究者、それに本間正巳酒田市副市長も参加し、研究成果の発表に期待感を示した。

庄内セミナーは両大が、学生の学びの場を広げようと2008年まで行っていた。



慶応義塾大学日吉キャンパスで東北公益文科大学との共催による「庄内セミナー」が開かれた。「庄内を知ろう」の合言葉のもと、酒田で今夏行った合宿セミナーのまとめの報告会である。

日吉キャンパスは、折しも高々とそびえる銀杏並木が目ごとくに黄葉しつつあり、夕暮れにはチアガールたちが軽やかにステップ練習を繰り返すなど活気とさわめきにあふれていた。「庄内フェア」ということで、食堂では庄内風の芋煮と、つや姫のおにぎりのセットを目玉に、購買部では庄内関連の書籍やケーキなどが販売されていた。独立館では「鶴渡川原人形」の展示や講演、色付け体験等が催された。

さて、報告会での各グループの題は次の通りであった。

「酒田未来航路図」

「本間光丘の再評価」

「最上川の歴史性」

「つや姫の挑戦」

特別発表(OB)として「芭蕉は出羽の天狗を見たか」とい

## 大学生の診た庄内

う奇想天外な発表もあった。

さすが「実学」の伝統を引く慶応大らしく、いずれも経済・観光面から酒田の将来の地域活性化を診断・提言している。

芭蕉や最上川に焦点を合わせた「観光特化バス」や「ゆるキヤラ」などの提案、また、「公益」「富国足民」を図った光丘の理念は、現代のCSR(企業の社会的責任)の先駆であり、作り手の見える「つや姫」の販売法、ツイッターの活用など、若々しい発想が楽しかった。フィールドワーク中、芭蕉に倣った句会で一席になった作品。雲の峰／山伏飲み干す／ペットボトル

鶴渡川原人形が招待されたのは横山千晶慶大教授の「WOMEN OF JAPAN」という論文集に大石やあさんが紹介されたのがきっかけで、その本はエジンバラ大学の副読本になっているという。素朴な土人形が世界の空を翔るなど、思えば愉快なことである。(高立青)



# 鵜渡川原人形 展示と講演会

高瀬靖（「鵜渡川原人形伝承の会」会長）

## はじめに

この度、不思議なご縁で貴学の「庄内セミナー」にご招待いただき、鵜渡川原人形の展示と講話の機会を得たことは望外の幸いであります。そもそもは、10 年程前、横山千晶教授の研究論文集「JAPANESE WOMEN」に、土人形作家大石やゑさんと女性たちのことを取り上げてくださったことが始まりでした。私どもは、大石やゑさんを中心に、「鵜渡川原人形伝承の会」を結成し、その伝統的技術を受け継ぎ、次代の子どもたちに、人形の歴史やこめられた思い、独特の技法を正しく伝え広めることを目指しておりますが、慶應義塾大学・東北公益分科大学共催の「庄内セミナー」にも参加させていただき、郷土の過去と未来について学ぶ機会をいただいたことを深く感謝しております。

## 1. 酒田・鵜渡川原人形の展示と色付け体験

全国各地に土産・特産品としての土人形はたくさんあるが、昔ながらの伝統技法を守り、人々に愛される人形を作り続けることは、非常に困難な時代になっている。たかが土人形とはいえ、それには郷土の歴史や風土、祖先から受け継いできた文化、人々の心が込められている。今、改めてそれを掘り起こし、受け継ぎ、語り継ぐことが必要なのではなかろうか。今回展示した鵜渡川原人形は、約 200 体、なるべく古いものと考え、会員が蒐集したものを主に持参した。古び汚れたものも多いが、裏に名前や年号の入っているのを見れば、そこに生きた人々の息遣いもが伝わってくるに違いない。

土人形は、型に粘土を詰めて立体にする人形起こしに始まり、自然乾燥させ、800℃で素焼きした上に胡粉掛けを繰り返し、膠で溶いた岩絵の具で色付けをし、最後に目を入れて完成という半年以上の根気のいる作業を要する。しかも、胡粉掛けも色付け

も膠という自然物に熱を加えて使用するため、暑過ぎても寒過ぎても仕事にならないのである。

現在、鵜渡川原人形伝承の会がその手仕事の素晴らしさを次世代へと伝えようといくつかの小中学校で体験教室を実施しているが、子供たちの最初の反応は、粘土で苦勞してそれが立体となって起き上がった瞬間の感動である。「手塩に掛ける」という言葉通り、何度も手に取って作業を繰り返すうちに深い愛着心が湧いてくるらしい。取り扱いも恭しくなり、話を真剣に聞き、集中していくのがわかる。「画龍点睛」という言葉を教え完成を目指す、目鼻がどんなに変でも、その子だけの世に二つとない人形である。「弟子入りしたい」という子が必ず出てくるから楽しい。

今回は慶應義塾大学でもその感動を少しでも伝えようと体験教室を日吉に移して行わせていただいた。構内のあちこちに立派な大きいポスターを貼っていただき、おかげで色づけ体験も大盛況、恐れ多くも！慶応大の先生方にも参加していただき、光栄でありました。一般市民や旧知の方々も喜ばれ、用意した素焼きの獅子童子・新年干支人形の兎は、数が足りないほどでした。体験なさった方々の感動はいかがでしたでしょうか。お人形は今それぞれの方の下でその生活の一部となっているでしょうね。私ども一同、深くお礼申し上げます。

## 2. 講話 I「羽州酒田湊の賑わいと鵜渡川原人形」

11月12日（金）

(1)「西の堺・東の酒田」

江戸末期から酒田大石家に伝わる素朴で温かみのある鵜渡川原人形を生み出した酒田の風土についてお話しします。

酒田の名が歴史の表舞台に登場してくるのは17世紀初頭頃からである。平安朝の昔「袖ヶ浦」の歌枕で知られ、最上川河口の南岸に湊を形成していた

酒田（砂潟・狭潟・逆沓とも表記された）は、その頃から北岸の現酒田に大規模な移転を始める。同じ頃、徳川四天王の一人、酒井忠勝が庄内藩主となり、酒田に亀ヶ崎城を置き城代を派遣したが、酒田町では、36人衆と呼ばれる長人（おとな）が堺の会合衆（えごうしゅう）と同じように町制を司っていた。寛文12年（1672）河村瑞賢が西回り航路を整備し、江戸城米の回漕に成功することによって酒田は天下の台所大阪とも直結し、西回り航路の基点として一躍「西の堺・東の酒田」と並び称せられることになる。最上川水運の発達とともに、酒田港からは、幕府直轄領の城米のほか紅花・青そ・葉たばこ・大豆など、また、松前の海産物や秋田の材木などが積み出され、西国からは塩・砂糖・茶・木綿類・古手物、諸国の銘石が重石として運び込まれた。華麗な西陣織とともに豪華な京人形や伏見の土人形も京みやげとして運ばれてきたのはいうまでもない。天和3年（1683）の調べでは、酒田港に入った船の数は2500～3000隻とあり、内、船乗り20人ほどで操る諸国の千石船は5、600艘であったといわれる。平均20日の滞在として、ひと夏20万人ほどの他国人で賑わったことになる。酒田町の戸数も20年間で1200戸から2250余軒に増えたという。

その賑わいを活写したのが、井原西鶴の「日本永代蔵」燈屋の繁盛ぶりであった。翌元禄2年（1689）には松尾芭蕉が「奥の細道」の途次訪れ、「暑き日を海に入れたり最上川」「行末は誰が袖触れん紅の花」等の名句を残し、以後長く文人墨客の訪れる端緒となった。また、「酒田五法」を編み出し、現代でも相場の神様とされる本間宗久が大成功をし、「酒田照る照る 堂島曇る 江戸の蔵前雨が降る」という俗謡で囃されたという話もある。

こうして酒田は、明治になって鉄道が敷かれるまで、今では想像がつかないほど賑わっていた。言葉遣いをはじめ、食文化等も内陸と違って上方風の面影を残しているのはそのためである。また、新しい物好きで、派手好きな気風も都ぶりなのかもしれない。

## (2)「酒田鵜渡川原人形」

鵜渡川原人形は、江戸末期、代々鋳物業を営んでいた大石助右衛門が創始したものである。文化・文

政の頃、京伏見稲荷神社参詣の土産品として作られ始めた伏見人形がその源といわれている。残されている木型には文政4年（1821）、絵の具箱には嘉永4年（1851）等の墨書が見られるので、遅くてもそれ以前から作られていたことがわかる。明治26年（1893）、山居倉庫の建設に伴い鵜渡川原村（現亀ヶ崎）に移転したことからその名がついた。本業の傍ら、人形制作も本家・分家に受け継がれ、特に、助右衛門の三男周蔵は、風俗人形、周蔵の子金之助は昔話ものに優れた原型を作り、他処にはない特色ある作品を残している。平成11年、人形制作4代目に当たる大石定佑氏の没後、廃絶の危機にあったが、伝承の会が結成され、現在、妻のやゑさんと伝承の会の本間光枝・松浦正子の両名が作り続けている。全国各地の土人形が衰退しつつあり、絵の具もアクリル系の便利なものになりつつある中で、鵜渡川原人形は、昔ながらの手法を守り続け、独特の型と鮮やかで丁寧な色付けで手作りの温もりを伝えている。

## 講話Ⅱ「鵜渡川原人形は誰のために作られたか」

### 11・15（金）

酒田には、江戸時代から北前船で運ばれた上方・江戸の豪華な雛人形が数多く保存され、今も「庄内雛街道」として賑わいを見せているが、それはあくまでも豪商たちの京土産であり、庶民の手の届くものではなかった。素朴で廉価な土人形は、庶民に愛されて広く庄内一円で売られ、特に、子供が生まれるとその子の誕生祝の人形、あるいは玩具として買い与える風習があった。雛祭りや端午の節句には、みんながそれぞれの人形を持ち寄って飾ったものである。今でも旧家の雛壇には、おじいさんやおばあさん、あるいはその先祖の名前が書かれた古い土人形を見ることができる。

さて、わが子の誕生を祝い、成長の無事と将来の幸を祈る土人形は、おのずと親の思いの籠もったものとなった。初期のころは、七福神や宝船・高砂等、伏見人形の木型・土型をそのまま用いた吉祥人形や歌舞伎人形が多かったが、息子周蔵の創作した風俗人形は、洗濯女や庄内おばこ・三味線引き（芸事）など庄内の生活に根ざした女性の姿、花嫁・少女・モダンガール・等々、庶民の夢や願望を表した

ものといえよう。また、孫の金之助は、昔話の主人公、桃太郎日本一を始め、牛若丸と弁慶・舌切り雀などを作り出した。関羽・太閤秀吉・加藤清正など、古来の英雄豪傑や、乃木大将・兵隊さん・野球少年な

ども、男の子向けに強くたくましくあれという親の願いをこめたものである。

鵜渡川原人形は、庶民の実生活に根ざし、その夢や願いから生み出されたといえよう。

## 鵜渡川原人形の展示会とワークショップ

本間光枝・松浦正子

11月10日の夜行で上京した一行3名は、翌朝の8時20分ごろ日吉駅に降り立つ。駅舎を背に庄内のどんより低い鉛色の空とは大違いの青い高い空に感動したり、先を急ぐ学生数の多さにびっくりしたり、日常とは全く違う光景に「スゴイ…!」を連発するばかり。道路を隔てた日吉キャンパスの真っ直ぐ延びる銀杏並木の緩やかな上り坂、左右の建物に目を移しながら『来往舎』を目指した。途中の掲示板には『鵜渡川原人形のポスター』が、少し先には『福沢諭吉の胸像』があり温かい空気が広がっている。

7泊する宿をはじめ、あちらこちらの施設を案内していただき昼食を済ませた。横山先生の意見を参考にしながら、展示会場（独立館の和室「日吉の家」）の畳の養生面とレイアウトを考える。持参した人形は100年前後の古いものが中心で、三種のお雛様をはじめ吉祥人形や武者人形・昔話にちなんだもの・花嫁・三味線弾き・天神様など板畳に設営したテーブルの上に約170体が飾られた。近代的な空間に古い土人形が見事な調和を醸し出している。12日からの展示会に備えた作業は予定通り18:00に完了した。

見学や体験に訪れる人は学生さんはじめ地域の方や大学主催の講座を受けている人が主で、土人形に興味があるのか製法や材料・歴史などの説明に耳を傾けては頷いている。型や影響にあった人形については現物を見ながら話が弾んだ。「古いものが好きなんです」と興味深そうに見ている男子学生に歯跡の残る人形を見せて「どうしてネズミにかじられたのか?」と問えば「ネズミの好きなもので作られているから」と返る。『膠』という言葉は出なかったが的を突いた答えに拍手を送った。下見にやってきたある男性は翌日に二人連れでやって来て「妻の実家が酒田の鵜渡川原だから連れてきた」という。土人形を前に「懐かしい。昔はどここの家にもあったのよ…」と繰り返している妻のそばで目を細める夫、何とも微笑ましいシーンである。来場のきっかけは散歩途中に見つけたポスターと話された。ある女性は「干支を探していたが叶うものが見つからずワークショップに参加してよかった」と漏らす。姉妹で参加した主婦は「世界に一つしかない人形が出来てうれしいね…」と互いの作品を見比べて満足していた。色々なご縁で出会った展示会場での和やかな遣り取りは最も楽しいひとりで情報交換の場でもある。「人形の見方が変わった」「故郷にも同じような土人形がある」など帰り際に残してくれる様々な声も素直に嬉しい。

体験用に準備した人形は『獅子童子』（20体）と干支人形の『兎』（10体）である。『獅子童子』を選んだ理由として①江戸末期の木型で作られている⇒木型の人形は比較的小さく平たい感じがして奥行きがなく土型の人形とは一味違った趣を持っているのが特徴。明治のころからは土型や石膏型が主流になり大きい人形が作られるようになった。②江戸末期の製法をそのまま伝えている⇒酒田の人形作りは古い技法を守り伝えていることから当時の木型の人形を用いた方がより効果的と考えた。③風合いの違いがよく分かる⇒顔料や胡粉を膠で溶かした絵具とアクリル系絵具との違いを感じ取って欲しい。など

体験参加者の声を集めてみる。①膠の性質がよく分かった。②土人形に顔料を使っているのは珍しい。③立体のためか筆さばきが難しい。④左右対称の目に仕上げるのは大変だ。⑤老眼鏡を忘れたから上手く描けない。⑥胡粉の艶は深みがある。⑦絵手紙にする材料が出来て良かった。⑧最初から作ってみたい など。心を込めて仕上げた人形を見つめる人たちの顔がどんなに美しかったことか。会場に使わせていただいた和室「日吉の家」での数々の笑顔がほのぼのと甦ってくる。

思いがけない素敵な環境を提供くださいました諸先生方に心より感謝申し上げます。寒い北国に向かう一行の心にもたらした貴重な宝、本当にどうもありがとうございました。

## 講評

柳生正名

松尾芭蕉ゆかりの地で開催される庄内セミナーも今回で3回目、初の試みとして俳句コンテストが実現した。「セミナー参加者の部」と「一般の部」の二部構成で、告知からわずかの期間に、学内外の約30人から計140余りの句が寄せられた。

セミナー参加者の過半は、作句がほとんど初めての体験だったはず。にもかかわらず、若々しい感覚が紡ぎ出す作は、羽黒山や最上河口、象潟など、いずれも芭蕉が巡った庄内の地貌を今に彷彿とさせる出来ばえだった。

「天（特選1席）」にいただいた吉田恭子氏の一句は、一行が実地調査の一環として訪れた夏の羽黒山上での景だ。山伏がラッパ飲みするボトル、出羽山のシンボル五重塔、山嶺のごとく大空に屹立する入道雲……眼前の景から空へ向かい、終いには、その先の宇宙まで見通すような作者の眼差しのダイナミズム。一種、曼荼羅に描かれた密教的世界観も連想させる。

芭蕉の時代の竹筒はベツトボトルに変化したにせよ、当時も今も、常住と漂泊、永遠と瞬間、神秘と卑俗が絶えず出会い、交錯するこの地で「不易流行」の理念を見出した芭蕉の心のありよう。それを追体験することが、当セミナーの持つ本質的な意味だったことに改めて思いが至る。

この点を端的に言い止めたのが「人（特選第3席）」に推した進藤貫則氏の一句。さらには、天地人に続く秀逸句に選んだ高野和季氏の一句。筆者はセミナーで講演した際、熊の黒いシルエツトが白地に斑点状にプリントされたカジユアルなシャツを着ていた。句の作者はそれをパンダシャツと言ったのだ。俳句では、こうした形で、自分が身を置く土地や、句座を共にする者に対する親愛の情、また感謝を表現することを「挨拶」という。芭蕉が「おくのほそ道」で詠んだ、ほとんどすべての句には、訪れた地やそこで歓待してくれた人々への挨拶がこめられている。

この句について、一部からは「無季で俳句になっていない」という声が出るかもしれない。しかし、作者はおそらく初めてに近い作句で、芭蕉が生涯をかけて追究した俳句の本質に肉薄する何かを直感的に掴み取っている。

そうさせたのは、庄内という土地が持つ力、魂を自らに引き寄せ、本質的なものに向き合わせるはたらきだったのではないか。この地に引き寄せられた魂は、命あるすべてのものの、動物、植物はもちろん、岩や水も含め、ありとあらゆる存在と共に鳴し合うに十分な軽やかさと、研ぎ澄まされた眼差しを帯びる。「地（特選2席）」とした橋本慎也氏の句を筆頭に、不破有理氏、高橋幸吉氏、西村崇氏、宮上七重氏など入選句のいずれもが、ある一瞬、眼前に立ち上がった、瑣末でありふれた景を切り取りながら、その瞬間に特権的な重みを与えている。それを可能にしたのは、描かれた対象と作者の間に成立した不思議な共鳴関係、言い換えれば一体感に違いない。

それは、かつてインドから伝播した仏教が、極東の片隅で独自の発展を遂げ、羽黒三山の修験道や即身仏信仰を産み出す母胎ともなった「山川草木悉皆成仏」——命あるものも、ないものも、一切が仏、とするアニミスティックな宇宙観——に直接つながっているはずだ。

ミクロな決定的瞬間の積み重ね（「おくのほそ道」の旅がそうであったような）が、こうした広大にして豊穡な思想へと突如転化する体験——たとえば、芭蕉が羽黒三山詣を終え、みちのくの太平洋から日本海への横断を遂げたとき、彼の句境は俄然雄渾さを増し、

暑き日を海にいれたり最上川

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

と大ぶりの詠み振りに突如、変貌した。そのあたりの事情とつながる何かを感じさせる横山千晶氏の句などとお会えたのも、また大きな喜びだった。

一般の部でも、数々の印象的な作を見出すことができた。順に天・地・人にいただいた浜いぶき氏、大場やエ氏、稲垣秀俊氏はもとより、武藤浩史氏、甲賀崇司氏、岸勇太氏など、表現スタイルは様々ながら、そこに見られる豊かな詩性と地に足のついた境涯への思いは、本格的な俳句大会に寄せられる作と比べてもまったく遜色のない水準にある。とともに、直接、相まみえることはなくとも、俳句のやり取りを通じた一期一会が、人の間に成り立つことを実感でき、これも大きな収穫だった。

（了）

## 庄内セミナー 俳句コンテスト

柳生正名 選

天 地 人

◎秀逸（選者賞）

○入選

〔セミナー参加者の部〕

雲の峰山伏が飲み干すペットボトル〔天〕

吉田 恭子

かみきりの歩いてひげをもちあます〔地〕

橋本 慎也

芭蕉追ひ気づけばすでに赤どんぼ〔人〕

進藤 貴則

猫の背にはありと落ちぬ秋の声〔◎〕

不破 有理

いざ行かん芭蕉みちのくパンダシャッ〔◎〕

高野 和季

いぼむこり招き入れたる今日の宿〔◎〕

高橋 幸吉

象潟のうらみもよそに秋の蝶〔◎〕

西村 崇

日が落ちる線香花火の光落ちる〔◎〕

宮上 七重

秋鶴来産み落としたる麻耶の峰〔◎〕

横山 千晶

〔一般の部〕

電線の途切れしところ花野なる〔天〕

浜いぶき

茶の花や祖母とぬい日を身の内に〔地〕

大場やエ

ランナーの彼岸花咲く話など〔人〕

稲垣 秀俊

海の藍わたしは友を持ちません〔◎〕

武藤 浩史

象潟の海にまみずこすすき原〔◎〕

甲賀 崇司

爪のごとき松茸噛みし巖島〔◎〕

岸 勇太

## 庄内セミナー協力団体・個人

## 【団体】（順不同）

酒田市  
鶴岡市  
酒田商工会議所  
鶴岡商工会議所  
酒田市教育委員会  
鶴岡市教育委員会  
庄内観光コンベンション協会  
株式会社 山形新聞社

株式会社 庄内日報社  
酒田三田会  
象潟郷土資料館  
眺海の森 さんさん  
鵜渡川原人形伝承の会  
慶應義塾生活協同組合  
慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス  
慶應義塾大学出版会

## 【個人】（順不同、敬称略）

|                          |                            |
|--------------------------|----------------------------|
| 本間正巳（酒田市副市長）             | 伊藤賢一（鶴岡市羽黒支所いでは文化記念館 調整主任） |
| 酒井忠久（財団法人致道博物館 館長）       | 金 道博（にかほ市象潟郷土資料館 館長）       |
| 金森敦子（作家）                 | 齋藤一樹（にかほ市象潟郷土資料館 ）         |
| 柳生正名（俳人）                 | 高瀬 靖（鵜渡川原人形伝承の会 会長）        |
| 小室正紀（慶應義塾大学経済学部 部長）      | 本間光枝（鵜渡川原人形伝承の会）           |
| 前田茂男（酒田市総務部政策推進課 政策推進主査） | 松浦 正（鵜渡川原人形伝承の会）           |
| 土門千秋（酒田市総務部政策推進課 政策推進係長） | 大沼哲也（塾員）                   |
| 石川 聡（鶴岡市企画部政策推進課 調整主任）   | 吉村大輔（塾員）                   |

## スタッフ

|                      |             |
|----------------------|-------------|
| 羽田 功（経済学部 教授）        | プロジェクト・リーダー |
| 横山千晶（法学部 教授）         | 教養研究センター所長  |
| 不破有理（経済学部 教授）        | 教養研究センター副所長 |
| 近藤明彦（体育研究所 教授）       |             |
| 長田 進（経済学部 准教授）       |             |
| 吉田恭子（文学部 准教授）        |             |
| 高橋幸吉（商学部 専任講師）       |             |
| 表 實（東北公益文科大学 副学長）    |             |
| 白 迎玖（東北公益文科大学 准教授）   |             |
| 山本裕樹（東北公益文科大学 講師）    |             |
| 一ノ瀬大輔（東北公益文科大学 講師）   |             |
| 小磯勝人（慶應義塾大学出版会）      | 記録          |
| 伊藤俊明（東北公益文科大学 教務学生課） | 事務局         |
| 田澤輝明（東北公益文科大学 教務学生課） |             |
| 日水邦昭（教養研究センター）       | 事務局         |

## 謝 辞 ―あとがきに代えて―

庄内セミナー・プロジェクトリーダー  
羽田 功（経済学部教授）

庄内セミナーについてご報告してまいりました。庄内セミナーは、庄内にフィールドを広げ、かつ昨年度ご協力いただいた東北公益文科大学を共催校として迎えることで、一昨年度の鶴岡セミナーをより発展させたものです。おかげさまで過去2年間と同様に成功裡にセミナーを終えることができました。酒田や庄内の方々にも喜んでいただけたようすし、山形新聞や庄内日報にも取り上げていただきました（資料編を参照）。また、横浜・日吉キャンパスでの成果報告会やセミナー関連企画にも多くの参加者があったことは、庄内セミナーが幅広い関心を引き起こしたことの証左でもあります。こうした成果を踏まえて庄内セミナーをより充実したものに発展させたいと考えております。

さて、今回の庄内セミナー開催にあたっては本当に多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。

まず、企画の当初からさまざまな形で私たちの準備に伴走してくださった酒田市長・阿部寿一氏をはじめとする酒田市役所、酒田市教育委員会の皆さまに感謝いたします。酒田市のご協力がなければ多くのプログラムは実現しなかったと思います。

次に芭蕉と『おくの細道』に関する貴重なご講演・ご講義をしていただいた柳生正名氏、金森敦子氏、昨年度のテーマであった藩校・致道館において講じられた徂徠学を福澤諭吉との関連からご講演いただいた小室正紀氏、芭蕉と象潟について熱く語っていただいた斎藤一樹氏にも心より感謝したいと思います。

さらにセミナーを通じて地元の若い方々との交流の機会を持ちたいという私たちの希望に応えて、東北公益文化大学の学生に対してセミナーへの積極的な参加を呼びかけるばかりでなく、学生の参加に際してさまざまな形で便宜をはかってくださった同大学の黒田昌裕学長、表實副学長、遠山茂樹教授、白迎玖准教授をはじめとする教職員の方々に心よりお礼を申し上げます。すばらしい学生さんたちでした。

関連企画も含めてセミナーのそれぞれの局面で私たちを支えてくださった方々―山形県庄内観光コンベンション協会、酒田市商工会議所、鶴岡市役所、鶴岡商工会議所、慶應義塾卒業生の同窓会組織である鶴岡三田会、酒田三田会にもお礼を申し上げます。

もちろん、学生たちのプレゼンテーションに対するアドバイスやコメントを賜ったコメンテーターの方々のご協力がなければセミナー自体が成立しなかったことは言うまでもありません。あらためて感謝申し上げます。と同時に、一般公開した講演やプレゼンテーションに多数の市民の方々のご参加があったことは私たちセミナー関係者や学生たちにとってとても大きな励みとなりました。ありがとうございました。

しかし、私たちが何よりも感謝したいのは、限られた時間の中で「心と体と頭」を目一杯に使って見、聞き、調べ、考え、議論し、まとめ、発表にまでこぎつけてくれた合宿セミナーの参加者たちです。少し大げさかもしれませんが、学生たちの取りまとめ役を買って出してくれた慶應義塾卒業生の西村崇君をはじめ、セミナー参加者の頑張りがなければセミナーの開催は意味がなかったとさえ思っています。セミナーを作り上げ、成功に導いてくれたのは彼らの存在にほかなりません。彼らには、ぜひともこの力と経験を次のセミナー参加者へ伝えていってほしいと思います。

最後になりましたが、庄内セミナーへのよりいっそうのご理解とご支援をお願い申し上げまして、庄内セミナー・スタッフ一同の謝辞とさせていただきます。皆さま、本当にありがとうございました。

慶應義塾大学教養研究センター  
2010 年度「庄内セミナー」報告書

---

2011 年 3 月 21 日発行  
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター  
代表者 不破有理

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1  
TEL 045-563-1111 (代表)  
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp  
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2011 Keio Research Center for the Liberal Arts  
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。